

546
124



始



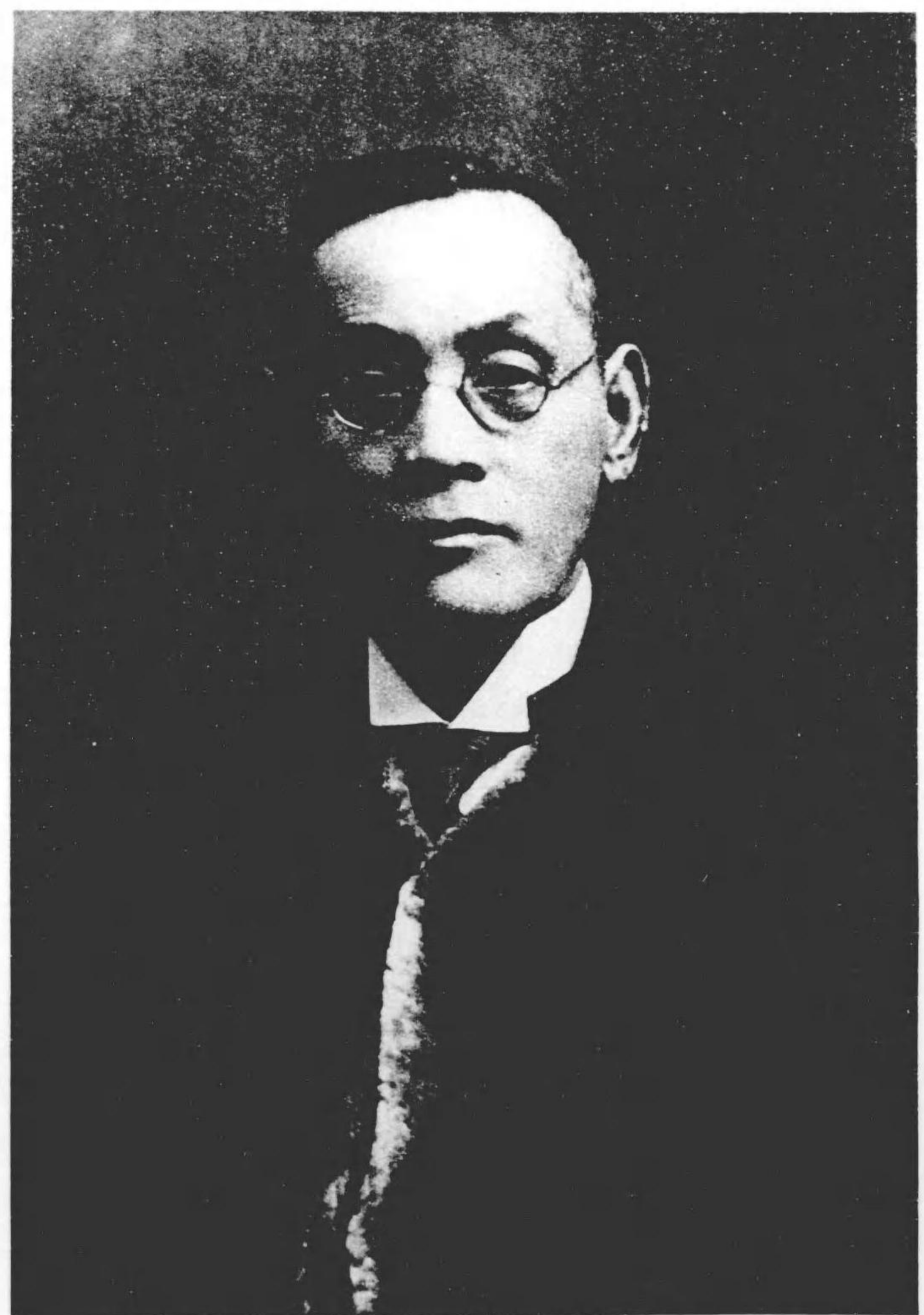


その
おもかげ

大正
15. 4. 27
内交



大正三年小照



大正二十二年小照

はしがき

二階堂保則君は本邦統計學界の權威にして四十年の永きに亙り終始一貫口に筆に斯道の爲め多大の貢獻せられしことは今更記するまでもありません退官後は専ら教壇に立たれ稀代の良師として大に渴仰せられたるが病を以て遂に逝去せられたるは洵に痛惜に堪へぬ次第であります。

君の逝去せられたる後間もなく私は生前知遇を辱ふせる緣故により未亡人つる子夫人より委託を受け故人の著作「統計學綱要」の未充分を僅かばかり編輯して舊臘刊行の運びに至りました引續き遺稿編纂の議起りましたが故人の述作は其の種類多くして頗る浩翰に上り且つ統計表多數の爲め之を急速に集成刊行するの容易でないことが分りましたそれで取り敢へず二種の講演筆記と毎年知人に差出されたる年賀狀並に幾多の日記中より大正八年の湯河原日記、同九年國勢調査宣傳の爲め各地へ出張せられたる當時の日記等を選集しました。

故人は統計數字の研究解説を職掌とせられたる傍書畫骨董の趣味多く濫蓄深かりしことは毎年の賀狀によりても一斑を察せられますが其の詞藻亦極めて豊富にして詩、和歌、狂歌、俳句一として佳ならざるなく更に寫生畫等にも堪能であられたことは實に驚異に値ひします而かも日記を始め何れも皆紙片又は雜記帳に手書されたもので無論他に示すものでなく申さば私事に屬します故之を集録すること如何と存じましたが本書は在りし日の其の傍を偲ぶ趣旨により未亡人より生前厚誼を辱ふせる各位に限り記念の爲め贈呈いたすのでありまして故人の私生涯の一端を偲ぶには既刊文書類を再録する舉に比し却て興趣多からんと信じます尙ほ略歴一斑と著作論文の目次等を卷末に附しました定めし遺漏も少なからぬことと存じます。

本書は一に未亡人の企圖に成りましたもので私は疾く之を編輯すべき筈でありましたが中途より身邊多忙の事情生じ甚だ延引いたしましたことを陳謝して置きます。

大正十五年四月

編纂校訂者 布川 孫市 識

そのおもかげ目次

肖像

はしがき

第一篇 講演

青年の死亡……………一

本邦婦人の死亡率に就て……………一〇

第二篇

新年の賀辭……………三三

第三篇 旅行日記

目次

一

一、湯河原日記……………三五五

二、北越紀行……………三九一

三、關西紀行……………四〇五

四、東北及九州紀行……………四三四

五、北海道及樺太紀行……………四三〇

第四篇 詞藻

一、和歌……………四六五

二、狂歌……………四六八

三、俳句……………四七一

附録

一、略歴……………一

二、著書論文一覽……………六

そのおもかげ

第一篇 講演

青年の死亡 (社會政策學會講演)

目次

一、歐洲に於ける生産率及死亡率の趨勢

二、日本に於ける生産率及死亡率の概況

三、各國年齢死亡率の推移

四、注目すべき日本の青年の死亡

五、青年の死亡率増加の原因は何ぞ

六、就中研究を要する五種の死亡原因

七、結核性疾患に因る死亡の細觀

八、文化の程度と結核性疾患

九、日本の死亡統計上の一秘事

十、是亦歸する所は結核性疾患

始めて斯様な御席へ出まして烏澁がましくも御話を申し上げます、甚だ整はないことを申上げるかも知れませぬ。

今日御通知にございました通り私の御話の題は「青年の死亡」といふのであります、豫てより統計局に居りました公務として又私の研究として従事致して居りました死亡統計の中の一部を御披露申し上げますのでございます、統計に興味を御持ちになつて居る方は或は疾に御承知になつて居ることであるかも知れませぬ。日本の死亡統計の上で最も重要な問題が二つある、それは小兒の死亡、もう一つは青年、壯年の死亡、是が他の文明國の死亡統計と比しまして殊に注意しなければならぬ特徴がある、其特徴は纏て我國民の全體の上に係る最も重要な問題を含んで居るものであると自分は信じて居ります、其判り切つた御話を少し申上げて見たいと思ひます。

一、歐洲に於ける生産率及死亡率の趨勢

御承知の通り歐羅巴に於ける人口問題は必ずしも一つや二つではございますまいが、殊に重要な問題として諸國に於て研究せられて居りますものは生産の減耗して來ることでございます、就中佛蘭西の如きは適切に此問題を攻究することが迫つて來たのであります、佛蘭西ならざる他の諸國に於きまして佛蘭西程に著しくはありませぬ

せぬが随分研究しなければならぬ程度にまで進んで居ります、獨逸にしましても、又英吉利にしましても、殊に英吉利などは随分ひどく減耗して居る。

歐洲四國毎五年平均生産率（人口千に付）

	英吉利	佛蘭西	獨逸	奧地利
一八四一—一八四五年	三二、三	二八、一	三六、七	三九、六
一八四六—一八五〇年	三二、八	二六、七	三五、六	三七、一
一八五一—一八五五年	三三、九	二六、一	三四、五	三六、五
一八五六—一八六〇年	三四、四	二六、六	三六、〇	三八、七
一八六一—一八六五年	三五、一	二六、七	三六、八	三八、九
一八六六—一八七〇年	三五、三	二五、九	三七、五	三八、五
一八七一—一八七五年	三五、五	二五、五	三八、九	三九、三
一八七六—一八八〇年	三五、四	二五、三	三九、二	三八、七
一八八一—一八八五年	三三、五	二四、七	三七、〇	三八、一
一八八六—一八九〇年	三一、四	二三、一	三六、五	三七、六
一八九一—一八九五年	三〇、五	二二、四	三六、三	三七、三
一八九六—一九〇〇年	二九、二	二二、〇	三六、〇	三七、〇

一九〇一—一九〇五年	二八、二	二一、三	三四、三	三五、六
一九〇六—一九一〇年	二六、三	一九、九	三一、六	三三、七
一九一一年	二四、四	一八、七	二八、六	三二、二
一九一二年	二三、八	一九、〇	二八、三	三一、三
一九一三年	二三、九	二九、〇	—	—

其一例として茲に挙げましたのは千八百十一年から毎五年の平均生産率を作りまして、其中英吉利、佛蘭西、獨逸、奧地利と四ヶ國を擧げて見ましたが、斯様に出産率が減耗しつつある、英吉利で一番高かつた時には人口千に付きまして三五、五%でありましたものが今や二四%に下つて居るのであります、佛蘭西は茲に擧げました八百四十年代、それよりもつと以前に即ち八百年の初頭から既に減耗しつつありまして、八百四十五年頃には最早餘程減耗したのであります、それ故に今日から追想致しまして四十年代から今日までの減耗の仕方を見ますと餘り著しくなく、併ながら今では平均二〇%以下に下つて居るので、歐羅巴の諸國中白耳義と列んで生産率の最も減耗したる國の一である、奧地利の如きはまだ減耗して居らない、又獨逸は近き平均が三

一%以上でありますから餘り著しく減耗して居らぬのでありますけれども、其以前から通算して見ますと容易ならざる減耗の仕方をして居るのであります、けれども歐羅巴の諸國は此生産率が著しく減耗すると同時に死亡率は又たそれより以上に減少しつつある。

歐洲四國毎五年平均死亡率 (人口千に付)

	英吉利	佛蘭西	獨逸	奧地利
一八四一—一八四五年	二一、四	二二、七	二六、一	三〇、〇
一八四六—一八五〇年	二三、三	二三、九	二七、五	三六、五
一八五一—一八五五年	二二、七	二四、一	二七、一	三四、二
一八五六—一八六〇年	二一、八	二三、八	二五、六	二八、七
一八六一—一八六五年	二二、六	二二、九	二五、九	三〇、〇
一八六六—一八七〇年	二二、四	二四、四	二七、七	三一、五
一八七一—一八七五年	二三、〇	二五、〇	二八、二	三二、六
一八七六—一八八〇年	二〇、八	二二、四	二六、一	三〇、五
一八八一—一八八五年	一九、四	二二、二	二五、七	三〇、二

一八八六—一八九〇年	一八、九	二二、〇	二四、四	二八、八
一八九一—一八九五年	一八、七	二二、三	二四、三	二七、八
一八九六—一九〇〇年	一七、七	二〇、七	二一、三	二五、四
一九〇一—一九〇五年	一六、一	一九、六	一九、九	二四、二
一九〇六—一九一〇年	一四、七	一九、二	一七、五	二二、四
一九一一年	一四、六	一九、六	一七、三	二一、九
一九一二年	一三、三	一七、五	一五、六	二〇、五
一九一三年	一三、七	一七、七	—	—

是は千八百四十一年から毎五年の平均を擧げて見たのであります、英吉利などは最早一三%以下に居る、斯様に生産率の減耗以上に死亡率が減退して居るのでありますから自然増加率は以前に比べて餘り下らない、就中獨逸、和蘭の如き或は自然増加率は却て高くなつて居る位であります、偶々佛蘭西は出生率の減耗の著しいにも拘はらず、死亡率の減少の仕方が他の諸國の減少の仕方の如く著明でない、それが爲に死亡率よりも出生率が低くかつたといふやうなことが近い年にありました、それ故最も生産率の減耗に就て適切に苦痛を感じて居るのであります、他の諸國は死亡率減少が

著しくありますから生産率が斯様に減耗して参りましても左までに苦痛を感じて居らぬ、併ながら死亡は無限に減少することが恐くは出来ない、申上げるまでもなく生物は必ず之に伴ふ死がある、それ故に人間に死を無くするといふことの出来ない以上は死亡率を絶対に低くするといふことは全く出来ないであります、或程度までは必ず死なねばならぬ、幾らまで死亡率を下げらるか、是は未知の問題であります、英領の南洋諸國就中ニウ、ゼーランドなどの例を見ますと、人口千に付て九乃至八にまで下つた所もあります、併し是は植民地でありまして、老若幼者の數が少く青年の死亡率の低き者が多數を占めて居る所に於ては左様な事實も有り得る、併し各年齢が適當に存する邦國に於ては思ふに死亡率が左程低く下らないであらうと思ふ、歐羅巴の事實に付て申しますといふと、スカンデナビアの三國、是が最も死亡率の低き邦國である、併ながら一三%以下に下つた例は殆ど無い、稀に一三%以下に下つたこと（一九一〇年のデンマーク）があつても直に翌年は一三%以上に復すといふやうな状況であります、それ故に今日の情勢から考へれば死亡率は一三%を以て最低限と云はなければ

ばならぬかも知れぬ、既に英吉利の如きは其最低限に近い所まで到達して居るのである、死亡率をそれ以上に低下せしむるといふことは恐くは不可能であるかも知れぬ、然るに小児の生れる方の側に於ては其原因に付ては段々種々の研究者もありまして、或は人類の進化に伴ふ必然の現象であるといふ人もあり、或は又人為に其處に至らしむる、或は文化の程度の進むに従つて其悪い影響として生産率の減耗は免るべからざるものであるとも言ひます、それ故に其原因を採りまして、其原因に對して、防止の策を計りませぬならば或は何處まで生産率は減耗して行くか判らぬのであります、それ故に今日に於ては生産率の減耗よりも死亡率の減少の程度の強ひ邦國に於ては人口の自然増加は維持して行くのでありますけれども、而も其自然増加がいつまで維持されるか知れぬ、従つて出生率の減耗といふことに付て深く考慮を要する次第であらうと思ふ、以上は私が事新しく申上げるまでもなく、皆様の疾くより御承知のことであらうと思ふ、先づ其一般に通ずる情勢を申上げまして、而して本邦の事實に移らなければならぬと思ひます。

二、日本に於ける生産率及死亡率

本邦の生産率及死亡率を前に掲げた歐洲の例に倣ふて五年平均と爲せば左の如くであります、

	生産率	死亡率
明治五年及六年	二〇、七	一六、〇
明治七年—十一年	二五、三	一八、四
明治十二年—十六年	二五、二	一八、三
明治十七年—二十一年	二七、四	二〇、九
明治二十二年—二十六年	二八、六	二一、一
明治二十七年—三十一年	三〇、二	二〇、五
明治三十二年—三十六年	三二、二	二〇、五
明治三十七年—四十一年	三一、五	二一、〇
明治四十年	三三、九	二一、九
明治四十三年	三三、九	二一、一

歐洲と全く反對に生産率も減耗の様子なく、死亡率も亦寧ろ増高して居るのであります、死亡率の明治十七年から二十一年及二十二年から二十六年の二期に一時高かつたことのあるが爲めに一寸眼を眩惑するやうではありますが、此異常の年即ち十九年の虎列刺、二十五六年度の痘瘡赤痢等の大流行ありたる年を除外すれば少しも減少せずして年々増高することが知られます、何故に本邦の死亡率が爾かく減少せざるか、それには生産率が高いといふことの影響も働いて居ることは勿論であります、他に尙ほ重大の原因の存することを思はねばなりません、而して其原因は何であるか、私はそれを探ることが私の任務として爲さねばならぬことのやうに思ひます。

私の第一に指を染めたのは年齢別の死亡率であります、死亡率の増減はどの年齢階級に於て最も著しいか、それを先づ死亡率の減少する歐洲の諸國から見ようと試みました。

三、各國年齢別死亡率の推移

茲に挙げましたのは英吉利と佛蘭西と獨逸との三國の總死亡率、並に各年齢者の死亡率がどんなに増減して來たかといふことを見る爲めに作つた表であります。

英吉利に於ける年齢別死亡率比較

年齢別	七十一年間の比較			四十年間の比較		
	(a) 1841-1850年	(b) 1851-1860年	(c) 1861-1870年	(a)の百に上記指數に由りて對する(b)の算出したる平均一年の増減歩合の指數	(b)の百に上記指數に由りて對する(c)の算出したる平均一年の増減歩合の指數	(c)の百に上記指數に由りて對する(a)の算出したる平均一年の増減歩合の指數
0-5	22.5	20.4	15.1	70.70	74.51	100.00
5-10	66.0	63.4	46.0	69.70	72.56	100.00
10-15	9.0	6.5	3.3	40.00	55.36	100.00
15-20	5.3	3.7	2.1	39.22	59.46	100.00
20-25	3.7	2.5	1.3	35.00	55.56	100.00
25-30	3.1	2.1	1.1	35.48	53.39	100.00
30-35	2.5	1.7	0.9	35.00	55.56	100.00
35-40	1.9	1.3	0.7	36.84	52.63	100.00
40-45	1.3	0.9	0.5	38.46	50.00	100.00
45-50	0.7	0.5	0.3	42.86	50.00	100.00
50-55	0.3	0.2	0.1	42.86	50.00	100.00
55-60	0.2	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
60-65	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
65-70	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
70-75	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
75-80	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
80-85	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
85-90	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
90-95	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00
95-100	0.1	0.1	0.1	42.86	50.00	100.00

そのおまかげ

六五―七五	六三、六	六五、〇	五八、八	九三、四	(1100)102	九〇、五	(1100)102
七五―八五	一四二、五	一四三、二	一三七、二	八九、九	(1100)104	八九、四	(1100)104
八五―	三〇一、〇	三〇六、三	二九〇、八	八六、四	(1100)101	八四、五	(1100)102

111

獨逸に於ける年齢別死亡率比較

三十九年間の比較

總死亡率 年齢別	(a) 一八七二― 一八八〇年	(b) 一九一〇― 一九一一年	(a)の百に 對する(b) の指數	上記指數に由りて 算出したる平均一 年の増減歩合
〇―一	二六、八	一六、七四	六二、四六	(1100)九六三
一―二	二九、四	二〇一、七〇	六八、五九	(1100)八〇五
二―五	七〇、	三四、四三	四九、一九	(1100)三〇三
五―一〇	二五、	八、五六	三四、二四	(1100)六八六
一〇―一五	八、七	三、二七	三八、九三	(1100)五六六
一五―二〇	四、一	二、二〇	五三、六六	(1100)一八八
二〇―二五	五、一	二、六七	五二、二五	(1100)一二二
二五―三〇	七、五	四、五二	六〇、二七	(1100)一〇一九
三〇―三五	八、八	四、九八	五六、五九	(1100)一一三
	一〇、〇	五、五九	五五、九〇	(1100)一三一

三五―四〇	一一、八	六、八〇	五七、六三	(1100)〇八六
四〇―四五	一三、四	八、二一	六一、二七	(1100)九九三
四五―五〇	一五、九	一〇、七八	六七、七九	(1100)八二六
五〇―五五	二一、	一四、八七	七〇、八一	(1100)七四八
五五―六〇	二九、	二一、七六	七五、〇三	(1100)六四〇
六〇―六五	四一、	三二、四二	七九、〇七	(1100)五三七
六五―七〇	六三、	五〇、二四	七九、七五	(1100)五一九
七〇―七五	九四、	七七、九六	八二、九四	(1100)四三七
七五―八〇	一四五、	一二二、八〇	八四、六九	(1100)三九三
八〇―	二三四、	二二五、九六	九二、二九	(1100)一九八

佛蘭西に於ける年齢別死亡率比較

三十一年間の比較

總死亡率 年齢別	(a) 一八七二― 一八八〇年	(b) 一九〇二― 一九〇二年	(a)の百に 對する(b) の指數	上記の指數に由りて 算出したる平均一年 の増減歩合
〇―一	二二、四	二〇、八	九三、三〇	(1100)二一六
	二一〇、	* 二〇八、四	五一、六二	(1100)二四一

一一五	二九、	*一三、一	四五、二七	(一一)一、四〇三
五一〇	六、七	四、六	六八、六六	(一一)一、〇一一
一〇一五	四、三	四、二	九七、六七	(一一)〇、〇七五
一五二〇	六、〇	五、一	八五、〇〇	(一一)〇、四八四
二〇二五	八、四	七、一	八四、五二	(一一)〇、四九九
二五三〇	九、八	八、〇	八一、六三	(一一)〇、五九三
三〇三五	九、八	八、二	八三、六七	(一一)〇、五二七
三五四〇	一〇、一	九、七	九六、〇四	(一一)〇、一二八
四〇四五	一一、四	一一、二	九八、二五	(一一)〇、〇五六
四五五〇	一三、〇	一三、〇	一〇〇、〇〇	
五〇五五	一七、	一六、八	九八、八二	(一一)〇、〇三八
五五六〇	二二、	二三、六	一〇七、二七	(十)〇、二三五
六〇六五	三三、	三三、九	一〇二、七三	(十)〇、〇八八
六五七〇	五〇、	五〇、六	一〇一、二〇	(十)〇、〇三九
七〇七五	八〇、	八二、一	一〇二、六三	(十)〇、〇八五
七五八〇	一一三、	一二五、三	一〇二、七〇	(十)〇、〇八七
八〇一	二〇一、	二二〇、八	一〇九、八五	(十)〇、三一八

備考 * 印を附したるは一八九九—一九〇二年に調査なきを以て一九〇七—一九一〇年の調査を代用した
 ○ り従て此二年齡級の増減歩合は他の各年齢級と算出の年期を異にす

私の持つて居ります材料が、甚だ不揃でありまして年齢別の死亡率を見ますのに、英吉利の材料は七十年間と四十年間との二様に見、佛蘭西の材料は三十一年間を見、獨逸の材料は三十八年間を見たのであります、其七十年間、四十年間、三十九年間、三十一年間といふやうに大分觀察の期間が違つて居りますから其間に於てどれ程増加したか、どれ程減少したかといふことは比較になりませぬ、それで同じ單位に戻す爲めに平均一年の増加又は減少の割合が、どんなであるかといふことを求めて、即ち死亡總數が七十年の間に於て平均一年に英吉利はどれ程増加したか、佛蘭西はどうか、獨逸はどうかといふことを見ますといふと、獨逸が最も著しく減少して居る、それに次いで英吉利、それに次いで佛蘭西といふやうに三國共に總數に於ては何れも減少して居るのであります。

然るに日本はどうかであるかといふと、日本は明治二十一年から始めて年齢別死亡率

を觀察する材料があるのであります、即ちそれに由りて死亡率を算出し、指數を求むると左の如くであります。

日本に於ける年齢別死亡率比較(一) (各年齢級人口千に付)

年齢別	(a) 二一—二三年	(b) 三九—四三年	(a)の百に對する指數	(b)の百に對する指數	上記指數に由りて算出せる平均一年の増減歩合
總死亡率	一九、八三	二〇、八〇	一〇五、六四	(+)〇、二五六	
〇—五歳	五〇、五六	六〇、三五	一一九、三六	(+)〇、八八〇	
(再掲) 一歳	一三六、三五	一七五、一三	一二八、四四	(+)一、二九四	
一—二歳	四一、〇六	四三、七三	一〇六、五〇	(+)〇、二九五	
二—五歳	一八、四〇	一九、八五	一〇七、八七	(+)〇、三五八	
五—一〇歳	六、一七	五、六四	九一、四一	(+)〇、三九五	
一〇—一五歳	四、一四	四、二六	一〇二、九〇	(+)〇、一三二	
一五—二〇歳	六、六三	八、二五	一二四、四三	(+)一、一一一	
二〇—二五歳	八、七五	九、九〇	一一三、一四	(+)〇、五九七	
二五—三〇歳	八、八七	九、〇六	一〇二、一四	(+)〇、〇九六	

三〇—三五歳	九、六五	八、八一	八九、二六	(-)〇、四八八	
三五—四〇歳	一〇、八一	九、八八	九一、四〇	(-)〇、三九一	
四〇—四五歳	一二、〇八	一〇、五〇	八六、九三	(-)〇、五九四	
四五—五〇歳	一四、四八	一三、四九	九三、一六	(-)〇、三一一	
五〇—五五歳	一八、九三	一七、一九	九〇、八一	(-)〇、四一八	
五五—六〇歳	二四、二四	二四、〇六	九九、二六	(-)〇、〇三三	
六〇—六五歳	三七、一七	三七、六七	一〇一、三五	(+)〇、〇六一	
六五—七〇歳	五三、九二	五〇、四八	九三、六二	(-)〇、二九〇	
七〇—七五歳	八〇、〇九	八一、五八	一〇一、八六	(+)〇、〇八四	
七五—八〇歳	一二〇、一三	一一五、六五	九六、六七	(-)〇、一五一	
八〇—歳	二〇三、五九	一五九、八一	七八、五〇	(-)〇、九七七	

日本に於ける年齢別死亡率比較(二) (各年齢級人口千に付)

年齢別	(c) 二四年	(c) 二四—二八年	(b)の百に對する指數	(d)の百に對する指數
總死亡率	二一、〇七	二一、二一	九八、七二	九八、〇七
(再掲) 〇—五歳	五一、七二	五八、二一	一一八、六二	一〇五、三九

〇—一歳	一四八、〇三	一六六、二二	一一八、三一	一〇五、三六
一—二歳	三九、三一	四五、一〇	一一一、二四	九六、九六
二—五歳	二〇、八〇	二二、四四	九五、四三	八八、三八
一—五歳	二五、八三	二八、四六	一〇二、七九	九三、二九
五—一〇歳	六、三一	七、一八	八九、三八	七八、五八
一〇—一五歳	四、四四	四、五八	九五、五五	九三、七八
一五—二〇歳	七、一八	六、九五	一一四、九〇	一一八、七一
二〇—二五歳	九、一五	九、三六	一〇八、二〇	一〇五、七七
二五—三〇歳	九、三八	九、一〇	九六、五九	九九、五六
三〇—三五歳	九、三八	一〇、二二	九三、九二	八六、二〇
三五—四〇歳	一一、二六	一〇、八七	八七、七四	九〇、八七
四〇—四五歳	一二、八九	一二、四四	八一、四六	八四、四〇
四五—五〇歳	一五、二九	一四、七一	八八、二三	九一、七一
五〇—五五歳	二〇、九〇	一九、〇三	八二、二五	九〇、三二
五五—六〇歳	二八、六五	二八、二一	八三、九七	八五、二九
六〇—六五歳	四〇、七五	三八、九〇	八五、八〇	八九、一三
六五—七〇歳	五九、四七	五五、九四	八四、八八	九〇、二四

七〇—七五歳	八八、三六	八三、五二	九二、三三	九七、七五
七五—八〇歳	一三一、一〇	一二六、七一	八八、二二	九一、二七
八〇—歳	二〇八、九七	一九二、三七	七六、四八	八三、〇七

誠に御話が前後致しますがもう一度茲で本邦の死亡率の推移に就て述べさせていたゞきます明治五年から以來本邦の死亡率は増加して居る、明治十七年、乃至二十一年二十二年乃至二十六年、此二つの平均率が一時に著しく上つて居ります、それは虎列刺、赤痢等の非常に流行した影響であることは前にも申しました、若し斯様な異常の年がなかつたとしたならば死亡率の曲線は各年遞次に増高したであらうと思はれます、死亡率が斯様に減退せずして寧ろ増加する、それと同時に小兒の出生する割合も亦歐羅巴に於ては何れも減少しつつあるにも拘らず、日本に於ては逐年増高して少しも減退して居らぬ、尤も一時下つて居る所がありますが、それは三十七八年の戦役の影響を受けて一時婚姻率が非常に下り、それに隨伴して生産率が低かつたのでありますが、之を平均しますと矢張り上つて居るのであります、それでありますから今日に於ては日本の生産率は減耗せず、歐羅巴の諸國と同一の歩調を取つては居らないのであ

りますが、それと同時に死亡率が下らない、寧ろ上る傾向がある、そこで何故に日本の生産率は減耗せざるや、何故に歐羅巴諸國と同一の歩調を取らざりしや、又何故に日本の死亡率は低下せざるやといふことは重要な問題であらうと思ひます、其生産率の減耗せざることに付きましても私は多少の考を持つて居ります、又生産率の減耗せざる今日の状態が何時まで維持せらるゝか、臆ては歐羅巴と同じ運命に陥る時機がありはせぬかといふやうなことに就ても私は何程かの研究を致した積りであります、けれども今日はそれに論及せぬことにします、そこで私の今晚の問題は何故に日本の死亡率が減少せぬかといふことから入ります、何故に死亡率が減少せざるや、此日本の事態を説明するに當りまして何故に歐羅巴の諸國に於ては死亡率が減少したるや、其迹を尋ねてさうして之を日本の状態に論及することが寧ろ説き易いと思ふ、そこで歐羅巴の諸國に於ける各年齢の死亡率を取り其指數を求め其指數から増減歩合を算出して見ました(前掲の表)、それは英吉利は七十年間と四十年間との觀察、佛蘭西は三十九年間、獨逸のは三十九年の觀察であります、此一番幼弱の階級零歳より五歳まで

の小兒に於ては各國に就て適當なる比較の材料を持ちませぬ爲めに、之を細かに分けまして零歳から一歳、一歳から二歳、二歳から五歳、或は一歳から五歳といふやうに再掲して、比較に便することにした、それから五歳から八十歳まで各五歳階級と爲しました、英吉利は其材料の關係によりて二十五歳以上を十歳階級にしました、又三國は八十歳以上を一括しましたが英吉利のは八十五歳を一括しました、是で見ますと英吉利は各年齢共に七十年間の觀察に於ても四十年間の觀察に於ても低下して居ります、唯四十年の觀察に由る一年平均は七十年の觀察に由る一年平均より低下の歩合が大であります、是は要するに近年に至りて低下が著しくなつたと思はれます、又獨逸を見ますると三十九年間であります、英吉利の七十年間に比しては無論のこと、其四十年間と比しても毎一年の平均減少歩合が大であります即ち總死亡率に於ては英吉利の二に對する獨逸は三に當ります、幼弱なる者に就ては兩國の正しき比較が出来ませぬが是も獨逸の方が著しく低下した様に見ます、併し青年に於ては兩國共に著しく其間に大差がないと申してよい、それから佛蘭西を見ますると總死亡率に於て

は英吉利の四十年間の三分一で若い階級に於ては英吉利よりも遙に強く或は獨逸よりも強い位に減少して居りますが、青年は既に兩國より遙に弱き低下歩合であります。四十年以上の階級になりますと時に或は増加した年齢階級もあるのであります、一番著しく低下して居る年齢階級は何處であるかといふと、此三國を通じて幼者の死亡率が著しく低下した、それに續いては若い年齢即ち青年の死亡率が非常に減少した、而して其最幼者の死亡率の減少は三國共に多少の差がありますけれども其減少したといふことは一樣であります、青年の死亡率の減少は獨逸と英吉利に於て著明に見られるが、佛蘭西に於ては餘り著明でない、是は餘程注意すべき點であると思ひます、而して退いて日本の此狀勢を見るとどうであるか、二十二年間の觀察によれば歐洲に於て低下しをる幼者の死亡率は本邦に於て著しく上昇して居ります、又青年の死亡率就中十五歳より二十歳の年齢の死亡率が非常なる上り方で、二十歳より二十五歳の年齢階級も随分昇つて居る、それから三十歳以上六十歳までは各年齢階級共低下して居る、六十歳以上になりますと又多少増率し、さうして八十歳以上になりますと大に死亡率が

減少して居ます、歐羅巴に於ける以上三國の事實に據りますと、幼者及青年、壯年の死亡率の大に減少したといふことが、全體の死亡率を低下せしめたる原因であります、日本に於ては死亡率全體が既に減少して居らない、それは歐羅巴に於て大に減少したる所の各年齢の死亡率が日本に於ては寧ろ増加して居るからであります。

日本各年に於ける年齢別死亡率 (總數(人口千に付))

總死亡 年齢別	二一—二三年	二四—二八年	二九—三三年	三四—三八年	三九—四三年
〇—五	一九、八三	二一、二一	二〇、三四	二〇、五〇	二〇、八〇
(再掲)	五〇、五六	五八、二一	五九、二五	五六、五六	六一、三五
〇—一	一三六、三五	一六六、二二	一七一、六二	一七二、一三	一七五、一三
一—二	四一、〇六	四五、四〇	四二、九一	三八、〇二	四三、七三
二—五	一八、四〇	二二、四一	二〇、七六	一七、〇八	一九、八五
五—一〇	六、一七	七、一八	六、一六	六、〇三	五、六四
一〇—一五	四、一四	四、五八	四、二四	三、九七	四、二六
一五—二〇	六、六三	六、九五	六、八一	七、五八	八、二五
二〇—二五	八、七五	九、三六	八、六六	八、二六	九、九〇

二五—三〇	八、八七	九、一〇	九、〇一	八、六五	九、〇六
三〇—三五	九、六五	一〇、二二	八、七八	九、〇三	八、八一
三五—四〇	一〇、八一	一〇、八七	一一、四六	九、五二	九、八八
四〇—四五	一一、〇八	一一、四四	一一、四四	一一、六三	一〇、五〇
四五—五〇	一四、四八	一四、七一	一二、九六	一三、一九	一三、四九
五〇—五五	一八、九三	一九、〇三	一七、六七	一七、六二	一七、一九
五五—六〇	二四、二四	二八、二一	二三、六一	二四、六二	二四、〇六
六〇—六五	三七、一七	三八、九〇	三二、二七	三四、八八	三四、六七
六五—七〇	五三、九二	五五、九四	五二、八七	五六、〇四	五〇、四八
七〇—	一一三、六七	一一五、三七	一〇四、九八	一一〇、八七	一〇九、六四

重複する様ではありますが本邦の年齢別死亡率を比較します、即ち最初は二十一年から二十三年までの三年間の平均、それから後は各五年平均の年齢別死亡率を列記致しますと右の通りでありまして、其總數に於ては二十四—二十八年に於て異例はありますが大體幾分づゝ増加する位のことには過ぎませぬ、零歳より五歳までの小兒に於ては此異例が三十四—三十八年の減少と爲りて現はれましたが全體に其増加は總數

の比でない、更に零歳より一歳までの乳兒に於ては異例もなく著しい増加を示して居ます、零歳より五歳までに於ては最初の率と最後の率との差が高きこと一〇、七九でありましたが、零歳より一歳までのみを見れば此差が實に三八、七八となります、それ故一歳以上の小兒に於ては此差が低くなる、けれども矢張最初よりも最後の率が高い、即ち一歳以上二歳までは高きこと二、六七、二歳以上五歳まで一、四五であります、それから五歳以上十歳は最初の率よりも最後の率が僅かではあるが低い、十歳以上十五歳は最近の率が少しく高いが其差は甚だ僅かであります、然るに十五歳以上二十歳は恰も零歳より一歳までの乳兒と同様に一も異例なく各年上昇して結局最初の率より最後の率の高きことが一、六二であります。一、六二、それは甚だ少ないものゝやうであります。全體としても六乃至八の中に一、六を増したのでありますから、分量としては決して少ないものでありません、二十歳以上二十五歳は高低起伏はして居りますが是亦結局最後の率の高きこと一、一五でありまして其差や決して少くありません、二十五歳以上三十歳は餘ほど差が少なくなりまして〇、一九であります、それより以

上の年齢者になりますと高低がありとして結局は寧ろ減少して居ます、本邦の年齢死亡率を累年に比較しますと先づ斯う云ふ状況であります、して見ますると全體の死亡率も増加しますが、主として零歳より一歳までの乳兒の死亡率が著しく増加する、一歳以上五歳までの小兒に於ても可なりに増加する、それから青年壯年の者即ち十五歳以上二十歳、二十歳より二十五歳といふ年齢階級に於て殊に著しき死亡率の増加があることが明かに知らるゝのであります。

日本各年に於ける年齢別死亡率 (男)(人口千に付)

年齢別	二一―二三年	二四―二八年	二九―三三年	三四―三八年	三九―四三年
總死亡率	二〇、二八	二一、六四	二一、〇三	二〇、四六	二〇、七二
(再掲)	五	五三、二二	六一、八〇	六二、六五	五八、六一
〇―一	一四四、七七	一七五、六〇	一八二、二五	一八一、七三	一八四、二九
一―二	四二、九九	四六、五〇	四六、三二	三八、三五	四四、〇五
二―五	二〇、〇二	二二、七八	二〇、九〇	一四、七〇	一九、四五
五―一〇	六、三〇	七、三一	六、三五	五、三四	五、四〇

一〇―一五	四、〇八	四、四五	四、〇五	三、三二	三、四三
一五―二〇	六、四三	六、六六	六、二一	六、五七	七、〇三
二〇―二五	八、二〇	九、〇三	八、〇三	八、三九	八、九五
二五―三〇	八、一一	八、五〇	八、二九	七、五〇	七、九四
三〇―三五	八、二一	九、三一	八、一四	七、八三	七、五七
三五―四〇	一〇、〇〇	一〇、一一	一〇、一六	八、五八	八、八〇
四〇―四五	一二、二三	一二、六七	一一、二九	一一、五一	一〇、二八
四五―五〇	一五、七四	一六、一五	一四、八六	一四、三五	一四、四四
五〇―五五	二一、二一	二二、七一	一九、七五	一九、八三	一八、一二
五五―六〇	二九、七二	三一、九九	二六、九五	二八、〇八	二七、二六
六〇―六五	四一、八九	四三、八一	四二、四三	三九、四九	三九、三六
六五―七〇	六〇、〇四	六二、一三	五九、六〇	六二、七四	五六、四八
七〇―	一一二、一一	一一一、七一	一一三、〇五	一一四、八五	一一二、〇三

日本各年に於ける年齢別死亡率 (女)(人口千に付)

年齢別	二一―二三年	二四―二八年	二九―三三年	三四―三八年	三九―四三年
總死亡率	一九、五三	二〇、七七	二〇、一一	二〇、四二	二〇、八七

〇―五	四七、九九	五五、五五	五六、五九	五四、四三	五九、九七
(再掲) 〇―五	一二七、六六	一五六、五九	一五八、九三	一六二、一八	一六五、七一
一―二	三九、六五	四三、六五	四四、五二	三六、七一	四三、四二
二―五	一九、二三	二二、一五	二〇、三一	一九、五四	二一、四四
五―一〇	六、〇五	七、〇五	六、一七	五、六二	五、九〇
一〇―一五	四、二四	四、七〇	四、五九	四、六四	五、一〇
一五―二〇	六、八三	七、二三	七、三六	八、六一	九、五〇
二〇―二五	九、三二	九、七六	九、一五	八、六一	九、五〇
二五―三〇	九、六六	九、六〇	九、八四	九、八四	一〇、一九
三〇―三五	一〇、五八	一一、一七	九、五六	一〇、二九	一〇、〇九
三五―四〇	一一、六八	一一、四六	一一、六八	一〇、五〇	一一、〇一
四〇―四五	一二、〇〇	一二、一九	一一、三四	一一、七七	一〇、二〇
四五―五〇	一三、一四	一三、一六	一二、〇二	一一、九六	一二、三一
五〇―五五	一六、五六	一六、六一	一五、四八	一五、三一	一五、一六
五五―六〇	二二、〇五	二四、六九	二〇、二〇	二二、〇七	二〇、八〇
六〇―六五	三二、六六	三四、三二	三二、四五	三〇、八五	三〇、一六
六五―七〇	四八、四〇	五〇、四二	四六、八三	四九、九九	四四、九五

七〇― 一〇七、九八 一一〇、五六 一〇一、三五 一〇七、七五 一〇七、七二

次に今の累年の年齢死亡率を男女に別つて見ますと、茲に又新たなる注目點があるのですが、何れ後に申さるべき機会があらうと思ひますから、今は唯次の一言を述べるに止めて置きます、それは男に於ては幼弱なる者の死亡率増加が著しくして女に於ては青年の死亡率増加が著しいことであり、前に總數に於て見定められたる注目の二點の幼弱なる者は男に著しく、青年は女に著しいのであります、此事は後に男女の關係を述ぶる場合に細説することにしやうと思ひますから今は略します。

四、注目すべき日本の青年の死亡

そこで本邦の年齢別死亡の上に於て殊に研究を要する點は、零歳より一歳までの乳兒死亡及一歳以上の小兒死亡の年々増加することが大に注目すべき重要な現象であります、それに次ぎまして注目すべきは十五歳より二十五歳乃至三十歳までの青年の死亡が著しく増加するといふことが注目されねばならないものであると思ひます、乳兒及小兒の死亡に付ては今晚は申上げないことにしやうと思ひます、そこで十五歳以上

の血氣盛の青年の死亡が日本に於て著しく多い、日本の死亡率の低下せざる原因は乳兒及小兒死亡と此青年の死亡とが益々増加するに起因するといふても差支ない、何故に日本の青年の死亡が増加するか、それを少しく申上げて見やうと思ひます、其青年の死亡が増加するといふことを申上げましたも、全體日本の青年の死亡率が若し歐羅巴の諸國と比しまして非常に低いものであつたならば縦しや多少死亡率が増加して來ましても必ず憂ふるに足らぬかも知れぬ、低いものが幾らか高さを増したといふことならば餘り憂へぬでも宜いかも知れませぬが、現在に於て日本の死亡率が世界の諸國と比して如何なる地位に居るかといふことを見ますと、そこで始めて青年死亡率の上るといふことが殊に憂ふべきものであるか、餘り憂ふるに足らぬものであるかといふことが決定せらるゝと思ひます。

各國青年及壯年死亡率比較 (各年齢人口千に付)

	日本 (一九〇三年)	英吉利 (一九〇〇年)	佛蘭西 (一九〇〇年)	獨逸 (一九〇〇年)	北米合衆國 (一九〇〇年)	伊太利 (一九〇〇年)
一〇—一五	四、二六	二、三四	三、二八	二、六六	三、二五	三、四五
一五—二〇	八、二五	三、三五	五、一八	三、八九	五、一九	五、〇五
二〇—二五	九、九〇	四、三三	七、四八	五、二一	七、三六	六、八二
二五—三五	八、九四	五、八九	七、九七	六、二九	八、七四	七、二六
三五—四五	一〇、一九	九、八六	一〇、三一	九、一五	一一、二一	八、六五

日本と英佛獨並に北米合衆國、それからちよつと面白い關係がありますので伊太利を擧げて見ました、五歳以上十歳、十歳以上十五歳、十五歳以上二十歳、二十一歳以上二十五歳、二十五歳以上三十五歳、三十五歳以上四十五歳といふ五歳階級及十歳階級にして男女の死亡率を擧げて見ますと斯様になります、其數の一々は申しませんが、日本の事實を英吉利(イギリス)、獨逸、佛蘭西、亞米利加、伊太利と比べて見ますのに其何れに對しても日本の死亡率が決して低いことはない。

各國年齢別死亡率比較 (日本の率の百に對する各國の率の指數)

年齢別	日本 (一九〇三年)	英吉利 (一九〇〇年)	佛蘭西 (一九〇〇年)	獨逸 (一九〇〇年)
總死亡率	一〇〇、〇〇	六三、九四	九二、六四	八〇、四八

〇―五	一〇〇,〇〇〇	五二,八八	―	八八,三七
〇―一	一〇〇,〇〇〇	―	六一,九〇	一一五,一七
一―二	一〇〇,〇〇〇	七〇,一一	―	七三,一二
二―五	一〇〇,〇〇〇	四五,二四	―	四三,一二
一―五	一〇〇,〇〇〇	―	四九,七二	五六,五三
五―一〇	一〇〇,〇〇〇	五四,二六	七八,〇九	五七,九八
一〇―一五	一〇〇,〇〇〇	四四,六〇	六一,七四	五一,六四
一五―二〇	一〇〇,〇〇〇	三三,三三	五三,八五	三二,三八
二〇―二五	一〇〇,〇〇〇	三三,一三	六六,二六	四四,六五
二五―三〇	一〇〇,〇〇〇	四二,四九	七六,四九	五四,九七
三〇―三五	一〇〇,〇〇〇	五四,〇三	九〇,四七	六三,四五
三五―四〇	一〇〇,〇〇〇	六四,二七	八八,六六	六八,八三
四〇―四五	一〇〇,〇〇〇	七七,一四	九九,八一	七八,一九
四五―五〇	一〇〇,〇〇〇	八一,七六	九七,七〇	七九,九一
五〇―五五	一〇〇,〇〇〇	八七,六七	九五,七〇	八六,五〇
五五―六〇	一〇〇,〇〇〇	九〇,一五	九三,三一	九〇,四四
六〇―六五	一〇〇,〇〇〇	九一,二九	九一,三八	九三,五一

六五―七〇	一〇〇,〇〇〇	八九,二六	九八,八三	九九,五二
七〇―七五	一〇〇,〇〇〇	九二,五四	一〇〇,七九	九六,七五
七五―八〇	一〇〇,〇〇〇	九五,五五	一〇九,一七	一〇六,一八
八〇―	一〇〇,〇〇〇	一〇一,〇一	一五六,二六	一三五,一四

是は殊に著明に現はす爲めに各年齢共に日本死亡率を百と爲して各國の死亡率の指數を算出して比較したのであります、總數に於て日本の死亡率を百とすれば英吉利は約六十四、佛蘭西は九十三、獨逸は八十一に足りないのであります、今問題であります所の十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳といふ年齢階級を見ますると、十五歳より二十歳に於ては日本の死亡率の百に對する各國の指數は英吉利が三十三しかなく、獨逸は三十二しかない、二十歳より二十五歳に於ては日本の死亡率の百に對する英吉利の死亡率は矢張三十三、獨逸の死亡率は四十五といふ低いのであります、されば全體を観察するに日本の死亡率は零歳から一歳までに於て獨逸より低い、七十歳以上の高年者に於て他國より低いものがある外總てに於て他國より低いものがないのであります、殊に國民の中堅たるべき青年の死亡率が現在英吉利、獨逸に比しまして二倍若

くは三倍であるといふことが認めらるゝのであります、而も其二倍若くは三倍である所の本邦の青年の死亡率が今日までの観察に依りますと益々上昇する傾向を持つて居る、是が果して發展する國民の状態でありませうか、國民の中堅たるべき青年並に其後繼者たる幼者の死亡が著しく多くて老齡の耄者のみが幾分か死亡率が低いといふことが目出度き徴候であるとして安んじて居る事が出来ませうか、左れば此死亡率の上るといふことは國を憂ふる者の深く注意して見なければならぬ重大の現象であると思ひます。

五、青年の死亡率増加の原因は何ぞ

本邦の青年の死亡率が上昇すること斯の如くであります、然らば何故に青年の死亡率が上昇するや、次には其原因に溯つて之を見なければならぬ必要がある、さうしますと此研究は死亡原因に立入りまして、如何なる死亡原因が如何に増減したかといふことを探求することに依りて闡明せられます、而して私は本邦の事實を探究するに先ちて歐洲の諸國が一般に死亡率の減少せるは如何なる死亡原因に由る死亡が減少した

るに基因するかを知るの必要ありと信じます、仍て獨逸の死亡率が著しく低下したそれを死亡原因別に證明しやうと思ひます。

獨逸に於ける人口一萬五千以上の地の死亡原因別死亡數比較 (人口一萬比例)(抄録)

死亡原因別	一八七七—一八八一年	一九一二年
總 死 亡	二六七、一九	一四五、九一
產 褥 熱	一、四四	〇、五四
猩 紅 熱	五、六八	一、〇一
麻 疹	二、七六	一、四〇
チフテリア	九、九八	二、二六
チフス	四、三六	〇、三六
發疹チフス	〇、二六	—
結核性疾患	三五、七七	一六、五六
呼吸器病	三〇、八六	二〇、二四
胃及腸カタル	二六、四一	一一、四八
痘 瘡	〇、一五	—

自 殺	三、一〇	二、七九
外 因	三、八二	四、一二
其 他	一四二、六七	八三、五三

備考 一八七七—八一年の結核性疾患は肺結核のみの数にして一九一二年は全結核の数なり、又一八七七—八一年の呼吸器病は急性呼吸疾患のみの数にして一九一二年は全呼吸器病の数なり

之を御覽下さいますと獨逸の死亡率の低下した原因が明であります、即ち何の死亡原因に因る死亡が少くなつたかといふに、先づ第一に急性傳染病が非常に少なくなつた、腸塞扶斯、猩紅熱、麻疹、實扶埵利亞等に罹つて死亡する者を合計すると千八百七十七年から八十一年までの五年平均と其三十年乃至三十五年後の千九百十二年とを比較すると人口一萬について二十三であつたのが七人に減じました、即ち三分の一以下に減じたのであります、是は確に死亡率を減少せしめた著明の原因の一であります、其次には結核性の疾患であります、三十五年前には人口一萬に付て肺結核死亡のみが三十六人でありましたが、最近には肺結核のみならず腦膜の結核も腸の結核も其他總ての結核性疾患に因る死亡を合せて十七人弱に減じたのであります、人口一萬に付て

二十人以上結核性疾患の死亡者が減じた、是は急性傳染病の總てを合せたよりも更に大なる死亡率低下の原因であります、其次は産褥熱であります、是も減じては居りませんが、併し全體に大なる數でありません、それから肺結核を除いたる所の呼吸器病、即ち氣管支炎、肺炎、肋膜炎等の呼吸器病が三十五年前には人口一萬に付て其急性病のみが三十一人ありましたといふが今や慢性病を合せて二十人に減じました、次には胃腸病(就中小兒の下痢)がどんなに減つて居るかと申しますと、三十五年前には人口一萬に付二十六人でありましたものが今や十一人に減じて居ります、又自殺も多少減じました是等のものが大分少くなつて來た、其少くなつたといふとが一般死亡率の減少した所以であることが明かであります、茲に挙げました死亡原因は何れも減じたもののみを擧げて居るのであります但其最も多く死亡者の減じたものは何であるかといふと結核性疾患であります、結核性疾患が少くなつた數量は他の何れよりも大であることは前申した通りであります、それ故に多くの死亡原因、即ち急性傳染病や、呼吸器病や、胃腸病やが少くなりましたことも獨逸の一般死亡率の減少したる重要な原

因に相違ないが、それよりヨリ以上の重大なる原因は結核性疾患である。結核性疾患が少くなつたといふことが獨逸の死亡率を低下せしめたる最も大なる原因であります。

英吉利に於ける死亡原因別死亡數比較 (人口一萬比例)

死亡原因別	總數		十五歳以上四十五歳者	
	一八九一—一九〇〇年	一九一二年	一八九一—一九〇〇年	一九一二年
總死亡	一八九一、九四	一三三、二一	六五、三八	四六、二二
急性傳染病	一四、二一	九、七〇	三、〇四	一、四七
結核性疾患	二〇、一〇	一三、七〇	二一、四六	一五、三〇
癌及其他の悪性腫瘍	七、五八	一〇、二一	二、二五	二、二二
心臓病	一六、五七	一三、〇七	六、三二	四、〇〇
呼吸器病	三四、〇九	二二、一二	七、一三	四、七六
下痢	七、一三	三、一三	〇、一七	〇、四〇
腎臓炎	四、六一	三、九九	二、一八	一、六九

産に因する疾患 一、五二 〇、九五 三、二〇 一、九五
 外 因 六、六〇 五、四一 四、五六 三、七八
 其 他 六九、四七 四九、九三 一五、〇七 一〇、五四

備考 一八九一—一九〇〇年の心臓病は血行器病の總數にして、腎臓炎は泌尿器病の總數なり

もう一つ英吉利の例を見ますと、是は餘り古い材料でありませぬが、近い例を見ても大體想像せらるゝと思ひます、千九百十二年の事實と千八百九十一年から千九百年までの事實と比較して見る、假りに千八百九十一年から千九百年までを前の調査と云ひ、千九百十二年のを後の調査と申す、茲に挙げましたは急性傳染病、英吉利に於ても矢張り前の調査より後の調査が減じて居る、それから結核性疾患であります、是も明かに減少して居る、其次の癌及其他の悪性腫瘍、是は増加して居るのであります、其次が心臓病、是も減少して居る、其次には頗る大量を占むる所の呼吸器病、例へば急性氣管支炎又は肺炎等であります、是も大に減じて居ます、其次には英吉利には少うございますが下痢、それから腎臓炎、是等何れも皆減じて居ります、其次が産に原因する疾病、其次が外傷皆多少づゝ減じて居ます、以上は總死亡に就て調査しまし

たのでありますが癌及其他の悪性腫瘍を除く外は何れも前調査よりも後調査が減じて居ります、次には此總數の中から青年壯年の者に付て觀察する爲め特に十五歳以上四十五歳以下の年齢者に就て以上各死亡原因の増減如何を見ますると、急性傳染病は爰でも減少して居ります、次に結核性疾患は大變多く減少して居ります、又此年齢に於ては餘り癌に侵される者の無いが當然でありますからホンの僅かだけ増加して居る、それから心臟の疾患、それから呼吸器病何れも多少づゝは減少して居りますが大したことは無い下痢の如き寧ろ増加して居るものもあるが、而して茲に擧げました死亡原因の總てが減少した其總量と匹敵するほどの大きさを結核性疾患の減少が占めて居るのであります、實に總減少量の三分一は結核性疾患の減少に歸するのであります。是に於てか英吉利に於ける全體の死亡率を減少せしめた原因としても結核性疾患は重大であります、殊に青年壯年に於ては結核性疾患の多少によりて死亡率の多少を來たしたことが能く知れます、左れば獨逸に於ても英吉利に於ても死亡率低下の最も重大なる原因は結核性疾患の減少に在ると言はねばなりません、殊に英吉利に於ける十五歳以上

四十五歳以下の青年壯年の事實は此年齢級者死亡率低下の原因として結核性疾患が殊に重大なることを示して居ます。

以上先進國の事實に徴し然らば日本に於て死亡率の低下せざるは何に原因するか、爰にそれを探究しなければなりません、日本に於て死亡原因別死亡を細かに觀察することの出來ますのは明治三十二年以來のことでありまして、近く明治四十四年の調査が出來ましたのを加へて僅に十三年間しか觀察する材料がないのであります、其十三年間の觀察に依りまして、此短き期間にどんなに各死亡原因が消長したかといふことを見ます。

日本に於ける死亡原因別死亡數比較 (人口一萬比例)抄録)

	明治三十二年	三十五年	三十八年	四十一年	四十四年
總 死 亡	二一〇、五	二〇八、五	二一〇、九	二〇八、七	二〇三、〇
死亡原因別					
急性傳染病	一〇、三	七、五	六、二	六、九	五、八
肺 結 核	一一、六	一四、三	一六、〇	一五、五	一五、七

	そのおもかげ	四二
其他の結核性疾患	二、六	三、六
癌及其他の悪性腫瘍	四、四	五、三
脚氣	二、〇	二、四
脳神経系の疾患	四二、三	四〇、二
心臓の器質的疾患	四、八	五、二
呼吸器病	二五、六	二八、〇
急性及慢性気管支炎	一〇、四	一一、二
肺炎及気管支肺炎	九、八	一一、六
（掲）其他の呼吸器病	五、四	五、二
胃の疾患及下痢腸炎	二八、九	二六、五
腎臓炎	三、〇	三、四
妊娠及産に因する疾患	一、四	一、三
先天性弱質	八、一	九、五
老衰	一一、五	一一、五
自殺	一、三	一、九
其他の外因	四、九	四、四
以上列記外の疾患	一七、九	一八、七
		一七、六
		一九、三
		二〇、三

不明の診断及死因不詳 二七、九 二四、七 二四、〇 一九、四 一一、四

急性傳染病は非常に減じました、要するに防疫衛生の發達に由るのでありますやう、次に結核性疾患は肺結核も其他の結核も著しく増加して居ます、明治三十二年には人口一萬に付て十五人餘でありましたが、四十二年は最も高く上りまして二十三人弱にまで達しました、それから癌及其他の悪性腫瘍、是れ亦他國と同じやうに逐年増加して居ます、其次に日本人及其他米食者の固有の疾患として醫學界から注意して見られて居ります脚氣は高低不定でありまして、結局増加もせず減少もせぬやうな形勢であります、其次には脳神経の疾患、其主なるものは何であるかといふと、小兒の腦膜炎並に老年の腦溢血であります、此小兒の腦膜炎が果して眞に腦膜炎のみなりや否やは餘程疑はしくあります、又老年の腦溢血といふものが果して眞に腦溢血のみなるや否や是亦餘程疑はしいのであります、それ故に此死亡原因の増減があつても、それを眞に腦膜炎や腦溢血が増減したとも見られない、大に疑ひの眼を以て見なければなりませんゆから今は問題に上せませぬ、次に心臓の器質的疾患是も幾らか増加して居り

ます、其次には呼吸器の疾患、是も高低はありますが大體に増加して居ます、就中肺炎及氣管支肺炎の増加が著しい、次に胃の疾患及下痢腸炎、是亦消長はありますが上昇して居る、次には腎臓炎是亦上昇して居る、それから産に因する疾患此中には産褥熱も包含して居ますが大體に於て大差がない、それから先天的に弱く生れた者、是は生後十五日以内に生活力薄弱なる爲めに死亡した者でありますが多少増加して居る、それから老衰に多少の増減がある、自殺は一時増加し爾來靜止して居る、外傷に大差なく、其他の疾患は多少増加した、それから不明の診断、何とも判断の附かないものが澤山あります、是は獨り日本に限つたものでありませぬが、就中日本に澤山ある、それは日本の醫師が無智であるからとのみ速断することは出来ない、戸籍行政の不全なのも大に之を招來する、それから日本には不幸にして皇漢醫なる者がありました、往々不明なる診断を附して出すことがあります、それも此多い一原因でありませう、其殊に甚しいものを挙げますと生後二日の者が慢性腎臓炎で死亡したといふものがありました、それを調べて見ますと實は二十幾歳の男でそれが出生届洩者であつた

ので死亡の前日に出生届を出した爲めだといふことが知れました、或は又六十何歳の男か子宮周圍炎で死亡したといふのでありますが取調べましても男女の間違ひでなく全く醫師が其通り死亡證明をして居るといふのであります、症候丈けを記して置くのは決して珍らしくない、例へば惡寒發熱頭痛眩暈の症とか食思不振腹部に疼痛ありとか咳嗽頻發咯痰困難とかいふのがいくらもあります、殊に奇抜なのを申ますと熱三十七度五分とのみ記したのがあつたり廿六歳の壯年が老衰で死亡したり又若い人に無病とのみ記した者がありました。斯ういふやうに戸籍行政の誤もありますが醫師の死亡診断書に不明の診断を附した者が仲々多かつたのであります、醫學の進歩と共に著しく減少して斯様に少なくなりました、以上は日本の死亡原因別死亡の大勢を申したのであります、當面の問題は其減少した者を詮索する要がない、ドノ死亡原因が増加して死亡率を高めたかといふと見るのが重要な問題であります、しますると茲に挙げたる中結核性疾患、癌、それから心臓の疾患、呼吸器病胃腸の疾患、腎臓炎、先天性の弱質といふものが先づ増加した死亡原因であると注目せられるのであります

す、其中で癌及其他の悪性腫瘍は大體に老境に入りたる者を侵す、尤も肉腫等は幼少の者をも侵しますが其數は少い、此項の大部を占むる癌は主として老年の者を侵す疾病でありますから、青年の死亡率を高めたる原因としては癌を見るの必要はない、次に先天性の弱質是はベルチヨン分類に於て生後十五日以内に死亡したる者に限り認めることになつて居ます、それ故に幼少の者の死亡を研究する上には重要な原因でありますけれども、青年の死亡率を高めたる原因を観察する爲めには之を見るの必要はありません、斯くて残りましたものは結核性疾患、心臓の病、呼吸器の病、胃腸の病、腎臓炎であります、此五つの死亡原因が如何なる年齢者に如何に増減したかといふことが茲に注意して見なければならぬ要事であります、併し何分観察すべき材料の期間が短く、僅に十三年しかないのでありますから餘り精しく観察することは出来ませぬ、殊に其乏しい材料の中から、私は三年を捐て、十年間だけを見やうと思ひます、なぜかとなれば御承知の通り本邦に於ては人口の調査が毎五年に一回行はれます、其最も近きは大正二年でありまして、其以前は明治四十一年、其前は明治三十六年、此

調査年にあらざれば正しき年齢別の人口を得ることが出来ない、そこで此調査年を中心にしたる前後五年宛各死亡原因に因る年齢別死亡數を取りまして、即ち明治三十四年から三十八年までを一つの調査期間としそれを明治三十六年の年齢別人口一萬に比例し、それから明治三十九年より四十三年までを次の調査期間とし之を明治四十一年の年齢別人口一萬に比例しました、さうして其前調査と後調査との間に各年齢の今舉げました五つの死亡原因に因る死亡がどんなに多くなつたか、少くなつたかといふことを観察しやうと思ひます。

六、就中研究を要する五種の死亡原因

先づ各死亡原因の總數から見ますと結核性疾患は前調査が人口一萬比例一八、三二二で後調査が二〇、九二でありますから前調査の百に對する後調査は一一四、一九に當りました、僅か十年に前五年後五年との間に一四、一九%だけ増加しました、次に心臓の器質的疾患は前調査が五、一七後調査は五、九一であります、是も指數を取りますと一四、三二%の増加になります。が總量が結核と比するほど多くありませんから無

論結核ほどに影響は大でない、それから呼吸器病はは指数を取りますと前調査より後調査の増加すること五、三三%でありまして、前調査は二六、六一後調査は三〇、一四であります、それから腎臓炎、是は非常の増加であります但し総量が前調査三、六八後調査四、八七に過ぎませぬから指数は一三二、三四といふ大きいものであります影響は勿論小であります、最後に胃腸病はは前調査が二六、一六後調査が二八、五二で前調査の百に對する後調査の指數は一〇九、〇二でありまして呼吸器病よりも強い影響があるやうに思はれます。

胃疾患及下痢腸炎死亡年齢人口比例比較

(各年齢人口一萬に付平均一ヶ年の死亡)

年齢別死亡	(前)三四—三八年 (後)三九—四三年		(前)の百に對する(後)の指數
	總死亡	二六、一六	
〇—五	六八、〇一	九七、八二	一四三、八三
五—一〇	六、五三	六、六〇	一〇一、〇七
一〇—一五	三、一九	三、一六	九九、〇六

一五—二〇	四、六四	四、四九	九六、七五
二〇—二五	五、六四	五、二一	九二、三八
二五—三〇	六、四五	五、九六	九二、四〇
三〇—三五	七、六五	六、七四	八八、一〇
三五—四〇	九、〇一	八、五〇	九三、四一
四〇—四五	一二、八三	一〇、五二	八二、〇〇
四五—五〇	一六、八五	一五、九五	九四、六六
五〇—五五	二八、〇七	二二、八八	八一、五一
五五—六〇	三九、三四	三五、七一	九〇、七七
六〇—六五	五八、七八	五六、四六	九六、〇五
六五—七〇	九五、九一	八三、九二	八七、五〇
七〇—	一八五、五八	一七八、一一	九五、九七

先づ第一に胃腸の疾患を見ます、如何なる年齢級者が最も多く此病に侵されるかと申ますと最幼弱者を別にしますると老年者は其老年なるほど多く此病に侵されます、併し前調査と後調査とを比較すると十歳以上の總て無論老年者に於ても寧ろ前調査が高くて後調査が低い、それ故に總數に於て後調査の高き所以のものは零歳より五歳ま

での幼弱なる小兒に於て著しく多きを加へたる影響が全體の前調査より後調査の高さを増したのでありました、されば當面の問題である十五歳より二十五歳乃至三十歳の青年の死亡率の増加したる原因としては何等關係がない、甚だ僅かであるが是等の年齢者に於ては寧ろ減少して居るのであります、一體胃腸の疾患は主として老年者と幼年者とを侵す病氣である、青年者も無論侵されませうが、死の原因としては老年者と幼年者とに強く働く、老年者は先づ措いて論じませぬ幼年者はどうか、前に掲げました獨逸に於て三十五年間此胃腸の疾病が非常に減じたのは要するに獨逸の小兒死亡が急速の歩調を以て少くなつたのが其原因の主なるものであります、いつも小兒死亡就中一歳未満の乳兒の死亡に際しまして其原因の重大なるものとして胃腸病を思はなければなりません、獨逸の例に依りますと乳兒の死亡者の百人の中には三十二三人の胃腸病死者があるのであります、それ故に小兒死亡が高くなつたといふことは小兒の胃腸病が多くなつたといふこと、看做しても差支ない位の者であります、獨逸に於ける小兒死亡は御承知の通り嘗ては頗る高かつた、生産千に付てオスト、バイエルンの如きは四百人以上を算したこともありす、プロイセンに於ても三百二十から五十位までのこともありました、然るに今日（一九一二年）に於てプロイセンの乳兒死亡率は百四十六に下がつて居るのであります、獨逸帝國全體を見ましても一千九百十年は百六十二、十一年は歐洲全體に暑氣が強くて乳兒死亡が高かつた、それ故百九十二、翌十二年はプロイセンのみと略ぼ同様に百四十七に下りました、之をツイ千九百年の二百七人二年の百八十三人、三年の二百四人等に比しますれば其低下の度の著しいことが知れます、而し此低下は養育の不完全が何程か除かれて胃腸病の減少に胚胎することを思ひますれば此死亡原因と乳兒死亡との關係が最も能く知られるのであります、而して日本の近き十年間の事實に於て前調査よりも後調査に胃腸病が多い、それは他の年齢者には減じたるにも拘はず幼者に増したるに依つて高さを増したのであるとしましたならば日本の乳兒死亡が如何に高くなつたか、其反影が茲に現れたのであると云つて差支ないのであります、それ故に小兒死亡の研究としては胃腸病を忘れてはならぬ私も其點に就て多少研究を進めて居りますが、併し今晚の問題たる青年の死亡率

第一篇 講演

が高くなつた原因の探究には左まで深く入る必要がないと思ひます。

腎臓炎死亡年齢別人口比例比較 (各年齢人口一萬に付平均一年の死亡)

(前)三四—三八年 (後)三九—四三年

(前)の百に對する(後)の指數

年齢別	總 死 亡	(前)三四—三八年	(後)三九—四三年
0—5	五、〇七	五、九三	一一六、九六
5—10	二、三二	二、六九	一一五、九五
10—15	一、一五	一、四〇	一一一、七四
15—20	一、一四	一、四二	一二四、五六
20—25	一、三八	一、七五	一二六、八一
25—30	一、五四	二、〇一	一三〇、五二
30—35	一、八三	二、二六	一二三、〇八
35—40	二、一三	二、八八	一三五、二一
40—45	二、六四	三、一八	一二〇、四五
45—50	三、〇七	四、二七	一三九、〇九
50—55	四、三六	五、六八	一三〇、二八

五五—六〇	六、二九	八、四六	一三四、五〇
六〇—六五	九、五三	一二、八八	一三五、一九
六五—七〇	一五、四二	一九、三一	一二五、二三
七〇—	二三、三九	三二、八一	一四〇、二七

次に腎臓炎は總數としても餘り多くはないが併し近年非常に増加して來た、それは腎臓炎そのものが多くなつたのではなくて醫師の診斷が確かになつて來たのだ、化學的診斷が容易に行はれるやうになつた爲めだと申す、而して其年齢分配は無論老年者に多い、それは言ふまでもないことであります、一體腎臓炎は老年者の病であるといふて居る位であります、然るに日本に於ては他の諸國と比較しますと小兒の腎臓炎で死する者が少くない、是は日本の死因統計に現はれたるものの一である、なぜ日本に於てのみ小兒に腎臓炎が澤山あるかといふと、世界共通的なるベルチヨン類別の死亡原因の記載方に斯ういふことがある、總ての急性傳染病には、腎臓炎を續發することが多い、例へば發疹のない猩紅熱があつても腎臓炎のない猩紅熱はないと言ふ位に猩紅熱に腎臓炎を續發することが多い、其他實扶埤利亞でも麻疹でも百日咳でも是

等の急性傳染病には腎臓炎を續發する者が多いのであります、而して是等の續發性腎臓炎はペルチオン類別では其本病に編入して腎臓炎としては取扱はぬのであります、即ち其本病である所の猩紅熱、麻疹、實扶埵利亞といふやうなそれに編入するとなつて居るのであります、然るに日本に於ては此規則通りに行かぬことが多いやうに思はれる、私共が死亡票を取扱ふ場合に醫師の死亡原因の記載を見ると斯ういふものがある、例へば麻疹の續發症である腎臓炎で死亡した者に對し麻疹兼腎臓炎と記してあればよいのであるが、それを腎臓炎兼麻疹と記してある腎臓炎兼猩紅熱といふやうに、本病と續發症とが顛倒して記してある是は腎臓炎に重きを置いて、それに強い意味を有たせる爲めで遂には其本病が隠れることがある、即ち死亡原因の記載を簡單にする場合には兼麻疹とか兼猩紅熱とかいふものは指てられて唯腎臓炎とのみ記されるやうになる、是は決して架空の想像ではありません、それ故に十歳未満の小兒に腎臓炎死亡が澤山ある、殊に五歳未満の幼者に著しく多い、それは是等の幼者が急性發疹性の傳染病に侵されることが多い、従て其續發症なる腎臓炎を發する者も多い、其腎臓炎

に因りて死亡したる者があつた場合に本病が指てられて單に腎臓炎とのみ記載せられますと私共の如き取扱者は之を腎臓炎として取扱ふ外ありませんのであります、要するに日本の醫師の作製する死亡診斷書の記載振りが改つて來ませぬと小兒の腎臓炎死は何時までも多いであらうと思ひます、それは兎も角も腎臓炎は老者に多い死亡原因であります、四十歳以上から漸く其數が多くなつて老者は老者ほど多い、今問題に上せてあります青年の如きは最も少くして殆ど數ふるに足らない、それ故に青年の死亡率増加の原因としては是亦深く究むるの要なきものと思ひます。

呼吸器病死亡年齢別人口比例比較 (各年齢人口一萬に付平均一ヶ年の死亡)

年齢別	總死亡		(前)の百に對する(後)の指數	
	(前)三四—三八年	(後)三九—四三年	(前)	(後)
總	二八、六一	三〇、一四	一〇五、三五	
〇—五	一一二、六四	一三一、八八	一二四、八五	
五—一〇	六、七九	七、四六	一一〇、六八	
一〇—一五	三、八六	四、一三	一〇六、九九	

一五二〇	七、〇五	七、九二	一一二、三四
二〇二五	七、六五	九、〇〇	一一八、四三
二五三〇	七、三八	七、六九	一〇四、二一
三〇三五	七、七九	七、二五	九三、〇七
三五四〇	七、七九	八、〇七	一〇三、五九
四〇四五	一〇、二〇	八、九六	八七、八四
四五五〇	一二、六八	一二、五三	九八、八二
五〇五五	一八、九一	一七、八六	九四、四五
五五六〇	二九、四二	二八、八三	九七、九九
六〇六五	四四、三七	四四、八一	一〇〇、九九
六五七〇	七〇、八八	六四、五四	九一、〇六
七〇	一一〇、七〇	一一〇、三五	九九、六八

次に呼吸器の疾患、之は御覽の通り五歳未満の幼者に最も多く、それに次て老年者に多い、五十歳以上からの老年者に段々多くなる、而して前調査と後調査とを比較しますと其最も強き増加は五歳未満の幼者に在ります、老年者は餘り増加しない事少して居る者が多くあります、青年者は全數も餘り多くありませぬが、併し前調査と

後調査とを比較すると幼者に次で増加の著しいものであります、是は餘程注目して見るべき現象でありまして世界共通分類などでも呼吸器として報告せらるゝ中に何程かの肺結核が潜んで居るであらうと注意して居るのであります、今此本邦の青年に呼吸器病が増加したといふ裏面には或は肺炎或は肋膜炎といふ名の下で若くは慢性氣管支炎などと名けて報告せられた其影には何程かの肺結核が包含して居りはせぬかといふことが想像せられるのであります、而して斯様の特別の關係を別にすれば本病も亦小兒死亡の原因として若くは老年者の死亡原因として最も注目しなければならぬ重要な死亡原因であります、青年者の死亡原因としては左までに注意せぬでも宜い、今のやうに結核性疾患が其後ろにあることを顧慮しなければならませぬが、青年の死亡率増加の原因としては左程に大聲疾呼するにも及ばぬものであります、併し老幼者に於て呼吸器疾患が重要な死亡原因であることは前申した通りで殊に幼兒の月齡年齢と呼吸器疾患との關係が一種追隨して行く面白いものであります、生後幾何もなき嬰兒に於ては鼻加答兒が既に重大なる疾患で随分重き死亡原因であります、少しく

月齡が重なると鼻加答兒では死なないが喉頭加答兒で死ぬる者が多い、それから更に月齡が長ずると喉頭加答兒には堪えるが氣管支加答兒では相應に命を殞す者がある、それから更に長ずれば氣管支加答兒にも抵抗し得るが毛細氣管支炎には往々斃される、更に成長すれば最深部の肺炎が重大なる死因になります、斯様に月齡と呼吸器病の深淺が重大なる死因としての追隨關係を有つて居る、是と同様に但し反對に老齡と呼吸器病とが追隨關係を有して居まして、老齡は老齡ほど淺部の呼吸器病にも堪えられなくなり、要するに此追隨關係あるが故に呼吸器疾患は小兒死亡の原因として將た老年者の死亡原因として大に注目せられねばならぬものであります、日本に於てはまた、小兒の呼吸器疾患の割合が少いやうであります、是は自然の關係や、國民の生活上慣習等に由るのでもありまじやうが小兒死亡の最も高い墺地利などの事實を見ますと、一歳以上の小兒に於ても最も多きを占むる死亡原因は呼吸器疾患であります、日本に於きましては呼吸器疾患よりも消化器病の方が矢張り重大でありまして、此消化器病が重大であるといふことは、聽て日本の小兒死亡の原因が養育の不完

全に歸すること大である所以を示すものであるやうに思ひます。されば特殊の關係は別として呼吸器の疾患も亦青年の死亡率増加の原因として左まで重要なものでないと思ひます。

心臟の器質的疾患死亡年齡別人口比例比較

(各年齡人口一萬に付平均一ヶ年の死亡)

年齡別	(前)三四—三八年	(後)三九—四三年	(前)の百に對する(後)の指數
總死亡	五、一七	五、九一	一一四、三一
〇—五	二、四一	二、六七	一一〇、八〇
五—一〇	一、一六	一、三七	一一八、一〇
一〇—一五	一、六八	一、八八	一一一、九〇
一五—二〇	二、四五	二、八一	一一四、七〇
二〇—二五	二、六六	三、〇五	一一四、六六
二五—三〇	三、一一	三、三七	一〇八、三六
三〇—三五	三、七六	四、一五	一一〇、三七
三五—四〇	四、五四	五、四六	一二〇、二六
四〇—四五	六、〇七	六、一九	一〇一、九八

そのおもかげ

四五―五〇	七、一〇	八、二二	一一五、七七
五〇―五五	八、八四	一〇、四五	一一八、二一
五五―六〇	一一、七五	一三、八七	一一八、〇四
六〇―六五	一五、二三	二〇、五三	一三四、八〇
六五―七〇	二一、三五	二三、六五	一一〇、七七
七〇―	二六、二九	三一、七四	一二〇、七三

六〇

次に心臓の器質的疾患は如何、是れ亦御覽になります通り老年者に殊に其働が強くありまして若い階級の者には餘り多くない、併しどの階級も前調査より後調査が多い、けれども青年の死亡率増加の原因としては論ずるに足らない。

結核性疾患死亡年齢別人口比例比較 (各年齢人口一萬に付平均一ヶ年の死亡)

年齢別	前)三四―三八年 (後)三九―四三年		前)の百に對する(後)の指數	
	總死亡	一八、三二	二〇、九二	一一四、一九
〇―五	一二、九二	一四、〇〇	一〇八、二〇	
五―一〇	六、二七	七、五七	一二〇、七三	

一〇―一五	一〇、六六	一二、九一	一一一、一一
一五―二〇	二八、一六	三四、三六	一二二、〇二
二〇―二五	三一、七七	三九、七八	一二五、二一
二五―三〇	二六、八九	三一、七五	一一八、〇七
三〇―三五	二二、六三	二四、一六	一〇六、七六
三五―四〇	一八、八三	二一、三二	一一三、七五
四〇―四五	一八、九四	一九、一三	一〇一、〇一
四五―五〇	一八、六五	一九、九四	一〇六、九二
五〇―五五	一八、七三	二〇、三一	一〇八、四四
五五―六〇	一八、八四	二〇、二九	一〇七、七〇
六〇―六五	一六、三五	一八、三九	一一二、四八
六五―七〇	一五、四五	一四、九四	九六、七〇
七〇―	一〇、九七	一〇、五九	九六、五四

最後に結核性疾患はどうであるか、結核性疾患に最も多く侵される者は二十歳より二十五歳まで、(男女共に)其次は十五歳より二十歳、それから二十五歳より三十歳といふ此三つの年齢階級が本邦に於て最も強く侵されて居ります、而して前調査に對す

る後調査の増加の仕方は此三階級及十五歳以下の階級に於て著しいものであります、されば日本に於ける青年の死亡率の増加する原因は何であるかと申しますと此五つの死亡原因中四つまでは大なる關係を有さないが、最後の結核性疾患が青年に最も多く而して最も強く増加して居ることが知れましたによりて、重大なる原因は實に茲にあるといふことを言ふて差支ないのであります、前に申しました英吉利、獨逸に於ける死亡率低下は小兒死亡と青年の死亡の減少に因り青年の死亡は主として結核性疾患の減少に因たのでありましたが、恰も其反對に本邦の死亡率増加の一原因である青年の死亡の増加は實に主として結核死亡の増加に基因するのであります。

年齢別死亡總數百に付各病の死亡

結核性疾患	年 齡 別					
	總數	〇—五	五—一五	一五—三〇	三〇—六〇	六〇—
三四—三八年	八、九六	二、二八	一六、四八	三五、五九	一四、五三	二、〇四
三九—四三年	一〇、〇六	二、二八	二〇、二一	三九、〇三	一二、七一	二、二八

心臓の器質的疾患	年 齡 別						
	總數	〇—五	五—一五	一五—三〇	三〇—六〇	六〇—	
三四—三八年	二、五三	〇、四三	二、七八	三、三五	三、八九	三、〇三	
三九—四三年	二、八四	〇、四四	三、二三	三、三九	四、四八	三、七六	
呼吸器病	三四—三八年	一四、〇〇	一九、九三	一〇、七〇	九、〇四	九、八六	一一、〇三
三九—四三年	一四、五一	二一、四九	一一、八〇	九、〇八	七、六三	一一、二四	
胃の疾患及下痢腸炎	三四—三八年	一一、八〇	一一、〇三	九、八〇	六、八一	一一、八八	一六、八四
三九—四三年	一三、七一	一五、九四	九、九八	五、七四	九、〇一	一六、三六	
腎 臟 炎	三四—三八年	一、八一	〇、九〇	三、四九	一、六六	二、三五	二、三六
三九—四三年	二、三四	〇、九六	四、一八	一、九三	二、四六	三、三二	

以上は人口比例に依りて観察したのであります、念の爲めにこれを又總死亡比例と爲して観察します、併し結果は同じことであり、即ち第一に結核總死亡を見ますと總數に於て前後の調査で後が増加して居る、それを年齢別にすると殊に十五歳より三十歳といふ青壯年の階級に於て増加著しい、全體に此階級の比例數が高い上に更に増加が著しいのであります、心臓の器質的疾患を見ましても、呼吸器病を見ましても腎臓炎を見ましても、胃腸病を見ましても、此十五歳より三十歳までの階級は餘り比例數も高くなく、さうして増加も著しくない胃腸病の如き寧ろ少くなつて居る、

呼吸器病の増加も心臓病の増加も、將た腎臓炎の増加も數の上では認められますが、其量や誠に僅少のものであります、それ故に此處でも此若い階級の死亡率の高くなつたといふことは、主として結核性疾患の増加したのに依ると言はねばなりません、反覆して申す様ですが獨逸に於ては青年の死亡率の減少したる最も重大なる原因は結核性疾患の減少である、英吉利に於ても青年壯年の死亡率の減少したる重大なる原因は結核性疾患の減少である、其正反對に日本の青年の死亡率の高くなつたのは他の原因も多少は働いて居るでありませうが、殊に重要な原因としては結核性疾患の増加であることを確認せねばなりません。

七、結核性疾患に因る死亡の細觀

そこで結核性疾患が青年の死亡率増加の重大なる原因であるといふことを今申上げました、然らば是より結核性疾患に就て少しく細かに觀察しやうと思ひます、先づ結核性疾患で死亡した者を年齢別に見ます、茲に挙げましたのは日本と英吉利との事實を比較したのであります、日本に於ては結核性疾患死亡の最も多い年齢は二十歳よ

り二十五歳の階級でありまして之を曲線に描きますと恰も山の頂點を爲して居るのであります、其若い階級の者に結核性疾患が多いといふことが果して結核に侵される常態であるか或は又變態であるか、此型は各國必ずしも同一ではありませぬが、英吉利の状態は年齢に依りて分けたる結核死亡者の最も理想的の型でありはせぬかと思ひます、彼の結核研究を以て名あるコルネット氏の言ふて居りますやうに若い年齢階級の結核死亡者よりも、老年階級の結核死亡者の方が多い、若い階級の者に結核が多いやうに見ゆるのは若い年齢の人口が多いからであつて、其人口に比例を算出して同じ單位に爲して見ますと老年者が結核に罹りて死亡する者の方が遙に多いといふ説を立てて居るのであります、其學説を以て英吉利の状態を見ますると大體之に當嵌つて居る、唯最高點がコルネット氏のそれよりも少しく若い、即ち英吉利の千九百二十年の事實を見ますと、之は肺結核と其他の結核とを合せた總結核でありますから幼少なる者が比較的多い、それで最頂巔は四十五歳五十歳の年齢でありまして、五歳以下の幼兒には結核性腦膜炎が多いから別として、五歳以上は各階級毎に上昇して三十五歳以

上大に昇り頂巔に達してから漸次下降して最高年は五歳以上十歳までの小兒よりも低くなりす。

年齢別結核死亡率、日英比較

(各年齢人口一萬に付)

年齢別	英吉利 (一九二二年)		日本 (一九四三年)	
	英吉利の率の百に對する日本の率の指數	日本の率の百に對する英吉利の率の指數	英吉利の率の百に對する日本の率の指數	日本の率の百に對する英吉利の率の指數
總數	一三・六六	一五三・一五	二〇・九三	六五・三〇
〇—五	一八・二二	七六・八四	一四・〇〇	一三〇・一五
五—一〇	五・五〇	一三七・六四	七・五七	七二・六六
一〇—一五	五・四一	二三八・六三	一二・九一	四一・九一
一五—二〇	一〇・七九	三一八・四四	三四・三六	三一・四〇
二〇—二五	一四・一三	二八一・五三	三五・七八	三五・六一
二五—三〇	一五・二八	二〇七・七九	三一・七五	四八・一二
三〇—三五	一六・八二	一四三・六四	二四・一六	六九・六二
三五—四〇	一八・一三	一一七・五九	二一・三二	八五・〇四

四〇—四五	一九・一三	一八・一四	一九・四六	九三・八三
四五—五〇	一九・九四	一八・六一	一〇七・一五	九三・三三
五〇—五五	二〇・三一	一七・一三	一一八・五六	八四・三四
五五—六〇	二〇・二九	一七・〇五	一一九・〇〇	八四・〇八
六〇—六五	一八・三九	一五・九五	一一五・三〇	八六・七三
六五—七〇	一四・九四	一二・二五	一二一・九六	八二・〇〇
七〇—七五	一二・六八	九・〇四	一四〇・二七	七一・二九
七五—八〇	九・八五	六・四二	一五三・四三	六五・一八
八〇—八五	七・一七	四・一七	一七一・九四	五八・二六
八五—	七・三七	三・〇八	二三九・二九	四一・七九

然るに日本はドウであるかと申すと、其五歳以下の幼兒に多くて五歳以上十歳迄の小兒がそれよりも遙に少いことは英吉利と同然であります、十歳以上十五歳の少年は俄然と多くなり、それから急峻の昇り方をしまして二十歳以上二十五歳といふ階級に於て最頂巔が現はれます、それから漸次下りまして四十歳以上四十五歳といふ階級が最も低く、それから又昇りまして五十歳から六十歳に小さい山が出来ますが、更

に再び下りまして最高年者の低いことが英吉利と同様であります、尙ほ此關係を明瞭にする爲めに各年齢に就て英吉利の率の百に對する日本の率の指數と、日本の率の百に對する英吉利の率の指數とを取りまして、比較の料に供しました、仍て此比較を一寸申上て見ましやう、即ち零歳から五歳までに於て英吉利の方が高い、是は日本人の死亡原因中腦膜炎といふがありまして、其腦膜炎中には單純腦膜炎ならざる疾病をも包含して居るやうであります、勿論單純腦膜炎もあるに相違ないのであります、それと同時に結核性腦膜炎即ち腦底腦膜炎は唯單に腦膜炎として報告せられて居るらしいのであります、其澤山な結核性腦膜炎が結核性疾患として取扱はれて居らぬ爲めに五歳未満の結核死亡者が英吉利よりも低いのであります、其腸結核にも同様の關係があります、兎に角五歳未満の結核死亡者の少いのは日本の統計の單位の記載者たる醫師の死亡診斷書の不備に歸さなければなりません、其外の各年齢者に於ては皆英吉利に比しまして日本の結核性疾患の死亡率が高い、殊に十五歳より二十歳の青年を見ますと英吉利の率の百に對して日本の率は三百十八の高位に居ります、それから二十

歳より二十五歳の者は英吉利の百に對して日本は二百八十餘に當る、それから年が長ずると段々相互の死亡率が接近して來まして、四十五歳から五十歳に至つて兩者の間隔が最も小さくなります、又是より段々英吉利よりも日本の結核死亡率が高くなつて來るのであります。

年齢別結核死亡率、日獨比較

(各年齢人口一萬に付)

年齢別	日		獨逸	
	本 (三九一四三年)	本 (一九一〇—一一年)	逸 (一九一〇—一一年)	逸 (一九一〇—一一年)
總數	二〇・九三	一五・七八	一三二・五七	七五・四三
〇—一	二〇・八二	二四・二四	八五・八九	一一六・四三
一—五	一一・〇〇	六・六一	一六六・四一	六〇・〇九
一五—三〇	三五・八三	一八・二七	一九六・一一	五〇・九九
三〇—六〇	二二・五一	二二・三九	一〇五・二四	九五・〇一
六〇—七〇	一九・六七	二四・八〇	七九・三一	一二六・〇八
七〇—	一〇・五五	一五・五三	六七・九三	一四七・二〇

次に獨逸と比較したらどうか、茲に於ても幼者が日本よりも高いのは今申上げました結核性腦膜炎の報告が日本に於て不完全である爲めであります、其外若い階級は何れも日本の率が獨逸よりも高い、六十歳以上の老年に至りて漸く獨逸よりも日本が低くなります、其歩合はどうかといふと、十五歳より三十歳といふ青年壯年の階級に於て獨逸の百に對する日本は百九十六に當ります、老年者即ち七十歳以上に至つて日本の百に對する獨逸は百四十七に當りまして、獨逸の方が高くなりますが、中年の働盛りの大切なる國民は獨逸人に比しますると遙に日本人が結核性疾患に罹つて死亡する割合が高い、日本人の青年の死亡率の高くなる原因として結核が殊に注目せられなければならぬといふことが是に於ても知らるゝのであります、併し獨逸と日本との結核性疾患の總死亡率を比較しますと、日本が多くて獨逸が少い、又英吉利と比較しましても全體に於て英吉利よりも日本の方が遙に多い、英吉利の百に對する日本は百五十三、獨逸の百に對する日本の百三十二といふやうに多いのでありますから、強ち青年の結核死亡が英吉利よりも獨逸よりも高いといふことは言はれぬかも知れぬ、全體に

於て既に高いのであるから、青年に於てのみ高いのが日本の特徴であるといふことは少しく言が早計に失するかも知れぬ、それで或は日本と等位の結核死亡比例を持つて居る國があつたならば、夫と比較して見たいと思ひました。然るに現代の諸國ではちよつと見當らぬ、そこで少し古い所に溯つて調べて見ますとプロイセンの千八百九十六年から千九百年までの五ヶ年平均の結核死亡率が日本の現時と殆ど等位であります、プロイセンの率の百に對する日本の率の指數は九十九、又日本の率の百に對するプロイセンの率の指數は百一といふ割合でありますからプロイセンの此當時の率を持つて來まして、日本の今日の率を比較しましたならば、總數に於ては殆ど等位であるが、年齢別に於てはドンナ相違があるか、それに依りて日本の特徴が確められはせぬかと思ひました。

年齢別結核死亡率、日勃比較

(各年齢人口一萬に付)		日本の率の百に對する勃の率の指數	
日 (三九一四三年)	プロイセン (一八九六―九〇〇年)	勃の率の百に對する日本の率の指數	日本の率の百に對する勃の率の指數

年齢別	そのおもかげ	七二
總數	二〇・九二	二二・二
〇—一	二〇・八二	二二・三〇
一—二	一六・五一	一六・六
二—三	一三・六〇	九・〇
三—五	九・九八	六・〇
五—一〇	七・五七	四・四
一〇—一五	一二・九一	六・五
一五—二〇	三四・三六	一五・四
二〇—二五	三九・七八	二四・三
二五—三〇	三一・七五	二五・〇
三〇—四〇	二二・九二	二七・六
四〇—五〇	一九・四八	三二・二
五〇—六〇	二〇・三〇	三八・一
六〇—七〇	一六・九六	四八・七
七〇—八〇	一一・五五	三〇・〇
八〇—	七・二五	一四・三
		九八・七三
		一〇一・三四
		九〇・五二
		九九・四六
		一五一・七八
		一六六・三三
		一七二・〇五
		一九八・六二
		二二三・二三
		一五八・一五
		一二七・〇〇
		八三・〇七
		六〇・三一
		五二・二九
		三四・八三
		三八・五〇
		五〇・七〇
		一八八・一二
		二八八・一五
		二五九・七四
		一九七・二七

是に於ても幼者は日本の方が少し低い、是は前にも申しました結核性脳膜炎の關係でありましやう、併し其低いのは一歳までが著明であるばかりで一歳以上二歳は既に大差がない、それから二歳以上三歳、三歳以上五歳は餘程日本が高くなりまして、五歳からは更に其高さを増し、十五歳以上二十歳の年齢階級になりますと最も日本が高くプロイセンの率の百に對する日本の率の指數は二百二十三になります、之に次くものは此前の階級即ち十歳以上十五歳でありまして、プロイセンの百に對する日本は百九十八といふ高さ、日本の率がこの青年の階級に於て非常に高いことは此比較に於ても同斷であります、而して三十歳以上になりますと日本の率よりもプロイセンの率が高くなりまして、老年は老年ほど其高さを増す狀況であります、之に依つて見ますとプロイセンの今から十幾年前の事實と日本の現今の事實と比較しますると、結核死亡率に於ては殆ど同一であるが、之を年齢別と爲して見ると年少者に於ては日本の率は遙にプロイセンよりも高く、さうしてプロイセンは老年者の結核死亡は日本より高いのであります、即ち之で英吉利との比較、獨逸との比較に於て日本の青年壯年に結核

死亡が多いのは全数が多い影響だけではない、全数の等位なるプロイセンと比較しても青年に多くて老年に少いのであるから、此青年に結核死亡の多いといふことは日本の特徴であると言はなければなりません、而して英吉利は老年者も日本より率が低いのに、獨逸も古いプロイセンも老年者は日本より高いことが頗る奇なる現象のやうに見えますが、私は是が結核の消長を説明する面白い點でないかと思ひます、いづれ此事に就ては後に又申上る機会があると思ひますから今は略します。

八、文化の程度と結核性疾患

是までは結核性疾患に因る死亡の總數に付て申上げました、次には男女の性に依りて別ちたる結核死亡の人口比例を英吉利と比較して見ようと思ひます。

各性年齢別結核死亡率、日英比較

(各性年齢別人口一萬比例)

總數	日本(三九一四三年)		英吉利(一九一二年)	
	男	女	男	女
一九・四〇	一一・五三	二二・五三	一五・六九	一一・七五

年齢別	日本(三九一四三年) 男	日本(三九一四三年) 女	英吉利(一九一二年) 男	英吉利(一九一二年) 女
〇—五	一四・二七	一三・八五	一九・四七	一六・九六
五—一〇	五・九二	九・二七	五・五七	五・四四
一〇—一五	六・九七	一八・九九	四・二五	六・五七
一五—二〇	二五・六六	四三・三五	九・二〇	一二・三六
二〇—二五	三六・一八	四三・四六	一四・八六	一三・四八
二五—三〇	二八・三三	三五・二一	一七・〇三	一三・七二
三〇—三五	二一・四〇	二七・〇二	一九・六〇	一四・二七
三五—四〇	二〇・一四	二二・五六	二一・六〇	一四・九〇
四〇—四五	一九・五七	一八・六六	二三・一二	一三・五一
四五—五〇	二二・二四	一七・五二	二四・八一	一二・八六
五〇—五五	二三・三二	一七・一七	二三・九一	一〇・八八
五五—六〇	二四・六三	一七・八六	二四・三〇	一〇・四六
六〇—六五	二三・二八	一三・五七	二二・六七	一〇・〇四
六五—七〇	一九・六〇	一〇・五六	一六・五九	八・六五
七〇—七五	一六・六三	九・三五	一一・三一	七・三四
七五—八〇	一二・二九	七・九六	六・八〇	六・一六

八〇・八五	七・七七	六・七四	五・〇七	三・五九
八五——	六・八六	七・七八	三・〇四	三・一〇

即ち先づ英吉利の事實を見ますると十歳から二十歳までを破格として、其他の各年齢階級を通して女よりも男の結核死亡率が高い、然るに日本に於てはどうかといふと青年に於て男も高くはありますが、女の若い階級は男の同階級よりも遙に高い、總數に就て男女の權衡を見ますと、英吉利に於ては女の率の百に對する男の率は一三三・五でありまして、男が遙に高いのであります、然るに日本の女は結核性疾患で死亡する者が多い、それ故に日本に於ては女の率の百に對する男の率は八六・一でありまして、英吉利の男が女に超過する、それよりは開きが小さくはありますが、兎に角男よりも女の結核死亡が遙に多い、此事實は決して輕々に見ることの出來ない重要なことであらうと思ひます、そこで問題は獨り日本に於てのみ女の結核死亡が男より多いかといふことになる、私は外國の事實を段々觀しましたが、英吉利は今申上た通りでありますし、獨逸は最近即ち千九百十年及十一年の平均は人口一萬比例男一六・二九、女一五・

四五で、女の率に對する男の率は一〇五・四で、英吉利よりは低いが男の率が高い、佛蘭西は全國の統計は有ちませんが、巴里の千九百一年から五年までの平均は人口一萬比例男四九・〇、女二九・九で頗る高率であります、男が女より高いことも少々でない即ち女の率の百に對する男の率は一六四・〇であります、又北米合衆國の千九百十一年の統計を見ますると、人口一萬比例の男が一七・九四女が二三・八〇で是も男が高い、即ち女の率の百に對する男の率の指數は一三〇・〇であります、澳地利は歐洲に於て結核の多い國であります、千九百四年から八年の平均で人口一萬比例が男三二・四三女三二・四一で、殆ど等位であります、又歐洲に於ける一破格とも見るべきものは伊太利でありまして女の率が高い、之も千九百四年から八年の平均であります、人口一萬比例男一五・八七女一七・六九で、女の百に對する男の率の指數は八九・七一で本邦よりも男の割合に少しく高いだけであります、併し其都府であるフロレンスなどを見ますると千九百七年から十一年の平均人口一萬比例が、男三七・六女三〇・五で女が高い、即ち男の率の百に對する女の率の指數は一二三・三に當りま

す、モウ一つ南米のチレの千九百四年から八年の平均を見ますと人口一萬比例の男が二八・三九女が二九・二〇では是も少しではあるが女が高い、女の率の百に對する男の率の指數は九七・二二であります、是等の事實に徴しますると、文明國の多くは女の結核死亡率が男のそれよりも高い、何故に伊太利に於て男よりも女の率が高いか、何故に澳地利の男女の率が等位であるか、私は今其原因を詮索することを止めまして茲に一の想像を描いて見る、それは男女の結核死亡率と文化の進歩との關係がありはせぬかと言ふことであります、而して此想像は英吉利(英蘭)の過去の統計に徴しますると稍事實らしくなるのであります。

英吉利に於ける累年各性總死亡率及結核死亡率

年	總死亡率 (人口千に付)		結核死亡率 (人口萬に付)	
	男 指數	女 指數	男 指數	女 指數
一八五二—一六〇年	三三・一	二〇・三	二五・九	一〇〇・〇
一八六一—七〇年	三三・六	二〇・三	二四・八	九五・八
一八七一—八〇年	三二・八	一九・〇	二三・二	八五・七
一八八二—九〇年	一九・五	八・二	一五・八	六二・〇
一九〇一年	一八・五	八・三・七	一四・九	五七・六
一九〇二年	一七・七	八・〇・一	一四・六	五六・四
一九〇三年	一六・八	七・六・〇	一四・三	五五・二
一九〇四年	一七・六	七・九・六	一四・六	五六・四
一九〇五年	一六・五	七・四・七	一三・五	五二・一
一九〇六年	一六・八	七・六・〇	一三・六	五二・五
一九〇七年	一六・二	七・三・三	一三・五	五二・一
一九〇八年	一六・〇	七・二・四	一三・二	五一・〇
一九〇九年	一五・六	七・〇・六	一二・八	四九・四
一九一〇年	一四・五	六・五・六	一二・九	四五・九
一九一一年	一五・七	七・一・〇	一二・三	四五・五
一九一二年	一四・二	六・四・三	一一・九	四五・九
一九一三年	一四・八	六・七・〇	一一・五	四四・四

前世紀の半ば以降英吉利の結核死亡率は男女共に非常なる勢を以て低下しました、

而して其男女を比較しますと男よりも女の低下が頗る急峻でありますことは、此表の指数を見るに於て明瞭であります、此結核死亡率の關係は直に總死亡率に及ぼしまして、茲に於ても女の率の低下が男よりも急峻であります、それ故に古き時代に於ては男よりも女の結核に侵さるゝ割合が大であつた、それが段々人工を加へるによりて男女共に罹病数が少なくなるが殊に女の罹病数が男よりも急劇に少くなる、それ故に結核は自然に任せて置けば比較的抵抗力の弱かるべき女の方が多く侵される、即ち文化の進まざる是等害物に對して豫防乃至制遏の力の加はらざる時代に於ては女が多く侵されると云ふことになりはせぬか、生憎唯一國の材料しかありませんが、私は此想像は決して力なきものでないと信じて居ます、總數はそれだけにして年齢別に就て見ますと、英吉利は十歳以上十五歳、十五歳以上二十歳の二階級に於て男の率よりも女の率が高い、其外は總ての階級に於て男の率が女よりくあります、それから男の率は五歳未滿を別にして年の長ずるに従て率の增高することは總數の場合と同様で四十五歳から六十歳の三階級に最高がありて、それから下降します、女は男よりも最高位が早

くて三十歳から四十歳までの階級に在ります、然るに日本の年齢別を見ますと、五歳未滿を別として、四十歳までの總ての階級は女の率が男のそれよりも高く、四十歳からは男の率が女の率よりも高い、是既に英吉利とは餘ほど異なつた型でありまして更に之を細觀しますると男に於ては山が二つある、即ち其一は若い年齢の山で、二十歳以上三十歳が頂巔、それから降つて四十歳以上四十五歳が谷の底と爲り、又昇りて老年の山が出来、五十五歳以上六十歳が頂上で、若い山よりは遙に低くあります、可なり高い山があつて、それから老年に降ります、即ち若い山さへなければ、英吉利と同型になるのでありますが、此若い山だけ英吉利よりも高いことに爲る、又女は一層甚しくて十五歳以上二十五歳までの階級が非常に高い山の頂巔を爲しまして、それから老年には殆ど山を見ないのであります、之を英吉利に比しますると男を比したよりも尙ほ大なる相異で若い階級の餘程低い根から取除いて見ないと一致せしむることが出来ません、それ故に日本の性別年齢別結核死亡率を英吉利と比べると男女共に若い階級が彼よりも我に多い、而して其多い割合は男に於けるよりも、女に於て殊に甚

しいのであります、此結核死亡の關係が總死亡率の上に及ぼしまして、日本の青年の死亡率は男よりも女が高い、それは他國に殆ど例の無いことで、而も其高率なることと云ふものは決して少々ではないのであります、既にこれだけ申上りますと日本の結核の性別の關係は大概御判りになることと思ひますが、要するに男よりも女に結核死亡の多いといふことは英吉利の既往の事實に徴しても、文化の程度の低い徵證であるらしい、而して之を年齢別すれば其徵證は若い階級即ち青年者に於て殊に著明であります、此青年者に多いといふことも或は亦文化の進歩と關係を有つて居るのでないか、私は之をも茲に述べて見たいと思ひます。

文化の程度の低い邦國に於ては、年少者の結核に侵されて死亡する者が多い、文化の程度が進めば進むほど即ち人工の力なる衛生法が能く行き届けば届き行くほど、結核に侵されて死亡する者の全數も減少することは勿論であるが、殊に青年の結核死亡者が著しく減少する、是も一の想像であります、前の女の結核死亡の想像と同様に事實を研究して參りますと、それが想像でなく、基礎のある事實と爲ることを悲みま

す。

諸君の前に立ちて斯様のことを申上ては甚だ烏滸の至りであります、全體本邦の文化の程度は歐洲に比して約半世紀後れて居る、それ故に日本の現在と歐洲諸國の現在と比較しては甚だ解決し能はぬことが多いのであります、勿論、實際生活の凡ゆる状態が必ずしも並行するものでもありません、或る事は歐洲の諸國に超絶して居ることもありまじやうが、私共の主なる觀察體である社會組織の状態及其變化は、大體に歐洲よりも半世紀後れて居る、其反映である人口統計は一々に其關係を示して居ます、即ち今や恰も日本に於て生産率が益々高くなるといふやうな現象は、歐洲に於て千八百五十年から七十年頃に見たる現象であります、今其一々を申ませんが、即ち我々共の立脚點を歐洲より約五六十年後に置いて、觀察すると解決に便を得ることが、大にあるのであります、唯今申ました女の結核の如きも英吉利の遠い既往に溯ると、日本の今日と同様に、女の率の高かつたことのあつた事實が知られました、モツト溯つたならば恐らく總死亡率も、女が男を超過した日本の今日と同一のこともあつ

たかと思ふ、それ故に年齢別結核死亡率に於ても、私は古い所の材料を求めて見ました、即ち英吉利に於て千八百五十八年、九年頃の年齢別と爲したる結核死亡数をエスレルレン氏の著書から見出しました、それは肺結核ばかりでなく、總ての結核死亡の合計でありました、私の手許には恰も此時代の年齢別人口を有ちませんでしたから變則ではあります、其結核死亡の總數に對する年齢別の百分比例を算出し、それに英吉利の現時と日本の事實とを同様にしまして比較することに致しました。

結核死亡數年齢別百分比例、日英比較

其一 總數に對する比例

日本 (三九—四三年)	英吉利	
	一八五九年	一九二二年
〇—五	八・四六	二一・二
五—一〇	四・一四	三・八
一〇—一五	六・二九	三・八
一五—二五	三〇・五三	二〇・五
二五—三五	二〇・八〇	一九・八
		一四・二六
		四・一三
		三・八五
		一六・四二
		一九・三七

三五—四五	一一・一〇	一四・七	一七・八三
四五—五五	八・六八	九・二	一二・八四
五五—六五	六・七七	五・〇	七・七二
六五—七五	二・四八	一・七	三・〇一
七五—八五	〇・五八	〇・三	〇・五三
八五—	〇・〇八	〇・〇一	〇・〇四
計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇〇

是に擧げたる年齢別は零歳より五歳、五歳より十歳、十歳より十五歳、十五歳より二十五歳、以上十歳階級に八十五歳まで、それから八十五歳以上を一括しました、此百分比例に就て千八百五十九年の状態を見ると其分節數の最も大なるものは、零歳より五歳までの幼弱者でありまして、それに次ぎて大なる分節數は、十五歳より二十五歳、それから二十五歳より三十五歳といふ年齢者であります、而して之を英吉利の今日の状態と比較すると、此約五十年を隔てたる新古兩百分比例には大分相違があるのであります、即ち新比例は古比例よりも幼弱なる者並に青年者の結核死亡數が少くな

つて、青年以上の即ち二十五歳以上の者に結核性疾患の死亡者が多くなつて居るのであります、此現象は二十五歳以上の者の結核性疾患に罹つて、死亡する者が多くなつた爲めであるか、それとも青年以下の結核死亡者が少なくなつた其比例上の誤差として、青年以上が多くなつて見ゆるのであるかが問題であります、然るに今日の日本と比較したら如何であるか、即ち明治三十九年から四十三年の五ヶ年平均で見ますと、十五年より二十歳の階級の分節比例数が非常に大きい、それは英吉利の五十年前の古い比例と比しましても遙に大きい、併し此三の分節比例を此まゝ比較することには少しく無理がある、なぜかといふと、何處に於ても總ての結核死者中に多少の隠れて居る者のあることは事實でありませうが、就中日本の幼少なる者即ち零歳より五歳までの結核死亡者中には、其大多數の結核性脳膜炎が逸せられてある、前に申たやうに結核性脳膜炎が少なからず單純の脳膜炎の如く報告されて居る疑が大にある、斯く大多數が隠れて居るといふことが、殆ど明かに知られて居る數を其まゝ持つて來て比較することは比較の眞を得たものでありません、殊に英吉利の小兒死亡には特殊の關係あ

ることを考へれば、尙更のことでありませう、故に次には零歳より五歳までの幼少なる者を英吉利の新古兩數からも、日本の數からも除外しまして、五歳以上の結核死亡者の總數に對する年齢別の百分比例を算出して比較することにしました。

結核死亡數年齢別百分比例、日英比較

其二 五歳未満を除外したる比例

	日本 (三九—四三年)		英吉利	
	日本	英吉利	一九一九年	一九二二年
五—一〇	四・五二	四・八二	四・八二	四・八二
一〇—一五	六・八七	四・八二	四・八二	四・八九
一五—二五	三三・三五	二六・〇二	二六・〇二	一九・一五
二五—三五	二二・七二	二五・一三	二五・一三	二二・五八
三五—四五	一二・一三	一八・六四	一八・六四	二〇・八〇
四五—五五	九・四八	一一・六七	一一・六七	一四・九八
五五—六五	七・四〇	六・三四	六・三四	九・〇〇
六五—七五	二・七一	二・一六	二・一六	三・五一
七五—	〇・七二	〇・四〇	〇・四〇	〇・六七

計

一〇〇・〇〇

一〇〇・〇〇

一〇〇・〇〇

日本の最も近い五ヶ年平均と、英吉利の約五十年前の事実と、英吉利の現今の事実を比べますと、何處に違ひがあるかと申しますと、幼少なる十五歳以下の二階級に於ては餘り違ひがない、十五歳以上二十五歳まで、此階級以上に大差が見えます、即ち前にも申ましたやうに、英吉利の新古の比例では、古比例に於て若い階級が廣くあつたものが、新比例に於て狭くなりまして、さうして狭まかつた二十五歳以上の階級が廣くなつて來たのであります、なぜ年長の階級が廣くなつたか、なぜ年少の階級が狭くなつたか、此事實は前にも申たやうに、或は年少の階級が狭くなつた爲めに年長の階級が廣くなつたのであるか、又は其反對であるか、孰れにしても年少の階級が少くなつて、年長の階級が多數になつて居ることは、明かに見らるゝ事實であります、然らば英吉利の千八百五十九年といふ時代は、結核の消長に於て如何なる時代であつたかといふと、御承知の通り、英吉利の結核死亡數が段々少くなりましたのは、千八百四十年代からのことであり、千八百四十一年には英吉利の結核死亡は、總結核數に

於きましては人口一萬に於て四三、肺結核の死亡は人口一萬に於て三六餘でありました、それから段々消長がありました、併ながら全體に於ては段々少くなつて來まして恰も茲に擧げました千八百五十九年といふ時期、即ち六十年に於ては總結核の死亡は人口一萬に於て三四、肺結核の死亡は人口一萬に於て二五・五に低下して居りまして、僅に二十年間に於て著しく減少したのであります、それから以來、今日に至る約五十年間に於ては、如何に消長があつたかといふと、之れ亦人口一萬に於て二〇以上の死亡者を減じて居るのであります、若し此約五十年間に於て年々遞次に減少して來たものとする、英吉利の結核は年々年少の階級の死亡者が減じて來たものと見なければならぬ、勿論年長の階級に於ても減じたには相違ないが、之を年少の階級の減じ方に比すれば緩慢であつたのであります、年少の階級の減じ方が著しかつた爲に、此の如く總數が少くなつたのであります、若し此言に道理があらうとしますれば、千八百五十五年以前、即ち此時よりも人口一萬に於て一〇以上も比例數の高かつた時代を追想すると、年少の階級の廣かつたことは、千八百五十九年で見たるよりも、ヨリ以上廣か

つたであらうと見ることが出来ませう、而して翻て日本の状態を見ますと、約五十年前の英吉利と現今の英吉利とを比較して、現今の英吉利か年少の階級の少くなつたと同じやうに、五十年前の英吉利と今日の日本とを比べると今日の日本は五十年前の英吉利よりも年少の階級が廣いのであります、それ故に今日の日本を七八十年も乃至は百年も前に送つて置きまして、それから段々年少の階級が減じて千八百五十九年があり又年少の階級が減じて、現今の英吉利に移つて来たものと假想することが出来るのであります、何故に斯かる現象があるか、私共の研究範囲はそれ以上に出づることが出来ませんが、假りに斯うも考えられる、即ち自由自在に結核をして蔓延するがまゝに任して置いたならば、前に申た男よりも女が多く侵されると同様に、結核性疾患は最も強く年少の階級、就中幼者と青年とを侵すものではありませんまいか、それと反対に若し結核の蔓延を防止する所、人工の働きが行はれますと、女の結核死亡が先づ少なくなる、それと同時に年少の階級に於て其死亡数が段々減じて来る、而して、それが全體の結核性疾患の死亡が減じて来る其最も強い原因に爲るのであります、素より男

の結核も減少しましたが、其減少の歩調は女の如く急調でない、年長者も減少することとは當然減少したのであります、之を年少者の減少したのに比すれば緩慢なのであります、事少しく餘談に涉りますが、英吉利が如何にして結核性疾患を斯様に少くしたか、御承知の通りコッポ博士が結核菌を發見せられて、結核の病性が明瞭になりましたのは、千八百八十一年のこと、思ひます、其病源の發見せられない四十年も以前に於て、既に英吉利の結核性疾患が段々少くなりつゝあつたのであります、どうして斯くは少くなつたかといふと、それは國民一般の教育の高いこと、それから國民が公德心を重んずる念の強いこと、それ等から胚胎しまして、當時未だ病源は發見せられなかつたけれども、追々發達する醫學に由て臆げながら傳染路が知れ、傳染の媒介物が知れて來ましたので、結核患者自身も自らの病氣が他人に傳染するといふことを知り、さうして傳染の媒介物を猥りに放棄することの非を覺り、一步は一步より合理の豫防が行はれるやうになつた、それ等の關係から次第に減少して來たのであると申す、それ故に國の力も加はつたに相違ないが、主としては國民教育の高いとい

ふことが、其處に知らず識らずに推し及ぼした、即ち個人の注意が最も大なる人工の力であつたと言ふことです、然るに獨逸の結核の少くなつたといふことは、英吉利と餘程異つて居るやうであります、獨逸の結核の少なくなつたといふことは、之にも多くの原因の働きがあつたでありませうが早期に於て結核患者を知り得て之を隔離する彼の強制労働保険の副産物として見ることの出来る働きが最も著明に認められて居るやうであります、それ故に獨逸の結核減少は労働保険の行はれたる後のことで、而も英吉利の如く漸進の歩を取らず頗る急劇に減少したのであります、英吉利や獨逸に於ける結核性疾患の減じたることは、斯様に一般國民の注意力の高いといふことや、國の制度の力やに歸するのであります、されば何れにしても人工の力が加はつた爲めに結核性疾患を排除し得たので、若し其人工の力が加はずに自然に任してあつたならば、決して今日の如き美果を得られなかつたことと思ひます、さて退いて日本の狀況を顧みますると、前にも申し上げました如く段々年少の階級の結核死亡者が多くなる、又女の結核死亡者が多くなる、此事實が著明であるにも拘はらず、日本に於て結核豫防上

如何なることが行はれて居るか、殆ど一として言ふことの出来ない現状であります、近頃漸く世の問題を惹起して居るやうではありますが、實質ある働としては何事も無い、殆ど無である、何事も爲さない所の日本に於て結核性疾患の減じないのは寧ろ當然である、而して其減じない所の結核は年長の階級に於て減じない計りでなく、年少の階級の結核死亡を増加しつゝあるのであります、申すまでもなく青年壯年は國民の中堅であります、此中堅ありて國力を維持し、後繼者を産し之を養育するのであります、其國民の中堅が最も多く結核性疾患に侵される、將來も若し此儘にして進んで行きましたならば、國民の中堅は益々多く結核性疾患に侵さるゝやうになると考へられます、而してそれが重大の原因と爲りて、歐洲の諸國に比し二倍乃至三倍の死亡を出しつゝあるのであります、是決して等閑に見るべからざる國家の大事であります。

九、日本の死亡統計上の一秘事

最後に今一つ男女の年齢別死亡に就きまして、私の研究上興味を有つて行ひました一事を申上ます、私は此研究によりて日本の死亡統計上の一秘事を發き得たやうに思

ふて居ります、それは若い年齢階級の者——十歳以上から、四十歳乃至四十五歳位までの男女の死亡率を見ますと、他國にはない特異の状態があります。

日本各性年齢別死亡率累年比較 其一 (抄録)

各性各年齢人口千に付

年齢別	明治三—三三年		同三—六年		同三—九年		同三—十二年		同三—十五年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
總死亡率	三〇・二六	一九・五三	二〇・六四	二〇・七七	二二・〇三	二〇・一一	二〇・四六	二〇・四二	二〇・七五	二〇・八七
一〇—一五	四・〇八	四・三四	四・四五	四・二〇	四・〇五	四・五九	三・三二	四・六四	三・四三	五・一〇
一五—二〇	六・四三	六・八三	六・六六	七・二三	六・二六	七・三六	六・五七	八・六一	七・〇三	九・五〇
二〇—二五	八・二〇	九・三二	九・〇三	九・七六	八・〇三	九・一五	八・三九	一〇・〇三	八・九五	一〇・八八
二五—三〇	八・一一	九・六六	八・五〇	九・六〇	八・二九	九・七三	七・五〇	九・八四	七・九四	一〇・一九
三〇—三五	八・二二	一〇・五八	九・三二	一一・二七	八・二四	九・五六	七・八三	一〇・三九	七・五七	一〇・〇九
三五—四〇	一〇・〇〇	一一・六八	一〇・一一	一一・四六	一一・一一	一一・六八	一〇・五〇	一一・五〇	八・八〇	一一・〇一
四〇—四五	一一・三三	一二・〇〇	一一・六七	一二・二九	一一・二九	一一・三四	一一・五二	一二・七二	一〇・六二	一二・〇二

日本各性年齢別死亡率累年比較 其二

男の死亡率に對する女の死亡率の多(少)

年齢別	明治三—三三年	同三—六年	同三—九年	同三—十二年	同三—十五年
總死亡率	一〇・七五	一〇・一三	一〇・九二	一〇・〇四	一〇・一五
一〇—一五	一〇・一六	一〇・二五	一〇・五四	一〇・三一	一〇・六七
一五—二〇	一〇・四〇	一〇・五七	一〇・一五	一〇・〇四	一〇・四七
二〇—二五	一〇・一一	一〇・七三	一〇・一一	一〇・五三	一〇・九三
二五—三〇	一〇・五五	一〇・一一	一〇・四四	一〇・三四	一〇・二五
三〇—三五	一〇・三七	一〇・八六	一〇・四二	一〇・四六	一〇・五二
三五—四〇	一〇・六八	一〇・三五	一〇・五二	一〇・九二	一〇・二一
四〇—四五	一〇・二三	一〇・四八	一〇・〇五	一〇・二六	一〇・〇八

日本各性年齢別死亡率累年比較 其三

男の死亡率百に對する死亡率の指數

年齢別	明治三—三三年	同三—六年	同三—九年	同三—十二年	同三—十五年
總死亡率	九六・三〇	一〇〇・六三	九六・六三	九九・八〇	一〇〇・七二

そのおもかげ

一〇一五	一〇三・三三	一〇五・六二	一一三・三一	一三九・七六	一四八・六九
一五二〇	一〇六・二二	二〇八・五六	一一八・五二	一三一・〇五	一三五・一四
二〇二五	一一三・六六	一〇八・〇八	一一三・九五	一一九・四三	一二一・五六
二五三〇	一一九・一一	一一二・九五	一一七・三七	一三一・二〇	一二八・三四
三〇三五	一二八・八七	一一九・九八	一一七・四四	一三一・四二	一三三・二九
三五四〇	一一六・八〇	一一三・三五	一一四・九六	一二一・三八	一二五・二一
四〇四五	九八・一二	九六・二一	一〇〇・七一	一〇二・二六	九九・二二

九六

日本各性年齢別死亡率累年比較 其四

各前平均率に對する後平均率の増減

年齢別	二一—二三年に對する 二四—二六年の増減		二四—二六年に對する 二九—三三年の増減		二九—三三年に對する 三三—三六年の増減		三三—三六年に對する 三九—四三年の増減	
	男	女	男	女	男	女	男	女
總死亡率	40.36	11.34	10.39	10.66	30.57	30.31	30.26	30.45
一〇—一五	40.32	30.52	30.40	10.11	10.31	30.02	30.11	30.42
一五—二〇	40.33	30.40	10.42	30.01	30.36	31.25	30.46	30.82
二〇—二五	40.33	30.44	11.00	10.21	30.36	30.82	30.56	30.86

日本男の年齢別死亡率累年比較

明治二一—二三年の率を百と爲したる各年の率の指數

年齢別	明治二一—二三年		同二四—二六年		同二九—三三年		同三四—三六年		同三九—四三年	
	率	指數	率	指數	率	指數	率	指數	率	指數
一五—三〇	40.32	30.06	10.11	30.13	10.32	30.11	30.44	30.32		
三〇—三五	41.10	10.52	10.17	11.21	10.31	30.31	30.26	10.10		
三五—四〇	40.11	10.12	30.02	10.31	11.52	11.12	30.31	30.51		
四〇—四五	40.44	30.12	11.26	10.22	30.17	10.43	11.33	11.57		

年齢別	明治二一—二三年	同二四—二六年	同二九—三三年	同三四—三六年	同三九—四三年
總死亡率	100.00	101.65	103.70	100.89	102.17
一〇—一五	100.00	108.07	99.26	81.37	84.07
一五—二〇	100.00	103.58	96.58	102.18	109.33
二〇—二五	100.00	110.12	97.93	102.32	109.15
二五—三〇	100.00	104.81	102.22	92.48	97.90
三〇—三五	100.00	113.40	99.15	95.37	91.96
三五—四〇	100.00	101.10	101.60	85.80	88.00
四〇—四五	100.00	103.60	92.31	94.11	84.06

日本女の年齢別死亡率累年比較

明治二一―二三年の率を百と爲したる各年の率の指数

年齢別	明治三―三年	同四―九年	同十―三年	同四―六年	同元―四年
總死亡率	一〇〇・〇〇	一〇六・三五	一〇二・九七	一〇四・五六	一〇七・一七
一〇―一五	一〇〇・〇〇	一一〇・八五	一〇八・二五	一〇九・四三	一一〇・二八
一五―二〇	一〇〇・〇〇	一〇五・八六	一〇七・七六	一二六・〇六	一三九・〇九
二〇―二五	一〇〇・〇一	一〇四・七二	九八・一四	一〇七・五一	一一六・七四
二五―三〇	一〇〇・〇〇	九九・三八	一〇〇・七二	一〇一・八六	一〇五・四九
三〇―三五	一〇〇・〇〇	一〇五・五八	九〇・三六	九七・一六	九五・三七
三五―四〇	一〇〇・〇〇	九八・一四	一〇〇・〇〇	八九・九〇	九四・二六
四〇―四五	一〇〇・〇〇	一〇一・五八	九四・五二	九八・〇八	八五・〇〇

是等の數字の總てを解説することは、短時間で爲し得る業ではありませんから、茲では唯大體を申上るに止めます、即ち明治二十一年から二十三年までの三年の平均、それから二十四年から二十八年の平均、爾後各五年平均の年齢別死亡率を比較すると、

四十歳以下の總てが男の率よりも女の率が高い、就中二十九年から三十三年の率は其以前に無い女の率の高さを示し、三十四年から三十八年の率は又更に女の率の高さが増し、最近の三十九年から四十四年は、又一層女の率が著しく高くなつて居る、此女の率の高さが益々高くなる傾向は、日本の年齢別死亡率のありて以來見る所でありまして、而も總死亡率に於て男の率よりも女の率の低い時に於ても之を年齢別と爲して青年壯年を見ると女の率が高い、是實に日本の死亡統計に於てのみ見る特異の現象であります。

以上各年の中二十四年から二十八年までは、頗る變事の多かつた期間でありまして、痘瘡の大流行、赤痢の大流行、それから二十七八年の戦役があつて最後に二十八年のコレラ流行がありました、斯様の非常年に於ては、各年齢を通じて死亡率が高い、此一事は豫め注意していただきたい、そこで先づ男女の死亡率の累年の推移から申しますが男の總死亡率は大體に増高しては居るが、女の如く著しくなく、女の死亡率二四―二八年を破格とすれば、殆ど整然たる歩調を以て増高して居る、此二十二年間に於て男は

結局二%餘を増しただけであるが、女は七%以上の増加になつて居る、前に掲げたる英吉利の男女の死亡率など、比較して、誠に奇觀ではありませんか、各年齢に於ては一〇—一五歳の男は非常年期の外は減少し居る、然るに女は少しも減少せずして大に増加して居るのであります、男は此二十二年間に結局一六%の減であります、女は二〇%餘の増加になります、一五—二〇歳に於ては男の率は唯一回低下しましたが、結局九%餘の増加になりますが、女は中々それ所でない、整然少しも低下せず長足の歩武を取りて進み、結局三九%の非常なる増加であります、二〇—二五歳も男は殆ど同型で、矢張九%の増であります、女は餘程増加の勢が弱まるけれども男に於ては見られない、一六%餘の増加があります、併し其弱まつたことは結局の率が低ければかりでない、一度は減少したことさへあります、女は二五—三〇歳でも、尙増加の歩調を取つて居ますが、男は二五歳以上になると結局は寧ろ減少して居ます、女も三〇歳以上になると結局減少するけれども、其減少の歩調は男よりも緩慢でありまして、男の如く低くは下りません。

そこで男女の率を比較しますと、總死亡率に於てこそ、男の率の高い年が寧ろ多いのであります、十歳以上四十歳までの年齢別死亡率に於ては總てに於て女の率が高い、併し之を仔細に観察しますと、其高い型が各年に於て一樣でない、之を男の率に對する女の率の指數で見ますと、二一—二三年の平均は女の較差の最大なるは三〇—三五歳にありまして之より年少と年長とへ山脚を垂れて居る、然るに二四—二八年は餘程平等的になりました、山頂の高さが大に減じ山脚が高さを増しましたから傾斜が大層緩かになつて來た、それが二九—三三年になると一層平等的になりました、最高所は移りて一五—二〇歳の所に參りました、併し二五—三〇歳の二階級は矢張他よりも高いこと高いのであります、頂上ではない、山が甚だまづい凸凹のものになりました、三四—三八年に至りますと、若い頂上が更に前進して、一〇—一五歳に參りました、三九—四三年は若い山が一層嶄然と現はれまして、三〇—三五歳にも居ます、次の三九—四三年は若い山が一層嶄然と現はれまして、三〇—三五歳にも山はありますが、比較にならぬほど高さが違ひまして、所謂泰山たるの地位は全く一

〇一五歳の階級に移りました、女の率が男に超過する其状態が斯の如くであります、是が果して何を意味するものと見てよいでしやう。

日本に於ける青年者壯年者の女の死亡率が、男の死亡率に超過することは今に始まつたことではない、年齢別死亡率ありて以來、既に見られる所であるが、併し嘗ては三十歳前後の者に於て著明であつたのでありますが、それが段々近い年になるに従て若い年齢階級が男に超過する度合が高くなつて來た、けれども三十歳前後の者の超過度合がそれが爲めに低下はしない、依然として高いのみならず是も矢張増高して居る其増高しつゝある上に、若い階級が超過することが高くなつて三十歳前後よりも遙に高くなつたのであります、この關係は餘程微妙でありまして、精密に剖析いたしますと、面白い問題が幾つも出るのでありますが、今は大まかに以上だけを申上げて置きます。

此微妙の現象にまで入りませんが、青年の階級の男女の死亡率を比較したる場合に、日本の如く女の率が男に超過すること著しきことが、他國に於ても見られるや

否や、私は之を觀察する爲めに前には佛蘭西のメルチヨン氏の蒐集せられたる材料によりて、諸種の加工を爲しました、又近くは北米合衆國の死亡統計に載せられたる材料によりて、是亦諸種に加工致しましたが、併し今それに就て比較評論をして居る時間がありませんから、今は其總てを略しまして、唯御参考までに十五ヶ國に於ける青年及壯年の男女の死亡率を列掲いたしました、日本の如き特異の状態を呈するものは世界の文明國には無いといふことを申上るに止めます。

各国各性年齢別死亡率比較 (抄録)

各性各年齢人口千に付男に對する女の多(少)

年 別	總死亡率		10-15		15-20		20-25		25-30		30-35	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
歐洲露西亞 (一九六-九年)	二九・八〇	二七・四九	五・三七	五・四八	五・九二	六・〇四	七・四五	七・七四	八・八一	八・一四	一一・一八	一一・二〇
西班牙 (一九六-九年)	二七・三三	二七・三三	〇・一一	〇・一一	〇・四五	〇・四五	〇・二九	〇・二九	〇・六七	〇・六七	〇・〇六	〇・〇六
西班 (一九〇-一〇年)	二七・三三	二七・三三	四・〇三	四・〇三	六・九三	六・九三	一〇・〇七	九・〇七	九・〇七	九・〇七	一一・七六	一一・七六
牙 (一九〇-一〇年)	二五・七四	二五・七四	四・〇〇	四・〇〇	七・三一	七・三一	八・七〇	九・三六	九・三六	九・三六	一〇・六〇	一〇・六〇
差	一・一六	一・一六	〇・九四	〇・九四	〇・三六	〇・三六	一・三七	一・三七	一・三三	一・三三	一・一六	一・一六

埃地 (1899-1902年) 利			伊太 (1900-1903年) 利			獨逸 (1901年)			佛蘭西 (1900-1903年)			英虞蘭威爾斯 (1900-1903年)			瑞西 (1899-1902年)		
差	女	男	差	女	男	差	女	男	差	女	男	差	女	男	差	女	男
11.10	10.41	11.08	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23
3.52	4.33	3.52	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09
3.52	4.33	3.52	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09	4.89	4.68	5.09
11.10	10.41	11.08	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23	7.85	7.47	8.23

白耳義 (1899-1901年)			和蘭 (1898-1900年)			瑞典 (1899-1901年)			丁株 (1900-1903年)			北米合衆國 (1900年)		
差	女	男	差	女	男	差	女	男	差	女	男	差	女	男
11.94	9.14	11.74	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81
0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03
0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03	0.10	0.03
11.94	9.14	11.74	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81	10.31	7.82	11.81

クインスランド (1900-03年)		ニウ、ゼイランド (1900-03年)	
差	女	差	男
11.20	1.76	11.22	1.77
13.02	1.03	10.51	1.20
10.35	2.69	10.51	2.97
10.35	4.80	10.51	3.74
10.35	5.83	10.51	4.74
10.35	8.33	10.51	6.56

是で見ますると伊太利及歐洲露西亞が最も日本に近い型を呈して居るのでありますが、併し其男に對する超過度を比べますと、殆ど雲泥の差がある、到底同日の論ではありませんから、矢張右の現象は日本の死亡統計上の特徴であると言はねばなりません、然らば其特徴は如何なる原因の働きに依りて生じたか、それを詮索することが重要な研究であります。

十、是亦歸する所は結核性疾患

青年壯年の女の死亡率が男の死亡率よりも高いそれに就て從來本邦に於て如何なる説があるか、私は學問的に記載せられたものを多く知りませんが、矢野氏の『日本人の生命に關する研究』には斯ういふことが記してあります、女の死亡率の曲線には二

の波がある、其一は二十三歳を頂點とし、他の一は四十一歳を頂點とする、それを説明して……前の波は男子と同じく春機發動期の影響なるべく、後の波は四十歳以後漸く分娩の危険に遠ざかり、次で月經閉止期となり、兒童の哺育を了り其後は男子よりも却て危険少き平穩なる生活に入るが爲めなるか……それから八歳以上四十二歳の女は男よりも危険多しといふことの説明に……主なる原因は生殖作用にして、生殖期を過ぎたる後は生存競争の爲めに男子の死亡率却て女子に超過するものか……と言ふて居られます、其他斷片的に見聞したる諸家の説も、矢野氏の以上に出てたものを知りません、成程生殖年齢に於ける女は男よりも、餘計な危険があるのでありますから、それだけでも男より健康を傷害せられる程度が強いとは誰にも直ぐ想像し得られる所であります、又此春機發動期頃から女に發する女固有の疾患である所謂婦人科病も男には見ない疾患でありますから、是も女が此年齢に於て男より死亡率の高くなる原因を爲しましやう、けれども男も此年齢に於て女には見ない危険に接觸することが多いので、或る死亡原因に因る死者は遙に女を超過して居るものもありますから、例へば明治

四十三年の事實に依りますと、二〇—二五歳の女の産褥熱及其他の妊娠産に因する死亡者は其年齢の總死亡に對する四・八一%であります。此年齢の男の外因に因する死亡は、其總死亡九・〇一%で、女の同死亡は三・五四%でありますから、男女の%の差が五・四七%男の超過になります。それ故に或る程度まで女の固有の死亡原因の働いて居ることは、諸家の言の如くでありませうが、一面には又それが男に特別に多い死亡原因によりて、相殺されることも考へなければなりません。又單純に生殖年齢の影響であるといふ言の中には、生殖年齢の女は屢々生理的異常……無理な申様ですが……に遭遇する、即ち妊娠する、産をする、それまでに至りませんでも、四週毎に月經がある、是等の場合に於て女は諸般の害因に對する抵抗力が減弱するものと認められる、されば直接に妊娠や産やの爲めに死亡する者の外に、抵抗力の減弱に胚胎して發したる疾病の爲めに不幸の轉歸を取る者も、亦決して少なくないであらうと言ふことも含んで居るのでありますまいか、然らば妊娠や産や月經やは日本人にのみ限りたるものではない、世界を通じて人種の如何に拘はらず、總ての女には共通の事實であり

ます、然るに日本の女にのみ斯の如き特徴があるといふことは何故であるか、それが日本の死亡統計の上の一秘事であり、私はそれを詮索したいと思ひます。

明治三十二年の男女年齢別死亡率比較

各性各年齢人口一萬に付

年齢	加工せざる死亡率		除外したる女の死亡率		結核性疾患を除外したる男の死亡率
	男	女	(a)産に因する疾患を除外す	(a)及(b)婦人生殖器の疾患を除外す	
一〇—一五	三・七四	〇・八一	四・五五	四・五五	〇・〇七
一五—二〇	六・四四	一・四五	七・八九	七・六三	〇・一七
二〇—二五	八・六五	一・二六	九・九一	九・三〇	〇・〇八
二五—三〇	八・二五	一・八九	一〇・一四	九・四一	〇・三三
三〇—三五	八・三七	一・八三	一〇・一〇	九・二八	〇・三五
三五—四〇	九・八四	一・六一	一一・四五	一〇・四八	〇・一五
四〇—四五	二・六二	一一・五七	一〇・九三	一〇・二九	八・九七

明治三十六年の男女年齢別死亡率比較

各性各年齢人口一萬に付

加工せざる死亡率		除外したる女の死亡率	
男	女	(a)産に因する疾患を除外す	(a)及(b)結核性疾患を除外す
一〇一・一五	三・二六	一・三七	四・五三
一五二・二〇	六・四三	二・〇〇	八・四二
二〇一・二五	七・九六	一・八一	九・七九
二五二・三〇	七・三六	二・三二	九・六七
三〇一・三五	七・五二	二・四三	九・九四
三五二・四〇	八・六九	一・八三	一〇・五三
四〇一・四五	一〇・八八	〇・八八	一〇・六六
		一〇・四八	九・九六
		九・六六	八・三三
		九・二二	七・二二
		八・七四	六・三四
		八・七四	五・七一
		八・九六	五・四七
		八・〇四	四・五八
		八・二六	四・五八
		四・五三	二・九四
		四・五三	二・九四
		八・二六	四・五八
		八・〇四	四・五八
		九・二四	五・四七
		九・〇四	五・七一
		九・二二	六・三四
		九・六六	七・二二
		一〇・五三	八・三三
		一〇・六六	九・〇〇

明治四十一年の男女年齢別死亡率比較

各性各年齢人口一萬に付

加工せざる死亡率		除外したる女の死亡率	
男	女	(a)産に因する疾患を除外す	(a)及(b)結核性疾患を除外す
一〇一・一五	三・二六	一・三七	四・五三
一五二・二〇	六・四三	二・〇〇	八・四二
二〇一・二五	七・九六	一・八一	九・七九
二五二・三〇	七・三六	二・三二	九・六七
三〇一・三五	七・五二	二・四三	九・九四
三五二・四〇	八・六九	一・八三	一〇・五三
四〇一・四五	一〇・八八	〇・八八	一〇・六六
		一〇・四八	九・九六
		九・六六	八・三三
		九・二二	七・二二
		八・七四	六・三四
		八・七四	五・七一
		八・九六	五・四七
		八・〇四	四・五八
		八・二六	四・五八
		四・五三	二・九四
		四・五三	二・九四
		八・二六	四・五八
		八・〇四	四・五八
		九・二四	五・四七
		九・〇四	五・七一
		九・二二	六・三四
		九・六六	七・二二
		一〇・五三	八・三三
		一〇・六六	九・〇〇

一五二・二〇	七・〇九	二・五〇	九・五九	九・三五	九・二四	五・二〇	四・六〇
二〇一・二五	八・九六	一・九〇	一〇・八六	一〇・二〇	九・九六	五・八三	五・三六
二五二・三〇	七・九六	二・二五	一〇・二四	九・五四	九・二六	五・八七	五・二四
三〇一・三五	七・五〇	二・三三	一〇・一三	九・二九	八・九四	六・三六	五・四八
三五二・四〇	八・六〇	二・二九	一〇・八九	九・九四	九・五三	七・三七	六・六六
四〇一・四五	一〇・五六	〇・四三	一〇・九六	一〇・三九	九・九六	八・三〇	八・五六

私の詮索は斯ういふことを致しました、之を假に除外比較法と申して置きます、此除外比較には大體二通りの意義があるやうに思ひます、其は比較物を完全に比較し易くする爲めに、邪魔になものを除外することでありまして、例へば不明の診断に因る死亡者を除外し死因別比例を取りて比較することの如きそれでありまして、其二は茲に用ゐましたやうに除外したそれが主な観察物であるのであります、即ち三十二年、三十二年、四十一年の男女の年齢別死亡率を算出しまして、それを比較しますと、何も加工しない死亡率は從來申ましたやうに、四十歳までは女の率が高くて其差は決して尠少でありませぬ、そこで若しも女に妊娠及産がある爲めに、男に超過する死亡率の高度

を持つものであるならば、妊娠及産に因する死亡者を除外して、死亡率を算出して男と比較すれば、兩率が大に接近する筈であります、仍て女から産褥熱死亡及妊娠産に因する疾病及不慮の死亡を除外して死亡率を取り直して見ましたが、御覽の通り何程かは接近しましたが、未だく餘程遠い、それ故に妊娠産といふやうに單純の原因の働きばかりでは無論ない、それから次に女の固有の疾患である婦人生殖器病、それは例へば子宮や卵巢の疾患、乳房の疾患などを更に除外して、死亡率を算出して見た、是も無論關係はありますから、除外したるに依り女の率が男に接近しては來ましたが併し尙ほ大なる間隔がありました、此外に重大なる原因があるといふことを示して居ります、そこで今度は茲に前來屢々申上りましたやうに、他國に於て見られぬ日本に於て特に甚しい所の女に結核性疾患に因る死亡者が多い従て男女の間には結核死者の數に大差がある其大差が影響して居るのでないかと思ひました、それで男からも女からも結核死亡者を除外し、女からは從來の二つの死亡原因をも除外して、死亡率を取りますと、男女の率が大に接近してまゐりました、即ち茲に至りましたして主なる原因を略ぼ推

知することが出來ました、勿論男女の間には、まだ多少の開きがある、其多少の開きは何であるかも問題であります、私は之を或は隠れたる結核がありはせぬか、或は女は心臓の器質的疾患に因る死亡が多いのでありはせぬかなど、も考へて居りますが、兎に角日本人の若い女に結核の著しく多いといふことが、最も大なる原因を爲して斯様に異常の状態が現はれたのであつたといふことが知れました、而して此明治四十一年の事實、それから明治三十六年の事實と、明治三十二年の事實とを見ますと、何れも同様の關係を示しますが、加工せざる死亡率と結核を除外したる死亡率との間隔は四十一年最も大で、三十六年之に次ぎ、三十二年に最も小であります、即ち男女ともに結核の占めたる領域が近きは近きほど廣いといふことが知れます、而して又除外加工を行ひまして、男女の率が相接近して來たことが三十二年最も強く、三十六年之に次ぎ、四十一年が最も弱い、即ち此開きが段々大きくなつて來たといふのは、前申した私の存じませぬ原因の働きの段々強くなるものと考へなければなりません、其原因を私は隠れたる結核でないかと疑を置いて居りますが、或は私などの思ひも附かない原

因があるのかも知りませぬ、今後尙私は各方面から之を詮索することに努めたいと思ふ者であります。

以上申上た所によると、兎に角日本の青年者の死亡率が段々高くなるといふことは歐洲の諸國に於ては見られない事實でありまして、其原因は青年の結核死亡が増加するに歸するといふことも又實に歐洲には無いことでもあります、而して青年者の結核死亡の増加するといふことは、男にも勿論ある事實であるが、殊に女の青年者の結核死亡が非常なる勢を以て増加する、それから影響せられて、女の死亡率が頗る長足の歩武を取りて男の率を超過する、斯様のことは日本の死亡統計上の一特徴でありまして、誠に悲むべき秘事でありました、然らば其青年の女の結核性疾患の増加するのは何故であるか、これは今日存して居ります、私共の數字では解決し能はぬのでありまして、更に新たななる材料を徵集して新たななる研究を爲さなければ、何とも御答致兼ねるのであります、又一面には數字以外に醫學者や衛生學者の手に依るか、或は又其他の社會の研究者の手に依つて始めて何等かの解決を與へらるゝものでありはせぬかと思ひま

す、唯私の浅い智識で考へて居ります所を申上て見ますと、或は日本人の女の營養の取り方が男に比して不足ではありはせぬでしやうか、日本人全體の食物の良否といふことを別問題として、同じ營養を取るものとなりました所で、女の營養の取り方が男よりも不足ではせぬかといふことが直ぐに思ひ浮びます、併し是に付て私は數字の上からは何事も申上げることが出来ないであります、唯左様に思はれる、生殖年齢に於て女が結核の害因に對する抵抗力を減弱するといふことは、世界共通の事態であります、其共通の事態あるか上に日本の女は男に比して營養の取り方が乏しいといふ事態が一つ加はつたとします、さて營養の乏しいものは諸般疾病に對して抵抗力が弱い、就中結核に對して頗る薄弱に爲る、即ち結核に罹り易くなるのであります、其影響が即ち此處に至らしめたのでありはせぬかと思ひます、西洋人の男女間の營養の取り方がどういふやうにして居るか、それは私の全く知りませぬことであります、兎に角日本人は男よりも女の營養の取方が少いことは自家の家庭の所見だけでも何人も然りと首肯せらるゝ所であります、而して其營養の取り方の乏しい日本人の

女は其の美德と稱へられて居る所の大に營養を消耗すべき大負擔を有つて居ります、それは母親自ら嬰兒に乳を興ふるといふことであります、固より此美なる徳を廢してはならぬことでありますが、唯さへ日本人の女の營養の取り方が乏しい然る上に尙此大負擔があるのであります、それは女の當然の負擔として甚だ尊重せられて居ない其尊重せられない爲め特別に女を保護し其の營養をすゝめることに意を用ゐられないことが多いと思ひます、而して女は又男よりも營養の取方が不足であることを自己の美德であるかのやう信じて居るやうであります、私は思ひます、日本の女が曾て封鎖せられたる時代に於ては、それでも宜かつたのでありませうが、今や日本の女も亦社會の人として働かねばならぬ時代になつて居るのであります、社會組織の大變化は何時か女の封鎖は解かれ、女の地位に大なる影響を及ぼして居るのであります、東京市及其他の市勢調査、區勢調査、郡勢調査等に依りて見ますと、女の有業者の數がなか／＼少なからぬことが見られるのであります、縦しや有業者として多く無い地に於ても、副業者として社會的の働を爲してあることは、歴々として明かであります、然

るに其動力の基本であるべき營養の取り方が男より不足であるとしたならば、而して營養を消耗すべき特別の任務をさへ有して居るとしたならば、日本の女は誠に氣の毒の地位にあるものと言はねばなりません、斯く彌が上にも營養の乏しき日本の女は、生殖年齢に於て世界共通的に諸般の害因に對し抵抗力を減弱するとすれば、それが遂に結核蔓延の具となることも、亦以て已むを得ないことでありはせぬか、然らば日本人の衛生上の上に最も注意をしなければならぬことは、女の健康を保護することである、而して女の健康を保護する上に於て殊に注意しなければならぬものは營養の問題でありはせぬか、日本人の美なる習慣は尊重しなければなりません、それと同時に女の營養をすゝめることも忘れてはならぬ必要事であります、併し是は今日に於ては數の上からは何とも申されませぬが、唯考へました所では左様にも思はれるのであります。

尙ほ持て参りました材料も有りますが、餘り長くなりまして、殊に味ひの無い御話を續けますのも恐縮でありますから、大體此位にて止めやうと思ひます、そこで日本

の青年の死亡、それは日本の死亡統計の上に注意しなければならぬ重大の現象でありまして、小兒死亡に注意を拂はねばならぬと同様に、青年の死亡が益々多くなるといふことに對しましては、殊に重大な注意を拂はなければならぬ、其青年の死亡は究極する所、結核性疾患の蔓延が最も主なる原因であるとしたならば、其結核性疾患は如何にして蔓延するか、其状況を究めることも、其原因を探ることも等閑にしてはならぬ、又結核性疾患を如何にしたならば、其蔓延を防止し得るか、前に申たやうに女に多いことも青年に多いことも、文化の程度の低い徴證である、文化の程度の低いといふことは人工の力の加はらないことを意味するとしたならば、如何に之を處置すべきやの策も考へなければなりません、或は高木男爵の言はるゝやうな教育過重といふことも何等かの働を爲して居るかも知れぬが、そのみの影響ではないかも知れませぬが……或は又工場の衛生を重んぜざる結果でないかといふことも、大に考ふべき所でありませう、殊に若い女の結核が工女に多いといふことを顧慮するに於て適切な關係があります、されば多方面の研究を爲して結核の蔓延の事實を詳にし、之を豫防し

之を制遏する策を講じなかつたならば、日本の將來や寔に恐るべきものありと言はなければなりません、殊に乳兒死亡、小兒死亡の率が年を逐ふて高くなるといふことが此青年の死亡率の高くなるといふこと、關聯して、重大なる問題と思はれます、而して日本の生産率は今こそ高くはありますが、懸て減耗の時期が來るらしく思はれる、今日に於ては一層其邊にも注意を拂はねばならぬこと多しと思ひます。

附言 會の當夜は三十有餘枚の圖表を掲げて演述の足らざる所を補ひましたが、今茲には其總てを略しました。(大正四年八月)

本邦婦人の死亡率に就て (丁酉倫理會講演)

過日布川さんが御出になりまして平素私の取扱つて居る數字に就きまして何か御參考になる御話をするやうにといふことでございましたが、何等の學殖も無い一俗吏が諸先生の前に立ちまして御話を申し上げることは甚だ烏滸がましいと存じまして、一應は御断り申上げた次第であります、強いて御求めに依りましてホンの未成品で勿論完成したことはございませぬが、是まで少しばかり調べました其概略を茲に御話申上げて、尙將來の調方に就ての御批判を仰ぎたいと思ひまして罷出た次第でございます、私の御話申上げる題は「本邦の婦人の死亡」と致して置きました、其大體の結構は日本人の死亡率が他の文明國と反對に甚だ低下しない、否寧ろ上昇の傾向があるそれは特に女の死亡率が下らないのに基因する、其女の死亡率の下りませぬ原因が何であるか、それを種々の方面から調べたいと思ひまして僅に今日まで調べました、其概略を申上げるのが今日の御話の全部であります。

第一 人口に於ける男女の權衡及其由來

日本の人口を御覽下さいますと何人にも直ぐ御氣付きになることが一つあるのであります、それは何であるかと言ひますと男の數と女の數とを比べて見ると、日本人の總人口の上に於て女の數が少しく少ない、若し歐羅巴各國の統計を御覽になりますと恰もそれと正反對に女の數が少し多い、此處へ餘り美事でない圖を掲げます。(圖略す)

各國人口の男女比較 (女百に付男)

英 國 (一九一一年)	九三・六七	佛 國 (一九〇一年)	九六・八四
蘇 格蘭 (一九一一年)	九四・一六	獨 逸 (一九一〇年)	九七・四三
丁 抹 (一九一一年)	九四・二七	和 蘭 (一九〇九年)	九七・九七
西 班牙 (一九〇〇年)	九五・三二	芬 蘭 (一九〇〇年)	九八・三四
瑞 典 (一九一〇年)	九五・五七	白 耳 義 (一九一〇年)	九八・三四
歐 洲 露 西 亞 (一八九七年)	九五・九二	匈 牙 利 (一九〇〇年)	九九・〇七
瑞 西 (一九〇〇年)	九六・三六	愛 爾 蘭 (一九一一年)	九九・七二
伊 太 利 (一九一一年)	九六・四四	日 本 (大正二年)	一〇二・一四
奧 地 利 (一九一〇年)	九六・五二	ブ リ ガ リ ア (一九〇〇年)	一〇四・〇八

北米合衆國(一九一〇年)

一〇六・〇三

濠洲聯邦(一九一一年)

一〇七・九九

歐羅巴各國中でも英吉利は殊に女の數が多くございまして、女の數百に付男の數が九三・六七にしか當つて居りませぬ、其外段々歐羅巴の各國に於ては多少宛の差はございしますが、殆ど總て女の數が多くして男の數が少ない、唯バルカン半島のブルガリアが男の數が少しく高うございまして女の百に、男が一〇四・〇八ございまして、北米合衆國は男の數が多くございまして女百に付て男一〇六・〇三であります、それから濠洲聯邦を見ますると女百に付て男一〇七・九九に當つて居ります、濠洲聯邦の如き或はブルガリアの如き北米合衆國の如き植民地であるか若くは植民地的傾向を有する邦國に於ては、女より男の數が多いといふことは殆ど定つた問題であるやうに見えます、然るに日本はどうであるかと申しますと、女百人に付て男が一〇二・一四に當つて居ります、其百二人餘といふことも明治七年の調から時代に依つて差異がありまして、嘗ては段々男の數が幾分か少なくなりましたが又近頃になつてから男の數が少し多くなりまして百二人餘に當つて居るのであります、そこで歐羅巴の女が多いと云ふ

ことに付て統計家が何と言ふて居るかと申しますと、男よりも女が過剰である、其理由は出生死亡の關係であると申して居るのであります、是は詳しく申し上げるまでもないことと思ひますが、最初小兒の生れますときには男の數が少しく多く生れる、デ女が少しく少ないのであります、然るに歐羅巴に於ける小兒死亡は豫てより有名なものでありまして殊に獨逸奧太利等に於ては非常なる小兒死亡があつたのであります、而して一歳未満の乳兒並に五歳以下の小兒の死亡致します場合には男女何れが多く死亡するかと申しますると男が多く死亡する、稍長じて五歳から十歳位の女の多く死亡することもあるが更に再び男の死亡が多くなります。

斯様な次第で男の死亡が多い爲めに残る女の數が過剰になつて來るといふことを申して居ります、それと同時にもう一つ認めねばなりませんことは他國に人が移出する、それは男女共に出ては參りますが、何れかと申しますると男の方が多く他國へ移出して行く、それで女の殘留する者が多いのであります、其證據には唯今申上げました植民地的傾向を有する米國に於て又植民地たる濠洲に於て何時でも男の數が過剰になつ

て居りますのは、他國から人口を轉入します其場合に、男女共に轉入しますが、殊に男を多く轉入しますために男が過剰になるのであります、而して日本はどうであるかと申しますると、日本の人口は他國の人口と少しく同一に見られないことがあるのであります、申上げるまでもなく日本に於ては未だ所謂國勢調査が行はれて居りませぬ、それ故帳簿の上で調べるのでございますからして、所謂日本の本籍人口と申しまするものは日本帝國に國籍を有する者の數を云ふのでございまして、他國の如く現在して居る人口が幾許あるかと云ふことが明確に知られて居りませぬ、されば日本の本籍人口と申するものは海外へ參つて居ります者、即ち外國へ行つて居ります者竝に日本の植民地へ移住して居ります者も悉く包含したるところの人口であります、其本籍人口でありますからして男女の數に異動があると致しますればそれは全然出生死亡の關係であるといふことを言はねばならぬのでありまして、他國へ移出したる者或は他國から轉入して來たといふ者は全く其數の上に現はれて居らぬのであります、然らば外國に於ては小兒の生れるときには男が多く生れて、さうして小兒の死亡する

場合並に青年壯年に於ても男が多く死亡して女が多く残るのであると云ふが、日本に於てはそれと異なるであらうかと云ふ疑が必ず起るのであります、日本に於ても小兒の生れますときには男が多く生れました女が幾分か少ないことは外國と同じとであります、而して小兒死亡一歳未満の乳兒死亡の場合にも五歳以下の小兒死亡の場合にも矢張り男が多く死にまして女の兒の方が死亡數が少ない、所がそれから段々長じまして十歳以上十五歳から二十歳三十歳四十歳の青年壯年になりますと云ふと何れも女の死亡が多くて男の死亡が少なくなつて來ます、尤も男の死亡數も外國のそれ譲らない程澤山に死亡するのであります、女の死亡數は外國に例のない位澤山に過に男を超過して死亡するのであります、其結果として全體の人口の男の數が多くなりました、女の數が幾分か少なくなる、即ち歐羅巴に女の多いことも出生死亡が重大の原因である、日本に於て男の多いことも矢張り出生死亡に基くのであります、而して此男女の差は全く外國へ出て居る者或は植民地へ參つて居ります者が無關係であると申されませぬことは、日本の今日行つて居ります人口調、それは現在者を知るに

は不完全なものでございますが、植民地へ参つて居ります者、それから外國へ参つて居ります者の知れて居るだけを取除きまして、残留して居る人口で見ますると矢張男が女に超過して居ることは同様でありますが、其超過の度合は餘り多くありませぬので女百人に付て男一〇・一・五四に當ります、是で移轉の關係も亦働きあることが知れるやうに思はれます、即ち日本に於ては女の死亡が多い爲めに總人口の男が超過するに至つた、私の今日申し上げやうと思ひます『日本の婦人の死亡』といふ問題は唯今申上げました此人口の男と女の數の相違のあることそれが先づ第一の出發點になつて居るのであります。

第二 出生率及死亡率の趨勢附日本に於ける

男女死亡率の差違

次に分り切つたことではございますけれども御話の順序として少しく申上げて置かねばならないことがあるのであります、それは歐羅巴に於ける出生率の減少、出生率が段々低くなつて來るといふことの問題でありまして、此問題は私が今事新しく申上

げるまでもなく重大な人口問題として歐羅巴人に考へられて居ることであるのであります、其出生率が段々減少すると云ふこと、同時に歐羅巴に於ては死亡率も亦非常な減少をして居るのであります。

歐洲四國每五年平均出生率及死亡率 (人口千に付)

年	出生率				死亡率			
	英吉利	佛蘭西	獨逸	埃地利	英吉利	佛蘭西	獨逸	埃地利
一八四一—四五年	三三・三	二六・一	三六・七	三九・六	二・四	三・七	二六・一	三〇・〇
一八四六—五〇年	三三・九	二六・七	三五・六	三七・一	三・三	三・九	二七・五	三六・五
一八五一—五五年	三三・九	二六・一	三四・五	三六・五	三・七	三・一	二七・一	三四・二
一八五六—六〇年	三四・四	二六・六	三四・〇	三六・七	二・八	三・八	二五・六	二八・七
一八六一—六五年	三五・一	二六・七	三六・八	三六・九	三・六	三・九	二五・九	三〇・〇
一八六六—七〇年	三五・三	二五・九	三七・五	三六・五	三・四	三・四	二七・七	三三・五
一八七一—七五年	三五・五	二五・五	三八・九	三九・三	三・〇	三・〇	二八・二	三三・六
一八七六—八〇年	三五・四	二五・三	三九・二	三八・七	三・〇	三・四	二六・一	三〇・五
一八八一—八五年	三五・五	二四・七	三七・〇	三八・一	二・九	三・二	二五・七	三〇・二

一八八六—一九〇〇年	三・四	三・一	三・五	三・六	一八・九	三・〇	三・四	三・八
一八九一—一九〇〇年	三・五	三・四	三・三	三・三	一八・七	三・三	三・三	三・八
一八九六—一九〇〇年	三・二	三・〇	三・〇	三・〇	一七・七	三・〇	三・三	三・四
一九〇一—一九〇五年	三・二	三・三	三・三	三・六	一六・一	三・六	三・三	三・四
一九〇六—一九〇年	三・三	三・九	三・六	三・七	一四・七	三・五	三・五	三・四
一九一一年	三・四	一八・七	三・六	三・二	一四・六	三・六	三・三	三・九
一九一二年	三・八	一九・〇	三・三	三・三	一七・五	三・五	三・三	三・九
一九一三年	三・九	一九・〇	三・三	三・三	一七・五	三・五	三・五	三・五

茲には佛蘭西、英吉利、獨逸、奥太利の四國を擧げて見ました、それは千八百四十年から近い數まで見たのであります、出生率の方で申ますと佛蘭西が出生率の減耗して居ることは實に千八百四十一年頃から右の様に低かつたのであります、其低い上にも尙又更に減耗して參りまして、最近に於ては僅に二十%以下に下つて居ります、英吉利は千八百七十六年頃まではまだ出生率は非常に減耗した方ではなかつたのであります、それから以後急速に減耗致しまして右の様に二四%まで下つて來ました、獨逸は普佛戦争の當時を最頂點に致します、普佛戦争から五六年經過しました時まで

は出生率が段々高くなつたのであります、矢張り之も減耗致しまして今日は二八%に下つて居ります、奥太利に於ても同じやうに下つて來ました、然るに歐洲諸國に於ては出生率の減耗と同時に死亡率も亦非常な減少仕方をして居ります、就中英吉利に於ける或は獨逸に於ける死亡率の如きは非常なる低下でありまして英吉利は既に一三%に下つて居るのであります、獨逸に於ても同じやうな有様で、一五%といふ低率を示して居ります、而して死亡率も亦矢張り普佛戦争以後非常な下り方を致しまして斯んなに低下して居ります、然るに佛蘭西のみは餘り死亡率が下つて居らぬ、尤も最近に多少は低下しましたが其歩武甚だ遅々たるものであります、是は一寸興味のあることで死亡の研究上注意を要する所であります。

歐羅巴に於けるところの出生率と死亡率との趨勢が斯様にありますのに、日本はこれに對してどういふ趨勢であるかと申しますと、左の如くであります。

日本每五年平均出生率及死亡率

出生率	死亡率	出生率	死亡率
-----	-----	-----	-----

明治五—八年(一八七二—一八七五)	三・八	二七・八	同二九—三三年(一八九六—一九〇〇)	三・二	二〇・七
同九—一三年(一八七六—一八八〇)	二五・〇	一七・八	同三四—三八年(一九〇一—一九〇五)	三・九	二〇・九
同十四—一八年(一八八一—一八八五)	二六・一	一九・三	同三九—四三年(一九〇六—一九一〇)	三・八	二〇・〇
同一九—二三年(一八八六—一八九〇)	二六・五	二〇・七	同四四—四八年(一九一一—一九一五)	三・〇	二〇・三
同二四—二八年(一八九一—一九九五)	二六・六	二〇・二	同四五—四九年(一九一二—一九一六)	三・三	一九・九
備考 明治五—八年は四箇年の平均なり					

日本の出生率は斯様に高くなりつつある——即ち出生率が高くなりつつあると同時に死亡率も亦一向下りませぬ、否寧ろ上昇の傾向を有つて居ります、尤も一九——二三年及二四——二八年の平均に於て高くなつたことがありますから是等の平均から申ますると今でも餘り高くない、寧ろ下つたこともあるやうであります、明治十九年から二十三年、二十四年から二十八年は死亡率の上に變動的原の働いた年でありまして即ち十九年には虎列刺が非常に流行致しました、又二十五年二十六年二十七年には痘瘡及赤痢が盛に流行致しまして、一箇年に赤痢患者を出すことに十五六萬人乃

至は十七八萬人などといふ時代であります、されば此非常時を包含したる年の平均死亡率の高きは勿論のことでありますが、而も其非常時を包含したる事と比しましても尙且つ今日の死亡率は決して低くないのであります、さて歐洲に現じたる出生率の減耗の原因は今更めて申上げることがは贅事かとも思ひますが、要するに文化の進むに従つて必然に現はれて來るところの現象だといふやうに申て居ります、何故に然る必然の現象が來るか詮索は東西學者の努力する所で、議論甚だ多岐に涉り頗る興味ある問題であります、今は其總てを略します、兎に角必然の現象である、夫故に是に對しては何等か防遏の策を廻らさなければ必ず低下して行くことを免れぬ、今此形勢で見ますると日本の出生率は歐羅巴のそれと反對に益々高くなつて行くやうに見えるのでありますけれども、日本と歐羅巴諸強との文化の程度がどれ程の違ひがあるか、惟ふに文化の程度は國民經濟組織の推移を促し國民經濟組織の状態は反映と爲りて人口動態の現象と爲りて現はれます、本邦の經濟學者が能く言はれるやうに假りに半世紀の文明が後れて居るものと致しまして、さうして此兩者を比較して見ますると面白

い事態が見ゆるのであります、それはどうであるかと申ますると丁度英吉利と日本とを四十五年——假りに四十五年日本を後へ持つて行きましてさうして英吉利の人口動態と日本のそれとを比べて見ますると、婚姻率と出生率との如き殆ど英吉利が嘗て取つたと同じ経路を日本は今現に取りつゝあると云つても宜いやうな形であるのであります、夫故に若し文化の進むに従つて變遷し行く國民經濟の狀態が、人口動態の現象となりて現はるゝものとしたならば、日本の今後の趨勢は矢張り英吉利や獨逸やの進んで來たと同様に文化の程度も進みもし、從て國民經濟の狀態は刻々に變遷し又從て好もしからざる社會的の弊害も同様に發現して、それが人口動態の上に明示せらるゝに至ると思はれます、されば日本の今日の出生率の狀態は最も盛なる時であります、が、聽ては英吉利と同一の経路を取りて低下する時期が來るのではないかと云ふやうに疑はれる——否信せられるのであります、それは未來のことでもありますからして、餘程慎重なる調査を致しませぬければ漫りに斷言することは出来ませぬが、大體に遠からず餘程危険な狀態が來るのでないかと思はれます、併し出生率に關しましては當

面の問題外でありますから多くは申ませぬ。

然らば死亡率は如何、是は出生率とは趣を異にして居ります、若しも何等人爲の力が加はらず之を防止するとか或は之を制遏するとか云ふことがありませなかつたならば、死亡率は出生率と全然反對に漸を追ふて高くなるのが原則であるらうございませ、然るに死亡率が漸々低下して來る歐洲に於て、死亡率が下つて來るといふことの裏面には其死亡率を低下すべく、或は國家の働を以て若くは社會の力を以て將た個人の周到なる注意によりて衛生の事が追々進んで參りますとか、又は社會的事業が能く完行せられて參りますとか云ふことが必ずありたることを思はなければなりません、而して其事あるに依りて死亡率が漸々低下したものであります、それは英吉利に於ける竝に獨逸に於ける既往の事實に鑑みますと多く言はずして知れるやうに思ひます、夫故に歐羅巴の諸國が斯様に死亡率が低下したことは無爲にして低下したのではなくして、低下すべく種々なる國家的社會的個人的の働きありてさうして低下したものであるのではあります、佛蘭西の出生率が非常に低下するのにも拘はらず死亡率

の低下が餘り著しくないことは、佛蘭西に於ける此死亡率を低下せしむべき働が獨逸や英吉利等に於ける働よりも餘程鈍いと云ふことを申て差支ないやうであります、それ等から考へますと日本の現在に死亡率が上つて行くといふことに就きましては、出生率が上つて行くことの喜びよりも死亡率が寧ろ上昇する傾向があるといふことは餘程恐れねばならない、餘程考へねばならない状態であるといふことを信ずるのであります、殊に日本の死亡率を見ますると云ふと、近い明治十九年の以降の死亡率を男女に別けて觀察しますと斯ういふやうになつて來て居るのであります。

累年各性死亡率 (各性人口千に付)

年	明治十九年			明治二十年			明治二十一年			明治二十二年			明治二十三年		
	男	女	總數	男	女	總數	男	女	總數	男	女	總數	男	女	總數
同 二十九	二〇・七	二〇・九	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八
同 三十	二〇・七	二〇・九	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八
同 三十一	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八
同 三十二	二〇・三	二〇・七	二〇・五	二〇・三	二〇・七	二〇・五	二〇・三	二〇・七	二〇・五	二〇・三	二〇・七	二〇・五	二〇・三	二〇・七	二〇・五
同 三十三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三
同 三十四	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三
同 三十五	二〇・九	二〇・七	二〇・八	二〇・九	二〇・七	二〇・八	二〇・九	二〇・七	二〇・八	二〇・九	二〇・七	二〇・八	二〇・九	二〇・七	二〇・八
同 三十六	二〇・七	一九・九	一九・九	二〇・七	一九・九	一九・九	二〇・七	一九・九	一九・九	二〇・七	一九・九	一九・九	二〇・七	一九・九	一九・九
同 三十七	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三	二〇・四	二〇・三	二〇・三
同 三十八	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三	二〇・三	二〇・五	二〇・三
同 三十九	一九・七	一九・八	一九・八	一九・七	一九・八	一九・八	一九・七	一九・八	一九・八	一九・七	一九・八	一九・八	一九・七	一九・八	一九・八
同 四十	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八	二〇・八	二〇・七	二〇・八
同 四十一	二〇・八	二〇・九	二〇・九	二〇・八	二〇・九	二〇・九	二〇・八	二〇・九	二〇・九	二〇・八	二〇・九	二〇・九	二〇・八	二〇・九	二〇・九
同 四十二	二〇・九	二〇・八	二〇・八	二〇・九	二〇・八	二〇・八	二〇・九	二〇・八	二〇・八	二〇・九	二〇・八	二〇・八	二〇・九	二〇・八	二〇・八
同 四十三	二〇・七	二〇・八	二〇・七	二〇・七	二〇・八	二〇・七	二〇・七	二〇・八	二〇・七	二〇・七	二〇・八	二〇・七	二〇・七	二〇・八	二〇・七
同 四十四	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三	二〇・三
同 四十五	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八
大正元年	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八	一九・九	一九・八	一九・八

備考 表中明治三十一年までは本籍者の調にして同三十二年以降は現住者の調なり。

此明治十九年から各一年毎の死亡率を見ますと斯様になつて居ります、明治十九年に頗る高いのは虎列刺大流行の影響、二十五年は天然痘が流行し又此頃には頻年赤痢が流行致しました其影響であります、此高低起伏に就きましても種々考へて見ねばならない事情が多くあるのであります、就中男の死亡率と女の死亡率とを御覽下さいますと著しい妙な關係が此處に見える、即ち明治三十二、三年までを御覽下さいませ

すと女の死亡率が如何に低かつたかと云ふことが分ります、所が此頃から漸々女の死亡率が男の死亡率に接近して参りました、明治三十六年と三十七年との間に於て男女の死亡率が顛倒致しまして女に死亡率が高くなりました、尤も、是から以後になりまして多少女の死亡率が下つたこともありますが、大體に女の死亡率が高くなつて來ました、最近の四十五年大正元年の死亡率で見ますと女の死亡率が少しく下つて参りますが、併し三十七年以後は概して女の死亡率と等位に在ると言ふてよいと思ひます、世界の諸國と申しますと餘り廣いことを申上げるやうであります、歐羅巴の諸國で統計の知れて居る所を見まして男女の死亡率を比較して見て男の死亡率が女よりも低い、女の方の死亡率が高い邦國が何處にあるかと申しますと、僅に二三國に過ぎませぬ、それは何處であるかと申しますとバルカン半島のブルガリアが女の死亡率が高い、それから愛爾蘭が女の死亡率が高い、それから伊太利が御承知の通り僅であります、女の方の死亡率が高くして男の死亡率は女よりも低い、それから匈牙利は男女の死亡率は殆ど等位であります、矢張男が僅に高い、其他の邦國即ち以上を除くの外

の各國南アメリカに於ても濠洲に於ても總てが歐洲と同様に於て日本の如き斯様の状態を現はす所は殆ど無い、何故に日本の死亡率中女の死亡率が殊に男に勝つて高いか、其原因を探つて見ると云ふことが今日の最も重要な問題でありはせぬかと思ひます。

然らば現在に於て日本人の死亡率は世界の諸國に比してどんな状態であるかと云ふことを知る必要があります、殊に之を年齢別と爲して日本人全體の死亡率の中どの年齢者の死亡率が特に高いのであるかと云ふことを知る必要があります、唯今は性に依りて觀察すれば今女の死亡率が高いといふことを申上げましたが、若し之を年齢別と爲して見たならば、どの年齢者の死亡率が高いのであるかと云ふことを知る必要があります。

第三 年齢別死亡率各國比較

即ち各國各年齢人口の千に對する死亡率を擧げ、之を見易く致しますために各年齢者の日本の率百に對する各國の率の指數を求めて之をも掲げました、そこで總死亡率

で申しますると日本の率を百と致しますると英吉利の率が約六十四に當ります、それから佛蘭西は幾らであるかと申しますると約九十三に當り獨逸は約八十一に當ります、さうすると現在の死亡率は日本に對して英吉利が六割餘佛蘭西は九割餘獨逸は八割に當つて居る譯でありまして、日本の死亡率は大體に於て低くない、歐羅巴の三大國に對して日本の死亡率が確に高い、それは總數に於て高いばかりでなく之を各年齢に就いて見て參りますと尙更一層驚くべき事が此處に見えます、五歳宛の階級と爲したるものを見て參りますと、零歳より五歳までの幼者を見ますと日本の百に對する英吉利は約五十三に當ります、佛蘭西の零歳から五歳までの幼者の數を有ちませぬが、獨逸は千九百十年と十一年との平均ありまして、千九百十一年は歐洲諸國の夏季の氣温が異常に高く、爲めに一般に小兒死亡が非常に多かつた、其年でありますから日本の百に對する八十八に當ります、而してそれを更に細別しまして一歳未満の者、一歳から二歳まで、二歳より三歳まで、三歳より五歳までと云ふ算へ方にして見ますと、異常の年の事實なるが爲めに獨逸の零歳より一歳までの者が日本の百に對して百

各國年齢別死亡率比較

年齢	死亡率(各年齢人口千に付死亡)				上記日本の率の百に對する各國の率の指數			
	日本	英吉利	佛蘭西	獨逸	英吉利	佛蘭西	獨逸	
總死亡率	二〇・八〇	一三・三〇	一九・七〇	一六・七〇	六三・九四	九二・六二	八〇・四八	
〇—五歳	六・三五	三・四四	—	—	五三・八八	—	八八・三七	
再掲	〇—一	—	一〇八・四〇	—	—	—	—	
一—二	四三・七三	三〇・六六	—	—	—	—	—	
二—三	一九・八五	八・九八	—	—	—	—	—	
三—四	二六・五五	—	—	—	—	—	—	
四—五	—	—	—	—	—	—	—	
五—一〇	五・六四	三・〇六	三・八四	三・二七	五四・二六	六六・〇九	五七・九八	
一〇—一五	四・二六	一・九〇	二・六三	二・二〇	四四・六〇	六二・七四	五一・六四	
一五—二〇	八・三五	二・七五	四・四五	二・六七	三三・三三	五三・八五	三三・三六	
二〇—二五	九・九〇	三・三八	六・五六	四・五三	三三・一三	六六・二六	四四・六五	
二五—三〇	九・〇六	三・八五	六・九三	四・九八	四二・四九	六六・二六	四四・六五	
三〇—三五	八・八一	四・七六	七・九七	五・五九	五四・〇三	七六・四九	五三・九七	
三五—四〇	九・八八	六・三五	八・七六	六・八〇	六四・二七	八八・六六	六八・八三	

死	亡	率
四〇―四五	一〇・五〇	八・一〇
四五―五〇	一三・四九	一一・〇三
五〇―五五	一七・一九	一五・〇七
五五―六〇	二四・〇六	二二・六九
六〇―六五	三三・六七	三三・六五
六五―七〇	五〇・四八	四五・〇六
七〇―七五	八〇・五六	七四・五七
七五―八〇	一二五・五五	一〇〇・五〇
八〇以上	一五九・八一	一六・四三
		二四九・七三
		二五・九六
		一〇一・〇一
		一五・三六
		一三五・四

十五であるが高いいだけで、佛蘭西の此年齢者は日本の百に對して六十二といふ低さであります、それから他の年齢に於ては七十歳より七十五歳といふ階級を見ますと佛蘭西は日本の百に對する百一で少し高い、七十五歳より八十歳までは佛蘭西は百九獨逸が百六で茲に二國高い、八十歳以上になりますと英吉利も百一で少しく高く佛蘭西や獨逸は更にズット高くなりまして、日本の死亡率は茲に初めて低く見られますが、其他の年齢者に於ては日本の死亡率が總て高い、就中十五歳より二十歳、二十歳より

二十五歳といふ少壯なる者を見ますると非常に日本の死亡率の高いことが分ります、十五歳より二十歳の者を見ますと日本の百に對する英吉利は三十三、獨逸は三十二、佛蘭西は五十四に當る、二十歳より二十五歳を見ますと英吉利は三十三、獨逸は四十五、佛蘭西が六十六といふやうに少しく高くなりましたが、大體に於て日本とは非常な差がある、二十五歳より三十歳に至りましても英獨の二國は日本の約半分内外であります、十五歳より三十歳或は三十五歳といふやうな年齢者は人間としても最も重要な年齢であると云ふて宜いのであります、働きの年齢所謂生産年齢でございますからして、經濟の中心となつて居るべき人口であると言はねばなりません、殊に男に於きましては此年齢者は國防の任務を負ふべき年齢である、女に致しますると此年齢者は後繼者を生産すべき年齢であるといふことを深く考へねばならぬのであります、其重要な人口が英吉利に比しまして三倍、獨逸に比しましても三倍、佛蘭西に比して二倍、我日本人が斯く多數に死亡しましたならば、是れ決して油斷のならぬ重要な問題でありはせぬかと思ひます、尤も七十歳以上の高年者になりますと日本人は少し

く死亡率が低いやうであります。此死亡率の低いことも餘程疑はしいのであります。日本の中高年齢者には大分虚数がある、何故かと申しますと民法が實施されて以來全く居らない人間といふことが知れて居る者であつても、利害關係人からの請求がない以上は失踪の宣告を爲すことが出来ませぬで、何時までも戸籍に殘留して居るのであります。戸籍に殘留して居る間は現今の如き簿冊に依る人口調査ではそれを人口として數へるのが當然であります。されば昨年の御大典に際し特に天盃を賜はるといふ場合に調べて見ますと、大分無い人間が澤山に帳簿の上にあつたことが知れたと聞いて居ります。故に此七十歳以上の高齢者の死亡率は全く無い人間を基礎として出しました死亡率でありますからして、此年齢者に於ける死亡率の低いといふことは少しも當てにならぬ、縦しやそれか當になるとしましたところが、大切な經濟の中心たる人口が他國よりも二倍三倍の死亡があつて、老年の七十歳以上八十歳以上の者が幾分か死亡率が低いと致しましても是は決して發展する國民の狀態だとは言はれないと思ひます。尤も百二十歳まで生きるとか百二十五歳まで生きるとかいふ人があ

りますけれども、それは全く稀有の事實であつて、其長壽を總てに及ぼすことは出来ないと、されば高齢者の死亡率の低いといふことも勿論喜ばしいことでありませうけれども、大切な労働年齢にある少壯者が盛んに死亡する、又後繼者たる幼者が多數に死亡するとしましたならば老者の死亡率の少し位低いことの喜びは打消されて尙ほ大なる憂慮が残る、即ち是れ決して等閑に附することの出来ない大問題であらうと思ひます。次に御覽を願ひますのは各國の各性年齢別死亡率を高さものより順位をつくりて駢列したのであります。

此各國の材料は餘り新らしくありません。獨、佛の率とは直に比較することが出来ません、併し各國を統一して大勢を見るに便でありますから茲に用ゆることにしました、即ち此總數に就て見ますと露西亞、西班牙、匈牙利、奧太利ブルガリアの國を除きますと日本が第六の高位に居ります、而して之を男女に別けて男の方を見ましても日本は矢張り第六位に居ります、但し男はブルガリアが日本以下となりて獨逸が日本以上になります、又女を見ましても矢張り日本は第六位でありまして其順

位は總數と同一であります、それを年齢別の死亡率と爲しまして見て行きますと、其零歳より五歳までの幼少の階級に於ては日本よりも小兒の死亡の多い所が澤山ありまして、日本は餘程下の方に居ります、即ち總數に於ては第九位又男でも第九位女では第八位で、日本の死亡率が此年齢に於ては餘程低い、それから五歳より十歳といふ年齢者では僅に上りまして總數と女が第八位で男は第九位矢張り前階級と同じやうに日本人はまだ〳〵他國に比しまして死亡率が幾らか低い方の位置に居ります、それがもう一階級進みまして十歳より十五歳といふ年齢になりまると、日本人の死亡率が幼少なるもので見たよりも餘程高く進んで参りました、男は第八位でありますが總數では第六位となり女は第五位になりました、日本より高い所は露西亞、芬蘭、匈牙利、ブルガリアといふ順に高い四國があるばかりであります、それがもう一步進みまして十五歳より二十歳の階級を見ますと總數に於きまして又男に於ても女に於ても日本は此處に擧げました二十六箇邦中の一番首位に居ります、而も總數に於て日本の次位である西班牙ブルガリアを見ますと日本と隔つて居ること餘程低い日本の百に對し

八六餘にしか當りません、而して男の次位である西班牙は九九に近いので懸隔が大でありますぬが女の次位である匈牙利は七七弱で其懸隔が大であります、それ故に同じ第一位の中でも女に於ては殊に傑出したる第一位で如何に本邦が此年齢の女の死亡率の高い國だかと云ふことが是で知られます、もう一階級進みまして二十歳より二十五歳になりますと總數の上に於ては日本の上に立つものはブルガリアだけがあるのであります、其外前には西班牙、匈牙利が日本より高かつたのであります、此年齢になりますと日本より遙に低くなつて居ります、併し男では日本より高い國にブルガリアの外もう一つ西班牙がありまして日本は第三位であります、女の方はブルガリアの一〇一・五に對する一〇〇で日本に次く匈牙利は八一餘に過ぎぬほどに隔りのあるのでありますから日本の此年齢の女の死亡率が如何に高いかと云ふことが知れるだらうと思ひます、二十五歳より三十五歳の階級になりますと日本は總數は是だけの邦國中で第三位、併し男の方は此年齢になると餘程低くなつて第十位に在るのであります、女の方は一向低くなりませぬで、矢張りブルガリアに次ぐ第二位に居ります、それ

がもう一階級年齢が進みまして三十五歳より四十五歳階級になりますと最早日本人の死亡率が餘り高くなりまして總數は第十一位男は第十五位先づ中等どころまで下つて行きました、併し此時期に女は尙ほ餘程高くございまして、ブルガリヤ、匈牙利、露西亞に次ぐ第三位に居ります、四十五歳より五十五歳の階級で見ますと總數は第十位男は第十二位で、最早女も餘程下つて居ります、さう致しますると日本人の死亡率が他國に比して高く、さうして就中女の死亡率が高いと云ふことが知られるのであります、其女の死亡率の高いと云ふことも十五歳から三十五歳乃至四十五歳の青年壯年の死亡率が特に著しく高いと云ふことが知られます、夫故に日本の死亡率の問題は十五歳から三十五歳乃至四十五歳といふ年齢者の殊に女に就て注意して見なければならぬものであるといふことを言ひ得て差支ないと思ひます。

各性各年齢死亡率の各國順位比較

其一總數

順位	總數	五〇—五五	五五—六〇	六〇—六五	六五—七〇	七〇—七五	七五—八〇
一	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
二	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
三	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
四	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
五	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
六	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
七	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
八	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
九	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一〇	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一一	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一二	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一三	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一四	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一五	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一六	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一七	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃
一八	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	埃

二	西	班	牙	西	葡	芬	西	日	西	葡	露	蘇	匈	佛
三	匈	牙	利	匈	匈	匈	匈	匈	匈	匈	匈	匈	匈	匈
四	埃	地	利	埃	芬	露	匈	露	露	露	露	露	露	露
五	ブル	ガ	リ	ブル	西	露	露	露	露	露	露	露	露	露
六	日	本		伊	埃	日	芬	佛	匈	英	瑞	伊	埃	
七	伊	太	利	獨	伊	米	埃	露	蘇	西	英	瑞	伊	
八	獨	逸		芬	日	埃	米	埃	愛	瑞	米	蘇	獨	
九	芬	蘭		日	米	典	芬	佛	西	露	愛	英	白	
一〇	北	米	合	白	佛	伊	佛	愛	ク	日	日	佛	西	
一一	蘇	格	蘭	英	蘇	愛	典	伊	蘇	日	愛	西	露	
一二	愛	爾	蘭	米	獨	佛	伊	西	芬	ク	ブル	獨	日	
一三	佛	蘭	西	蘭	愛	蘇	蘇	典	西	露	英	佛	白	
一四	英	蘭	威	蘇	英	丁	瑞	ク	伊	瑞	獨	白	米	
一五	瑞	義	西	西	典	獨	南	露	蘇	典	獨	ク	ク	
一六	白	耳	義	佛	典	瑞	ク	ク	瑞	芬	白	ク	ク	
一七	西	洲		瑞	瑞	蘭	白	獨	瑞	芬	白	ク	ク	
一八	和	蘭		丁	英	丁	獨	白	白	ビ	ク	ク	ク	

一九	瑞	典	典	蘭	白	獨	蘭	ビク	英	サウ	白	芬	芬	サウ	日
二〇	丁	抹	愛	ビク	西	濠	蘭	丁	英	サウ	典	伊	蘭	ビク	ビク
二一	ラ	ク	サウ	南	濠	ビク	西	濠	ビク	蘭	典	丁	ブル	タス	ゼイ
二二	ウ	キ	ピク	西	濠	タス	英	タス	サウ	蘭	典	丁	ブル	タス	ゼイ
二三	ピ	ク	ク	ゼイ	ク	キ	タス	英	丁	南	濠	タス	典	ゼイ	南
二四	南	濠	南	濠	サウ	サウ	ビク	サウ	南	濠	タス	典	タス	ゼイ	南
二五	タ	ス	タ	ス	ク	キ	ゼイ	サウ	南	濠	ゼイ	南	濠	ゼイ	南
二六	ラ	ニ	ウ	ゼ	ド	イ	ゼ	イ	タ	ス	ゼ	イ	タ	ス	ゼ

各性各年齢死亡率の各國順位比較 其二男

順位	總	數	五〇	一五〇	二五〇	三五〇	四〇〇	四五〇	五〇〇	五五〇	六〇〇	六五〇	七〇〇	七五〇
一	露	西	亞	露	露	ブル	日	ブル	西	米	蘇	西	佛	西
二	西	班	牙	西	ブル	露	西	米	西	瑞	西	佛	佛	佛
三	匈	牙	利	匈	芬	芬	ブル	日	愛	蘇	埃	英	蘇	伊
四	埃	地	利	埃	匈	匈	ク	キ	佛	英	埃	瑞	埃	埃
五	獨	逸	ブル	西	露	匈	ブル	露	露	瑞	匈	西	獨	西

六	日	本	獨	埃	埃	芬	佛	佛	埃	埃	米	匈	英	愛
七	ブル	ガ	リ	伊	伊	瑞	米	米	露	英	西	日	佛	匈
八	伊	太	利	芬	典	日	ク	キ	埃	匈	ク	キ	獨	日
九	芬	蘭	獨	日	米	佛	埃	匈	ク	キ	獨	露	獨	獨
一〇	北	合	衆	白	米	伊	典	露	日	匈	獨	西	白	瑞
一一	佛	蘭	西	英	佛	埃	西	濠	蘇	愛	佛	米	露	蘇
一二	蘇	格	蘭	米	獨	愛	愛	西	濠	ブル	日	佛	伊	英
一三	英	蘭	威	爾	蘭	蘇	伊	典	芬	瑞	ク	キ	白	西
一四	白	耳	義	西	濠	英	獨	蘇	伊	典	獨	白	ビク	芬
一五	西	洲	蘇	白	丁	獨	蘇	伊	典	獨	白	ビク	愛	米
一六	瑞	洲	佛	蘇	白	丁	獨	蘇	伊	典	獨	白	ビク	愛
一七	愛	爾	瑞	佛	蘇	白	丁	獨	蘇	伊	典	獨	白	愛
一八	和	蘭	丁	瑞	愛	瑞	蘭	芬	日	ブル	白	ビク	愛	サウ
一九	ス	ラ	キ	典	南	蘭	西	濠	獨	白	ビク	サウ	サウ	ピク
二〇	瑞	典	愛	南	蘭	白	丁	獨	伊	蘭	伊	蘭	ゼ	イ
二一	丁	抹	愛	南	蘭	白	丁	獨	伊	蘭	伊	蘭	ゼ	イ
二二	ピ	ク	サウ	南	蘭	白	丁	獨	伊	蘭	伊	蘭	ゼ	イ
二三	ピ	ク	西	濠	ビク	サウ	南	濠	ゼ	イ	南	濠	ク	キ

そのおもかげ

二三	ニウ・サウス・ウキル	南濠	ゼイ	サウ	ピク	サウ	丁	南濠	典	ブル	タス	クキ
二四	南濠	クキ	クキ	西濠	南濠	南濠	南濠	南濠	南濠	タス	ゼイ	南濠
二五	タスマニア	タス	サウ	南濠	ゼイ	タス	ゼイ	タス	ゼイ	ゼイ	典	露
二六	ラニウ・ゼイ	ゼイ	タス	ゼイ	タス	ゼイ	タス	ゼイ	タス	ゼイ	典	ブル

各性各年齢死亡率各國順位比較 其三 女

順位	總數	五〇—五五	五五—六〇	六〇—六五	六五—七〇	七〇—七五	七五—八〇	八〇—八五	八五—九〇	九〇—九五	九五—一〇〇
一	露西亞	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
二	西班牙	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
三	匈牙利	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
四	埃地利	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
五	ブルガリア	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
六	日本	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
七	伊太利	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
八	獨逸	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露
九	芬蘭	露	露	日	ブル	ブル	ブル	露	露	露	露

一〇	北米合衆國	白	米	伊	佛	愛	佛	西濠	日	獨	英	英
一一	愛爾蘭	英	愛	佛	典	典	芬	佛	日	佛	米	蘇
一二	蘇格蘭	米	蘇	蘇	米	西濠	蘇	伊	佛	日	蘇	芬
一三	佛蘭西	蘭	獨	丁	蘇	佛	西濠	英	獨	伊	芬	芬
一四	瑞西	蘇	英	獨	瑞	瑞	芬	ピク	白	米	蘭	蘭
一五	英虞蘭威爾斯	佛	白	米	丁	蘇	典	瑞	伊	ブル	白	タス
一六	白耳義	西濠	瑞	瑞	白	獨	ピク	白	蘭	サウ	蘭	サウ
一七	和蘭	瑞	丁	蘭	タス	蘭	白	クキ	クキ	西濠	タス	日
一八	西濠	愛	蘭	白	獨	獨	ピク	獨	芬	クキ	クキ	丁
一九	瑞典	典	佛	英	蘭	タス	蘭	西濠	ピク	サウ	典	典
二〇	丁抹	丁	ピク	西濠	南濠	丁	クキ	白	サウ	クキ	丁	西濠
二一	ニウ・サウス・ウキル	サウ	タス	ピク	西濠	南濠	タス	蘭	サウ	ピク	ピク	ピク
二二	ピクトリア	ピク	西濠	ゼイ	英	ピク	サウ	ゼイ	丁	ブル	ゼイ	ゼイ
二三	クキンスラ	クキ	南濠	クキ	ゼイ	英	典	丁	ゼイ	ゼイ	南濠	南濠
二四	タスマニア	南濠	サウ	サウ	ピク	サウ	南濠	典	タス	南濠	クキ	クキ
二五	南濠	タス	ゼイ	タス	クキ	クキ	タス	丁	南濠	典	典	露
二六	ラニウ・ゼイ	ゼイ	クキ	南濠	サウ	ゼイ	ゼイ	タス	南濠	西濠	ブル	ブル

第一篇 講演

第四 日本に於ける各性年齢別死亡率の推移

そこで日本に於けるところの死亡率がどんなに推移して来たかと云ふことを此處で
もう一つ見なければならぬと思ひます。

日本各年に於ける年齢別死亡率(總數)(人口千に付)

年齢別	三二—三三年 (第一平均)	三四—三六年 (第二平均)	三九—三三年 (第三平均)	四一—三六年 (第四平均)	三九—四三年 (第五平均)
總死亡	一九・八三	二二・三二	二〇・三四	二〇・五〇	二〇・八〇
〇—五	五〇・五六	五八・三二	五九・二五	五六・五六	六一・三五
再掲	〇—一	一六六・三三	一七一・六二	一七二・一三	一七五・一三
一—二	四・〇六	四・四〇	四・九一	三・〇三	四三・七三
二—五	一八・四〇	二二・四一	二〇・七六	一七・〇八	一九・八五
五—一〇	六・一七	七・一八	六・一六	六・〇三	五・六四
一〇—一五	四・一四	四・五八	四・二四	三・九七	四・二六
一五—二〇	六・六三	六・九五	六・八一	七・五八	八・二五
二〇—二五	八・七五	九・三六	八・六六	八・二六	九・九〇

二五—三〇	八・七七	九・一〇	九・〇一	八・六五	九・〇六
三〇—三五	九・六五	一〇・三三	八・七六	九・〇三	八・八一
三五—四〇	一〇・八一	一〇・八七	一一・四六	九・五二	九・八八
四〇—四五	一一・〇六	一一・四四	一一・四四	一一・六三	一〇・五〇
四五—五〇	一四・四八	一四・七一	二二・九六	一三・一九	一三・四九
五〇—五五	一八・九三	一九・〇三	一七・六七	一七・六二	一七・一九
五五—六〇	二四・三四	二八・二二	二二・六一	二四・六二	二四・〇六
六〇—六五	三七・二七	三六・九〇	三三・二七	三四・八八	三四・六七
六五—七〇	五三・九三	五五・九四	五三・八七	五六・〇四	五〇・四八
七〇—	二二・六七	二五・三七	一四・九八	二〇・八七	一〇・六四

日本各年に於ける年齢別死亡率(男)(人口千に付)

年齢別	三二—三三年 (第一平均)	三四—三六年 (第二平均)	三九—三三年 (第三平均)	四一—三六年 (第四平均)	三九—四三年 (第五平均)
總死亡	二〇・二八	二二・六四	二二・〇三	二〇・四六	二〇・三二
〇—五	五三・三三	六一・八〇	六二・六五	五六・六一	六三・三五

再掲	〇—一	一四・七七	一七・六〇	一八・二五	一八・七三	一八・四二
再掲	一—二	四二・九九	四六・五〇	四六・三三	三八・三五	四四・〇五
再掲	二—五	一〇・〇一	三三・七八	二〇・九〇	一四・七〇	一九・四五
	五—一〇	六・三〇	七・三一	六・三五	五・五四	五・四〇
	一〇—一五	四・〇八	四・四五	四・〇五	三・三一	三・四三
	一五—二〇	六・四三	六・六六	六・二一	六・五七	七・〇三
	二〇—二五	八・二〇	九・〇三	八・〇三	八・三九	八・九五
	二五—三〇	八・一一	八・五〇	八・二九	七・五〇	七・九四
	三〇—三五	八・二二	九・三一	八・二四	七・八三	七・五七
	三五—四〇	一〇・〇〇	一〇・一一	一〇・一六	八・五八	八・八〇
	四〇—四五	一二・三三	一二・六七	一二・二九	一一・五一	一〇・二八
	四五—五〇	一五・七四	一六・一五	一四・八六	一四・三五	一四・四四
	五〇—五五	二二・二二	二二・七一	一九・七五	一九・八三	一八・二二
	五五—六〇	二九・七三	三三・九九	二六・九五	二八・〇八	二七・二六
	六〇—六五	四一・八九	四三・八一	四二・四三	三九・四九	三九・五六
	六五—七〇	六〇・〇四	六三・一三	五九・六〇	六三・七四	五六・四八
	七〇—	一三二・一一	一三二・七一	一三三・〇五	一四一・八五	一二三・〇三

日本各年に於ける年齢別死亡率(女)(人口千に付)

総死亡率	一九・五二	一〇・七七	二〇・一一	二〇・四一	二〇・八七
年齢別	〇—五	四七・九九	五五・五五	五六・五九	五四・四三
再掲	〇—一	一三・六六	一五・五九	一五・九三	一六・一七
再掲	一—二	三九・六五	四三・六五	四四・五三	三六・七一
再掲	二—五	一九・三三	二二・一五	二〇・三二	一九・五四
	五—一〇	六・〇五	七・〇四	六・一七	五・六二
	一〇—一五	四・三四	四・三〇	四・五九	四・六四
	一五—二〇	六・八三	七・二三	七・三六	八・六一
	二〇—二五	九・三三	九・七六	九・一五	一〇・〇一
	二五—三〇	九・六六	九・六〇	九・八四	九・八四
	三〇—三五	一〇・五八	一一・一七	九・五六	一〇・一九
	三五—四〇	一一・六八	一一・四八	一一・六八	一〇・三〇
	四〇—四五	一四・三三	一四・七二	一四・六八	一四・四一
	四五—五〇	二二・二二	二二・七一	一九・七五	一九・八三
	五〇—五五	二九・七三	三三・九九	二六・九五	二八・〇八
	五五—六〇	四一・八九	四三・八一	四二・四三	三九・四九
	六〇—六五	六〇・〇四	六三・一三	五九・六〇	六三・七四
	六五—七〇	一三二・一一	一三二・七一	一三三・〇五	一四一・八五
	七〇—	一三二・一一	一三二・七一	一三三・〇五	一四一・八五

そのおもかけ

四〇—四五	二・〇〇	三・一九	一・三四	一・七九	一〇・二〇
四五—五〇	一・三四	一・三六	二・〇一	一・九六	三・三三
五〇—五五	一・六六	一・六一	一・五四	一・五三	一五・一六
五五—六〇	二・〇五	二・六九	二・〇〇	二・〇七	二〇・八〇
六〇—六五	三・六六	三・四三	三・四五	三・八五	三〇・一六
六五—七〇	四・四〇	五・四三	四・八三	四・九九	四四・九五
七〇—	一〇・七九	二〇・五六	一〇一・三五	一〇九・七五	一〇九・七二

年齢別死亡率累年ノ高低比較(男)

年齢	第一平均に對する第二平均の高(低)	第二平均に對する第三平均の高(低)	第三平均に對する第四平均の高(低)	第四平均に對する第五平均の高(低)	第一平均に對する第五平均の高(低)
〇—五	八・五六	〇・八五	四・〇四	四・七四	一〇・一三
再掲					
〇—一	三〇・二三	六・六三	〇・五二	二・五六	三九・五三
一—二	三・五一	〇・二〇	七・九七	五・七〇	一・〇六
二—五	二・七六	一・八二	六・二〇	四・七五	〇・四九
總死亡	一・三三	〇・六一	〇・五七	〇・二六	〇・四四

年齢別死亡率累年ノ高低比較(女)

五—一〇	一・〇一	〇・九六	一・〇一	〇・〇六	〇・九〇
一〇—一五	〇・三六	〇・四〇	〇・七三	〇・一一	〇・六五
一五—二〇	〇・三三	〇・四五	〇・三六	〇・四六	〇・五九
二〇—二五	〇・八三	一・〇〇	〇・三六	〇・五九	〇・七四
二五—三〇	〇・三九	〇・二二	〇・九三	〇・四四	〇・一七
三〇—三五	一・一〇	一・一四	〇・三三	〇・二六	〇・六四
三五—四〇	〇・一一	〇・〇六	一・五八	〇・三三	一・一〇
四〇—四五	〇・四四	一・三六	〇・三三	一・二四	一・九三
四五—五〇	〇・四一	一・一四	〇・五二	〇・〇六	一・三〇
五〇—五五	一・五〇	二・九六	〇・〇六	一・九一	三・〇三
五五—六〇	一・一七	五・〇四	一・一三	〇・九一	一・四六
六〇—六五	一・九一	一・三六	二・九四	〇・一三	二・五三
六五—七〇	二・〇三	二・五三	三・一四	六・二六	三・五六
七〇—	〇・六〇	一・二六	一・二〇	二・八二	九・四〇

年齢別	第一平均に對する第二平均の高(低)	第二平均に對する第三平均の高(低)	第三平均に對する第四平均の高(低)	第四平均に對する第五平均の高(低)	第一平均に對する第五平均の高(低)
總死亡	1.125	0.666	0.311	0.455	1.355
0—5	7.56	1.04	2.12	5.54	1.196
再掲	28.93	2.34	3.25	3.53	36.05
1—10	4.00	0.87	1.81	6.71	3.72
11—20	2.92	0.84	0.77	1.90	2.21
21—30	1.00	0.82	0.34	0.82	0.14
31—40	0.46	1.10	0.03	0.46	0.86
41—50	0.40	0.13	1.15	0.89	2.72
51—60	0.40	0.11	0.03	0.46	0.86
61—70	0.40	0.61	0.82	0.86	1.56
71—80	0.60	0.34	(+)	0.34	0.53
81—90	0.59	1.61	0.44	0.10	0.49
91—100	0.33	0.33	1.12	0.41	0.67
101—110	0.19	10.85	0.03	1.44	1.20
111—120	0.10	1.14	0.06	0.34	0.83
121—130	0.00	0.22	0.34	0.82	0.14
131—140	0.46	0.10	0.03	0.46	0.86
141—150	0.40	0.19	0.03	0.46	0.86
151—160	0.33	0.33	1.12	0.41	0.67
161—170	0.59	1.61	0.44	0.10	0.49
171—180	0.33	0.33	1.12	0.41	0.67
181—190	0.19	10.85	0.03	1.44	1.20
191—200	0.10	1.14	0.06	0.34	0.83

年齢別死亡率男女比較

年齢別	男の第一平均に對する女の第一平均の高(低)	男の第二平均に對する女の第二平均の高(低)	男の第三平均に對する女の第三平均の高(低)	男の第四平均に對する女の第四平均の高(低)	男の第五平均に對する女の第五平均の高(低)
總死亡	0.95	1.13	1.17	0.14	1.00
0—5	1.64	4.94	0.87	0.22	1.24
6—10	1.66	1.87	1.60	0.21	1.50
11—15	1.01	3.59	3.16	3.03	3.44
16—20	1.11	3.59	3.16	3.03	3.44
21—25	2.56	9.22	6.40	0.04	0.14
26—30	2.56	9.22	6.40	0.04	0.14

年齢別	男の第一平均に對する女の第一平均の高(低)	男の第二平均に對する女の第二平均の高(低)	男の第三平均に對する女の第三平均の高(低)	男の第四平均に對する女の第四平均の高(低)	男の第五平均に對する女の第五平均の高(低)
總死亡	0.95	1.13	1.17	0.14	1.00
0—5	1.64	4.94	0.87	0.22	1.24
6—10	1.66	1.87	1.60	0.21	1.50
11—15	1.01	3.59	3.16	3.03	3.44
16—20	1.11	3.59	3.16	3.03	3.44
21—25	2.56	9.22	6.40	0.04	0.14
26—30	2.56	9.22	6.40	0.04	0.14

一〇—一五	④	0.16	④	0.25	④	0.24	④	1.31	④	1.27
一五—二〇	④	0.04	④	0.57	④	1.15	④	2.04	④	2.73
二〇—二五	④	1.12	④	0.73	④	1.11	④	1.63	④	1.93
二五—三〇	④	1.55	④	1.10	④	1.55	④	2.35	④	2.53
三〇—三五	④	2.37	④	1.86	④	1.42	④	2.46	④	2.53
三五—四〇	④	1.66	④	1.35	④	1.52	④	1.71	④	2.33
四〇—四五	④	0.23	④	9.52	④	0.04	④	0.24	④	0.22
四五—五〇	④	2.60	④	2.92	④	2.24	④	2.24	④	2.13
五〇—五五	④	4.65	④	6.10	④	4.27	④	4.51	④	2.96
五五—六〇	④	6.67	④	7.30	④	6.75	④	7.01	④	6.46
六〇—六五	④	9.23	④	9.49	④	9.96	④	8.68	④	9.10
六五—七〇	④	2.26	④	2.21	④	2.27	④	2.27	④	2.53
七〇—	④	2.23	④	2.25	④	2.20	④	2.10	④	2.11

此處に掲げましたのは明治二十一年から最近までの五年毎に平均したる其各年齢者の死亡率であります、日本に於て年齢別の死亡率を知ることの出来ましたのは、「明治二十一年が初めてあります、明治二十一年以前には年齢別の死亡といふものは分らな

かつた、尤も明治十九年に年齢別死亡の調査を見たことがありますがけれども、其調査は生年に依り調べてございますので、今日の年齢別死亡即ち満年の死亡と同一に見ることが出来ないであります、夫故に二十一年を先づ年齢別死亡の起點として見て行かなければなりません、近年になりましたからは人口調査が毎五年に一回宛行はれることになりまして即材料は五年毎に存します、此處に最近のものとしては明治四十一年の調査があります、其人口に對して三十九年から四十三年の即ち四十一年を中心としました五年間の死亡の平均を取りまして、さうして各年齢者の死亡率を見ました、それから五年宛前へ遡りまして最初の二十一年からは二十三年までの三ヶ年の平均を取りました、三ヶ年以上延ばす事が出来ませぬために三ヶ年の平均を取りまして之は二十二年の人口に比しましてさうして五つの各年齢者の死亡率を取つて見ました、さう致しますると前掲の如き形勢になるのであります、其中青年壯年の事實を見ますると初めの二十一年から二十三年の平均死亡率に於ては青年壯年の男の死亡率が、女の死亡率よりも概して低い、即ち此時分からも既に十歳以上四十歳迄の青年壯年の女の

死亡率がどの年齢者に於ても男より遙に高かつた、二十八年から次の五年平均を見ますと此男女の開きが幾らか狭くなつたやうでありますが、矢張り女の死亡率が高い、それから二十九年より三十三年迄此頃から日本の死亡の統計も稍完全に近いものを得られるやうになりましたが、此平均までは五歳より十歳といふ階級に於ては女の死亡率が男の率よりも低くかつたのであります、それから以後の二平均率は女の死亡率が此階級まで高くなりました、十歳以上四十歳に至るまでの各年齢階級は總ての平均に於て女の率が高い、而も其高い點は二十五歳から三十五歳の二階級に著しかつたのであるが、第三の平均に至りて若い階級の較差が幾分か大になつて來た、それから第四の平均である三十四年から三十八年を見ますと、此若い階級の較差が益々大きくなつて居ります、又更にもう五年下りました、三十九年から四十三年までの第五の平均を見ますと一層較差が大きくなりまして、青年壯年に於ける男の死亡率よりも女の死亡率が頗る高いことになつて來ました。

右各年間の死亡率の推移をもう少し著明に知られるやうに各平均の男の死亡率も女の死亡率も第一の平均を水平線に描きまして、之に對する男は男、女は女の第二の平均を曲線に描き、又第二の平均を水平線に描きて之に對する第三の平均を曲線に描き、第三の水平線に對し第四の曲線、第四の水平線に對し第五の曲線を描きますと能く各年の推移が知れます、即ち之に依つて見ますと二十一年より二十三年までの第一平均に對する二十四年から二十八年の第二平均は各年齢とも餘程死亡率が高くなつて居ります、而して又二十四年から二十八年此第二平均を水平線に描きまして次の第三平均を曲線に描きて按排して見ますと、是は又各年齢共に第三が低くなります、どうして斯う妙な現象が見えるかと云ふと此第三平均なる二十九年から三十三年といふ年は普通の年でありましたが、第二平均の二十四年から二十八年といふ年は先刻申上げた通り赤痢の大流行や又は痘瘡の大流行やが頻年にありまして、爲に非常に高かつたのでありますからして自然斯様な現象があつたのであります、扱て平靜の年になりました以來を比較すると二十九年から三十三年の第三平均を水平線にして次の第四平均を曲線に描いて見ますと、男に於きまして此時頃から十五歳より二十歳、二十歳より

二十五歳と云ふ兩年齡級は前の平均よりも次の平均の方が幾分か死亡率が高くなつたといふことが知られる、而して三十四年から三十八年の第四平均に對する三十九年から四十三年の第五平均を見ますと、一層著明になりまして、十五歳から二十歳、二十歳より二十五歳之にもう一階級進みました二十五歳から三十歳までが矢張り前の平均から見ると後の平均の死亡率が高くなつて居ります、之に依つて見ますと材料無き以前のことは素より分りませぬが、二十一年以來最近までの間といふものは死亡率が或は一上し一下して來たのでありましたが、近年になりましたからは各年齢、就中青年壯年に於きましては死亡率が全體に高くなりました、而して二十一年から二十三年の第一平均に對する最近の二十九年から四十三の年第五平均の高低を見ますと、前後の年齢に於て非常に低くなつたものがあるのにも拘はらず、矢張り十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳といふ二階級の年齢者は高い、以上は男に就ての比較であります、但し又之を女に就て見ますと一層注目しなければならぬ事があるやうであります、即ち女に於きましては矢張り以前傳染病流行の時代は或る年は高く或る年は低くかつ

た、甚だ變動多きものでありましたが、二十九年から三十三年の第三平均に對するところの第四平均（三十四年——三十八年）を見ますと、十五歳より二十歳といふ階級に於て非常に高くなつて、其上の階級も又其上の階級も皆高くなつて居ります、其次の比較即ち第四平均に對する第五平均の比較も亦何れも高くなりましたし、それから二十一年から二十三年の第一平均に對する三十九年から四十三年の第五平均の高低を見ますと是亦非常なる高さになりました殊に十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳といふ年齢者に於ては巨然山を爲す非常なる高さに上つて居ることが見えます、又重複するやうであります、各平均の死亡率の男に對する女を容易く見んが爲めに各平均ともに男の率を水平線と爲し之に配するに女の曲線を以てして其高低の較差を見ますと、二十一年より二十三年の第一平均に於ては女が男に比して多死なる歳は三十歳より三十五歳でありましてそれが男よりも非常に高く見えます、其次二十四年から二十八年の第二平均に於ても女は矢張り三十歳から三十五歳といふ階級の死亡が男に比して最も高く、二十九年から三十三年の第三平均に於ては嘗て著明でなかつ

た若い階級が男に比して多死なることが見えそめて來ました、更に三十四年から三十八年の第四平均になると以前の三十歳より三十五歳といふあたりの率が男の率よりも矢張超過して居りますが、殊に若い階級の女の死亡率が著しく高くなつたことが見える、最近の第五平均に於きましては一層高くなつて、男の死亡率よりも女の死亡率が青年壯年の總てに於て非常に高くなつて居るのであります、それを纏めて一覽し得られるやうに特別な圖も描いて見たのであります、餘り著明でもございませぬから掲げませぬ。

第五 各性年齢別罹病率と死亡率

それからは古い材料であります、滅多にない貴重の材料だと思ひますから序に御覽に入れやうと思ひます、是は明治二十三年から三十年まで屯田兵村の北海道にございました時に老幼男女の總てが屯田兵村に住居して居まして、其疾病に罹つた場合には配置せられて居る軍醫に依りて治療せられて、賣藥も殆ど入込まないと云ふ屯田兵村の病者並に死者の數を軍醫をして記録せしめて置いて之を徴せられた、當時の陸

軍省醫務局長たりし石黒男爵の調査であります、其屯田兵村の調は年齢の區別が特殊になつて居りましたして小兒の年齢をのみ細別して、成年以後の年齢は纏めて大きく輯約してありますから、一寸今日のものと比較し難くいやうであります、大體斯ういふものが出來ました。

屯田兵村に於ける一年平均一日の現員百に付罹病者及死亡者

(自明治二十三年至同三十年平均)

罹病率	一歳 未滿		三歳		七歳		一五歳		三〇歳		四〇歳		五〇歳		六〇歳		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
罹病率	八二・七	九二・〇	七四・四	六二・六	八七・〇	八二・二	八二・〇	八二・四	七二・〇	七二・〇	七二・〇	七二・〇	七二・〇	七二・〇	七二・〇	七二・〇	六六・〇
死亡率	一三・五	一・九	〇・二	〇・四	〇・七	一・四	一・〇	一・九	一・〇	一・九	一・二	一・二	一・二	一・二	一・二	一・二	一・七

即ち屯田兵村の平均一日の現在員が幾らあるかといふことを男女の各年齢に就て調べました、其各年齢に別けた者の男女の各百に就て死亡が幾何あつたと云ふことを見ますと、最も幼少の者は男が多く死亡して居ります、一歳から三歳は男女等位、三

歳から七歳、七歳から十五歳は共に男が高く、十五歳より二十歳といふところで女が少しく高くなつて、二十歳より四十歳と云ふところでは女が著明に高く、四十歳より五十歳で男女の線が交叉して爾來女の死亡者が低くなつて居ります、此形は私共の今日有つて居ります日本全國の死亡率の形と殆ど同一でありますから、此調査には恐らく大なる誤はなかつたことと思ひます、而して次の平均一日の現在員に對する一ヶ年間の罹病者即ち病に罹つた者の數を算へまして比例を取りましたものを觀ますと、二十歳より四十歳といふ働の中心となるべき年齢者は、前の死亡率に於ては、女の率が男よりも高かつた、然るに罹病率に於ては男の方が遙に多く病氣に罹つて、女の病氣に罹る者は甚だ少ない、又小兒を見ますると矢張り非常に死亡率の高い最幼者は寧ろ罹病率低く又老年になると死亡率が高くなるにも拘はらず罹病數が甚だ低い、中年の者は死亡する割合は少ないが、併ながら病氣に罹る者が多いと云ふことが知り得られました、それと同時に女は病氣に罹ることが男よりも割合に少ないけれども、死亡するところが男より多い、妙な事實のやうであります、之を能く吟味して見ますと寔に然るべきことのやうに思はれます。

第六 年齢別死亡率の各性比較

附日本年齢別人口の價値

前に申ました二十六ヶ國の材料を再び用ゐまして各國の男女の各年齢別死亡率を線に描きましてさうして其各國毎に日本の同一線と對照しまして本邦が各國に比してどんな状態であるかと云ふことを知らうと思ひました、之に依つて觀ますと日本よりも總死亡率の高い邦國即ち露西亞、奧太利、匈牙利、西班牙、ブルガリアの五ヶ國に於てブルガリア以外の四ヶ國は總死亡率は確に日本より高いにも拘はらず、或る年齢階級の死亡率は日本が著しく高い、即ち例を露西亞にとりていふと總死亡率は日本の二〇・八〇に對する二八・六一で大いに高いにも拘はらず十五歳以上二十歳者は日本の八二・五に對する五・八二同二十歳以上二十五歳者は九・九〇に對する七・五九、二十五歳以上三十歳者は八・九四に對する八・四八で日本の青年及壯年者は適に露西亞より高い死亡率を有つて居る殊に之を男女に別ち比したる場合日本の女の率の著しく高いこと

が知れます、要するに露西亞の死亡率の高いのは小兒の死亡率と老年の死亡率の高い爲めでありまして幼少の者は日本より露西亞が高い、五歳といふ階級でも露西亞が高い、十歳より十五歳といふ階級で露西亞と日本とが最も近くなつて居る、是から以後は日本の男女の死亡率が高くなること前述の通りで、殊に日本の女の死亡率が高い、又埃太利を見ましても總死亡率は日本より高いのでありますが此年齢の十五歳から四十五歳までといふ年齢者に於きましては男女ともに日本より低い、殊に女の方が非常に低いのであります、匈牙利は餘程女の死亡率の高い邦國でありますけれども、日本の女の線に比しますと青年壯年は日本より高くはありませぬ、西班牙は壯年の男の率が高いそれは日本よりは高いが併し全體には矢張り日本の女に比しますと餘程低い、其外の歐羅巴の諸國の中スカンデナヴィヤの諸國とか或は獨逸、佛蘭西、英吉利邊を見ますと云ふと、是は又非常な違でありまして、無論謂ふまでもなく日本よりも此青年壯年者に於ては非常に彼等の邦國が低い、殊に獨逸などになりましたは此青年者及壯年者の死亡率が餘程低くなるやうであります、即ち青年壯年の死亡率は甚だ低く殆ど

日本の半ばにも足りないのであります、而して獨逸の男女の率は此年齢に於て高低錯綜して居りますが、日本の男女の率は著明に女が高くなつて居ります、それから英吉利を見ても其植民地たる南洋諸國を見ても殆ど比較になりませぬ程に青年壯年に於ける日本の死亡率が非常に高い、それから日本は總死亡率に於て女の死亡率が男よりも少しく高い、それと同じやうに女の死亡率が男の死亡率より高い國を拾上げますると先づ第一に巴爾幹半島のブルガリヤが見えます、此國は大分此年齢者の死亡率が高い、或は日本を凌駕して居る所がある、併し日本がブルガリヤと酷似すといふことは餘り名譽でない、又伊太利を見ますと、伊太利は日本を凌駕しては居りませぬけれども、此年齢者に於て男の率よりも女の率が高いと云ふことだけは見えて居ります、又愛爾蘭を見ますと、十五歳から二十歳といふ階級に於て女の率が男よりも高くなつて居ります、尤も愛爾蘭の數は全體としては直ちに結論を與へることの出来ない數がありますけれども、大體に斯ういふやうな傾向が見えます。

六國に於ける各性青年壯年の死亡率並に

其男に對する女の高(+)低(-)

國名	性別	年齢階級						
		五歳以上 一〇歳迄	一〇歳以上 一五歳迄	一五歳以上 二〇歳迄	二〇歳以上 二五歳迄	二五歳以上 三〇歳迄	三〇歳以上 三五歳迄	三五歳以上 四〇歳迄
日本	男	五・一〇	三・四三	七・〇三	八・九五	七・五六	九・五四	
	女	五・九〇	五・一〇	九・五〇	一〇・八八	一〇・二四	一〇・八六	
英 國	男	四・〇六	二・二八	三・四九	四・七七	六・三六	一〇・九四	
	女	四・一六	二・四〇	三・二二	三・九四	五・四四	八・八四	
英 國 威 爾 斯	男	四・〇六	二・二八	三・四九	四・七七	六・三六	一〇・九四	
	女	四・一六	二・四〇	三・二二	三・九四	五・四四	八・八四	
佛 蘭 西	男	四・六九	三・〇〇	五・〇八	八・一〇	八・一九	一一・五〇	
	女	四・八一	三・五五	五・二七	六・八八	七・七五	九・〇八	
獨 逸	男	四・四七	二・五九	四・〇六	五・五七	六・一六	一〇・一〇	
	女	四・五八	二・七五	三・七二	四・八六	六・四三	八・二四	
伊 太 利	男	五・九八	三・一五	四・六八	六・七三	六・七三	八・四四	
	女	六・五五	三・七六	五・四二	六・九二	七・七七	八・八七	
北 米 合 衆 國	男	五・一八	三・二九	五・二八	七・七四	九・〇五	一一・〇五	
	女	四・九八	三・二二	五・一一	七・〇二	八・四二	一〇・三三	
北 米 合 衆 國	男	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇七	一・〇〇七	一・〇〇七	
	女	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇七	一・〇〇七	一・〇〇七	

甚だ諄く申上げるやうであります、此四十五歳あたりまでの年齢者の男女の死亡率がどんな風になつて居るかと云ふことをもう一步進んで、さうして日本と各國とを比較して見る必要がある。

是は日本と英吉利獨逸、佛蘭西北米合衆國、伊太利の五歳より十歳、十歳より十五歳、十五歳より二十歳、二十歳より二十五歳、二十五歳より三十五歳、三十五歳より四十五歳の即ち青年壯年の男の死亡率と女の死亡率とを比較し男に對する女の高低を見たとあります、斯様に致しますと何人が御覽下さいましたも直に分りますやうに此五歳より十歳といふ階級は日本を始めとし伊太利之に次ぎ其他英吉利に於ても獨逸に於ても佛蘭西に於ても獨り北米合衆國を除くの外は皆女が幾分か高い、其上の年齢十歳以上十五歳に於ても英吉利、獨逸、共に女の率高く伊太利、佛蘭西は是等二國より

も遙に高く日本は伊佛の約三倍高く此年齢に於て北米合衆國は反對に男の率が高い、それから以上になると英、獨、米の三國は皆男の死亡率が高く女の死亡率が低い、佛蘭西はモウ一階級だけ女の死亡率が高いが、二十歳以上は總て男の率が高い、然るに日本と伊太利とは女の死亡率が高い、殊に日本は伊太利の高さを超絶して遙に女の死亡率が高い。

右の事實に依れば伊太利の青年壯年の各性死亡率は日本のそれと頗る能く似て居る勿論伊太利の女の死亡率が男を超過して居ることは日本の如く著しくはありませぬけれども、其大體の形が日本と同じ趨勢である、何故に伊太利が日本と同じ趨勢を取るか、是れ餘程注意をしなければならぬ重要な點であると思ひます。それから序に申上げて置きますが、唯今の表の如き甚だ妙な算へ方をしたものであると御覽になつたか知れませぬ、即ち二十五歳までは五歳階級にして置きながら二十五歳から以上を二十五歳より三十五歳、三十五歳より四十五歳、斯ういふやうに十歳階級に算へましたとです、是は何故斯んなことをしたのかと申しますと御承知の通り本邦以外の五國の人

口は皆センサスの結果に依つたものであるからであります、それは又何故かと申しますと、獨逸の人口調査の如きはさう甚しいとはないうやうであります、英吉利の調査はもう既に人口の年齢が餘程怪しい、殊に亞米利加に至りては甚しいものでありまして一歳別の人口の年齢の如きは殆んど信を措くに足らないのであります、亞米利加は年齢を満年で尋問するから或極りの年の前例へば二十九歳とか三十九歳とかいふ年齢が非常に膨脹しまして、極りの年である三十とか四十とか云ふ年が甚だ少なくなる、又獨逸は生年を尋問しますから言ひ易い年例へば千九百年とか千八百九十年とかいふ年が著しく膨脹する傾向がある、何故に斯様のことがあるかと申しますと所謂センサスは個人の申告に基くものであるからでありまして若しも個人の申告が二十歳といふ答をするに實際は二十一歳の者でも二十歳として算へられる、又若し二十三歳の者でも、二十五歳と言ひますればそれは二十五歳の者として算へられます、それ故に生年の言ひ易い年の數が多くなる、又極りの年の一段階を超えるといふこと例へば二十九歳から三十歳に越へるとか三十九歳から四十歳に越えるといふことは餘程憶切なもの見えま

して其段階である極りの年の前の一年が膨脹します、然るに日本の現行の人口調査は帳簿に依つて調べますのでありますから、諸般の點に完全を缺きますが、唯此年齢の一事は初めの帳簿の記載に誤があれば仕方があります、それに誤がないと全く誤のない数が毎回の調査に依りて得られます、日本の第一回の調査から生年によりて第二回第三回と調査を重ねて見ますとどの年齢者も前の調査より超過して出るとは全くない、第一の調査から第二の調査までに其屬する年齢の死亡者だけが幾らか少なくなるのみであります、生年別と爲したる幾回かの調査人口を線を以て重ね描くに皆整然として序を爲し一も後の調査が前の調査を超過することはない、之を他國の事實に見ますと前の調査よりも後の調査が超過して居るもの若くは陥回して居るもの等甚だ紛糾して居ります、それは日本の本籍人口のやうに殆ど移出轉入のない國民であります、幾らか紛糾し易いのであります、けれども全體に於て個人の申告に待つたものは其年齢は餘程研究上怪しいものだと考へなければなりません、そこで英吉利などの人口の年齢に關する調査を致しますには成るべく極りの年齢で切らない

様にして何時でも五といふところで切るものが多い、それは二十五歳までは餘り人爲の變動がないが二十五歳以上になると人爲の變動が甚だしい、殊に三十歳四十歳等の極りの年齢に於て頗る大なる變動がある、夫故に比較的誤謬を少なくする爲めに五といふ數で切つた十歳階級にして見ることを普通として居ります、さう致しませずに總て五歳階級で年齢を見ても致しますると非常なる過誤が出来るからだと思ひます、されば各國比較に英吉利、亞米利加等の數を加へて比較研究致します場合には二十五歳から以上は五といふ數で切つた十歳階級で觀察することが安全であるやうであります、即ち此理由に依りまして此處でも二十五歳から三十五歳、三十五歳から四十五歳といふやうに五で切りまして過誤の多い高年の不同なる年を包含せしめて、其階級内の相殺によりて過誤を少なくするやうに致して居ります。

第七 日本と伊太利との相似點

今申ましたやうに日本人の此年齢に於ける女の死亡が男を超過して遙に多いと云ふことに就ては伊太利といふ相似たる國がありました。されば其伊太利を詮索して行きま

したならば或は日本の此事實を知る上に何等かの便宜になるものがありはせぬかと考へます、仍て伊太利の事實を詳しく調べたいと思ひまして、伊太利から送て参ります人口の動態調査書を段々見ますが、如何せん私共が手にし得るものは洵に粗雑な調査より外はありませぬので、其調に依つて何等かの事を見出すといふことが甚だ難いやうであります、併し唯一つ便りになることが見出されましたことは、男女の死亡者を死亡原因に依りて分けて見ます、而して如何なる死亡原因が伊太利に多いと云ふことを見ましますると御承知の通り伊太利にマラリヤが非常に多い、就中羅馬附近から長靴の底部地方、シチリア、サルデニア二島等に多い、又伊太利の地方病としてペラグラといふ病氣がある、それはアドリア海の底部ベネチア地方だけに見える疾病であります即ち此二病は伊太利の特徴であります、併しマラリアもペラグラも死亡率全體を動かす程に非常に多き死亡者を出すものでない、それ故に此二病あるが爲めに伊太利に死亡者が多いと云ふことも一寸言兼ねます而して尙ほ詮索しますと伊太利に於ても結核が重大の死亡原因であることは他國と同一でありまして、而も其結核が他國

と趣きを異にするものがあることを知り得ました、併し伊太利は必ずしも結核の多い國ではありませぬ、歐羅巴で一番結核の多い國は匈牙利、埃太利、佛蘭西等であらうと思ひます、就中埃太利、匈牙利は結核の多いことに依つて名高い、伊太利は埃太利等に比しますと結核死亡数は遙に少ない、然るに結核死亡は歐羅巴の諸國何處を見ましても男女を比較すれば女の結核死亡は男の結核死亡より少ないのが常である、何時でも男の方に結核死亡が多い、尤もそれは現代の事を申上げるのでズツと古い以前に於ては多少違があります、現代に於ては結核で死亡する者は男が多く女が少ない、然るに伊太利に於ては女の結核死亡が男のそれよりも多い、勿論伊太利の人口の總數から云ふと、女が多いから絶對數の女が多いことは當然であるが、人口に比例して見た場合に女の結核死亡率が男の結核死亡率よりも伊太利に於ては高いといふことは餘程注意すべき點であると考へます。

第八 各性大年齢別死亡率の比較

それから次に甚だ蛇足のやうであります、是も調査の一手順でありますから御覽

に入れて置きます、それは日本及歐洲諸國の各性年齢別死亡率を極粗く總て十歳階級と爲して青年壯年の分のみを摘出したのであります、何故に斯様な粗い調査をしたかと云ふと、此統計の調査は——甚だ烏滸がましいことを申上げるやうであります、原表を調製致しまする場合には成る可く細密なる點から先きに調製致しまして、さうして段々それを輯約して大きい粗い表を作るのでありまして、統計の原表製作に當る人は常に此心掛けがなくてはなりません、然るに統計の數を研究します場合には原表調製と反對に先づ粗いものから見てそれから段々細かな點に分解して行かなければならぬやうであります、然るに能く世間の説に統計の研究は細密なる事から先きに注意してやらねばならぬと云ふやうなことを聞きます、例へば死亡率の研究などを致す場合に何時でも精密なる死亡率を製作して、さうして其研究をして行くものであるやうに思ふて居る人があります、併しそれは恐らく成功しない、即ち目的を達することが難いのであります、丁度生物學者が何か生物を調べるといふやうな場合に、先づそれが肉眼で見られるものであるならば其見られるだけは肉眼で見える方が最も確

である、それから肉眼で見えない微細な點を詮索するためには之を蟲眼鏡で見る、更にそれをもう少し細かく見たい爲めに顯微鏡で見る、更に一層細かに其生物を構成して居る組織又は細胞を見るときには初めて油浸装置の擴大度の強い顯微鏡を用ゆることが必要であると思ひます、初めから油浸装置の六百倍とか千倍とかの顯微鏡で見ますと、例へば昆蟲の四肢體を見るときとして唯一の眞黒のものが見ゆるばかりで耐えて要領を得ないことになります。

されば死亡率の研究を致しまするのに最初から保險學者の用ゆるやうな精密の死亡率で見ますと蓋し大體をも察し得ないことが多くございます、それ故に先づ初めには極く粗いものを見まして、其粗いものから段々精密に細別して行く、丁度化學者が水を検査するのに、初めは粗いところの理學的性状から見てそれから定性的に成分を探り更に進で精密なる定量分析に移るやうなものであります夫故に私は此問題の研究に入る最初に斯ういふ粗製の死亡率から見て大體の當りを附けたのであります、即ち此粗い死亡率で見ますと日本人の男女の死亡率は五歳から四十五歳まで整然と女高く男

低く四十五歳を越へると、初めて男の死亡率が高くなる、其女高く男低き間は此粗き各年齢階級共に殆ど平等に間隔を保ちて而も女の死亡率が高き割合は決して尠少でないのであります、此状態を見て今まで統計に従事する者、或は醫學に關係ある人達がどういふ評論を下して居るか、私は餘り注意して居らなかつたやうに思ひます、唯一人統計局囑託である矢野恒太氏が其有名な著書『日本人の生命の研究』中に斯ういふ變つた曲線に就て注意して居られます 即ち——四十歳以後漸く分娩の危険に遠ざかり次で月經閉止期となり兒童の哺育を了り其後は男子よりも却て危険少き平穩なる生活に入るが爲なるか——又——八歳乃至四十二歳の間は男子よりも高き死亡率を示す（主なる原因は生殖作用にして生殖時期を過ぎたる後は生存競争の爲に男子の死亡率却て女子に超過するものか）——と斯う言ふて居られます、此文を其まゝに解説致しますと女は四十二歳位までの間は男よりも高く死亡する、其高い死亡は何であるかと云ふと、女には妊娠、産といふことがある其妊娠、産があるが爲めに女は男より多く殊に若い年齢に於て死亡する者が多いのだと斯ういふことに歸さなければならぬと思ひ

ます、若し日本人の女の死亡の高いことを斯様に妊娠、産に因すると假りにしましたならば、歐羅巴の諸國に於ても女が妊娠、産のあることは同然であるが、其歐羅巴に於てはどうであるか、そこで此粗い年齢別死亡率で比較しますといふと英吉利の如き五歳より十五歳といふ階級に於きまして僅に女が高いだけで爾來男の死亡率が總て女よりも高く段々年齢の長ずるに従て男女の間隔が大きくなる即ち女の死亡率が男よりも段々低くなる、それは佛蘭西に従ても大體英吉利と同でありますし、又獨逸の普魯西を見ましても二十五歳より三十五歳の階級で男女殆ど等位となるだけが相違で、是亦大體に於て女の低いことは同一であります、其他諸國の如きは一度男女の線が結ばれて一寸女の率が高くなつたりして居りますけれども、其高い高さは極く僅で大體に女が低く日本の様のことはない又瑞典を見ますと大體に於て英吉利と同じであります、其外芬蘭など見ましても略ぼ同じであります、其他歐洲殆ど總てが日本と異なりて英、佛、獨と同一であるか若くはそれに近い形を呈して居ます——此死亡率の曲線を研究するものに男女が幾度交叉するか、どの年齢階級で交叉するかと云ふことは

興味のある研究事項であります。今はそれに論及しません——各國の此粗い死亡率の線は大體に於て日本とは餘程違つて居ります。併し全くないのではない唯一の日本に近いものがある、それは伊太利の死亡率であります。伊太利の男女の死亡率は日本の如くに非常に間隔はありませぬが、大體の形が日本に近い状態を呈して居ります。それから又バルガン半島のブルガリアも女の或る年齢の死亡率が非常に高い、それからセルビアもブルガリアに似たる形を呈する、併しそれは二十五歳より三十五歳といふ年齢階級に限つて高いので日本とは趣きを異にする、日本の如く整然として女の率の高いのは殆ど無い、是が日本の死亡の重大なる特徴の一であります。

第九 各國總死亡率の推移と年齢別死亡率

各國の死亡率が如何に推移したか、それは年齢別死亡率と如何の關係を有するか、それを觀察しようと思ひますが、材料の關係上總死亡に就て見ることにしました、それから英吉利は一千九百十年に終る七十年間の材料と又其中の同く近き四十年間の材料とで二様に見、佛蘭西は一千八百七十一年から千九百二年に至る三十一一年間の材料

で見、獨逸は千八百七十二年から千九百十一年に至る三十九年間の材料 日本は明治二十一年から同四十三年に至る二十二年間の材料で見たのでありまして、其觀察の年間に於て死亡率は一上一下したではありませんが、結局最初の觀察年と最後の觀察年とが甚しき變動現象の年でなかつたならば、其差が即ち觀察年間に於ける漸減又は漸増の總量だと見てもよい、乃で茲には最初の年の百に對する最後の年の指數を求めて此指數の増又は減の總量を觀察の年數で除して一種の平均一年の増減歩合を算出しました、此歩合を比較しますと左の如くであります。

日、英、佛、獨に於ける觀察の最初の年の百に對する最後の年の指數に依りて算出したる平均一年の死亡率増減歩合 (増) 減

年 齡 別	日 (二十三年間)	英吉利 (七十年間)	同 (四十年間)	佛蘭西 (三十一一年間)	獨逸 (三十九年間)
總 死 亡 率	0.256	0.419	0.637	0.216	0.963
0—五 歲	0.880	0.433	0.666	—	—

〇	一	一・二九四	一	一・二四一	一	〇・八〇五
一	二	〇・二九五	一	一	一	一・三〇三
二	五	〇・三五八	一	一	一	一・六六六
一	五	〇・三三三	一	一	一	一・四〇三
五	一〇	〇・三九五	一	〇・八五七	一	一・二二三
一〇	一五	〇・三三三	一	〇・八六三	一	一・〇一四
一五	二〇	一・一一一	一	〇・八五七	一	一・一一一
二〇	二五	〇・五九七	一	〇・八四五	一	一・〇九七
二五	三〇	〇・〇九六	一	〇・七二二	一	一・〇二二
三〇	三五	〇・四八八	一	一	一	一・〇五七
三五	四〇	〇・三九一	一	〇・五〇九	一	一・〇二六
四〇	四五	〇・五九四	一	〇・五〇九	一	一・〇五七
四五	五〇	〇・三一一	一	〇・三二七	一	一
五〇	五五	〇・四一八	一	一	一	一・〇三六
五五	六〇	〇・〇三三	一	〇・〇八六	一	一・〇三三
六〇	六五	〇・〇六一	一	一	一	一・〇八八
六五	七〇	〇・二九〇	一	一	一	一・〇三九

七〇	七五	〇・〇八四	一	〇・一〇九	一	〇・二四六	一	〇・〇八五	一	〇・四三七
七五	八〇	〇・一五一	一	〇・一四四	一	〇・二六四	一	〇・〇八七	一	〇・三九三
八〇	八五	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八〇	八五	〇・九七七	一	一	一	一	一	〇・三三八	一	〇・一九八
八五	九〇	一	一	〇・一九一	一	〇・三六五	一	一	一	一

右は一種の相対的歩合でありますから之を以て死亡率低下又は上昇の量を知るの料にはなりません、又此比較の方法が決して完全無缺のものでないとは私も信じて居りますが、併し大體を窺ふの料としては強ち棄つべきものでないとも思ひます、仍で其歩合を見ますと英吉利の七十年間に於ては死亡率全體の一年平均低下歩合が〇・四一九でありましたが、近き四十年間を観ますと年々の平均低下歩合が〇・六三七になつて居ります、故に英吉利の總死亡率は七十年間に於ても段々低下して居るが、近き四十年間には七十年間の夫よりもより以上に長足の歩武を以て低下したことが見られます、然るに佛蘭西はどうかと云ふと三十一年間の觀察によると一年平均〇・二一六の低下を爲して居る、それは英吉利の〇・六三七に比しますと殆ど三分一しかなく、さ